第3章

陸上研修・船上研修の成果

陸上研修・船上研修の成果

今年度は六日間の陸上研修と、訪問国活動及び給油・給水のために寄港したシンガポールを除く 28 日間の船上研修が行われた。昨年度まで実施されていた公式プログラムに加え、参加青年がお互いから学び合う時間を拡充するため、PY セミナー、スキルセミナー、クラブ活動などを実施する午後の研修の時間帯を増やした。参加青年同士が自身の経験や専門知識を共有する PY セミナー、文化や慣習を紹介するクラブ活動に加え、スキルセミナーは、船内の研修や事後活動にいかせる実践的なスキルを互いから学ぶ、参加青年主導の研修として実施した。午後の研修時間の拡大により、参加青年が主体性を発揮し、ファシリテーションやプレゼンテーション、プロジェクト・マネジメントのスキルを磨く機会の拡大と体系化に貢献できたといえる。

コース・ディスカッション

1 ねらい

コース・ディスカッションは、「青年の社会貢献」を共通のテーマとし、①子どもの人権、②ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現、③防災活動のための人材育成、④自他をエンパワーする対話、⑤国際貢献活動、⑥生活習慣病、⑦持続可能な経済発展を実現するソーシャル・イノベーションの 7 コースを設定した。

主に、各分野について学ぶとともに、多国籍の参加青年が実体験に基づく発表や意見交換をすることで、各国事情について事例を通して理解を深める場として設定した。さらに、ディスカッションを通して、課題解決のために自ら取り組める分野を見付け出し、その実現に向けて具体的な活動を組み立てることをねらいとした。

各コースとも、参加青年同士の活発なディスカッションと交流を学習の主軸とし、各国が抱える社会問題や国を問わず共通して取り組むべき課題について理解を深め、事業終了後の社会貢献への意欲とスキルの向上を掲げ、参加青年一人一人の将来の具体的な活動の在り方を模索する機会を積極的に提供するコース作りを目指した。

コース・ディスカッションで期待される成果は以下のとおりである。

- 自国の現状や課題について調べ、発表し、それに対するフィードバックを得ながら、コースでの学びをいかして今後、自分自身がどのようにリーダーシップを発揮し、社会に貢献できるかを考える。（情報収集力、発想力を身に付ける）
- 多国籍の参加青年と意見交換をし、各国の状況について「生の声」を聞くことで、各分野の実情への国際的理解を深める。（理解力、ディスカッション力、コミュニケーション力を身に付ける）
- 社会において、自らがアクションを起こせる活動が何か考え、企画する。（企画力を身に付ける）
- コース･ディスカッション、リーダーシップ･セミナーやプロジェクトマネジメント・セミナーでの学びをいかし、事後活動に関する各自のアクションプランを作成し、自国に帰った後、活発に活動を実施する。（実践力を身に付ける）

2 課題別視察

1 月 25 日には、7 つのコースの内容に即した課題別視察を実施した。各コースにはボランティアが同行し、スムーズな運営に協力した。

子どもの人権コース

視察先：日本航空株式会社（JAL）　人事部ダイバーシティ推進グループ視察先：認定 NPO 法人 国際子ども権利センター／公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

午前中は、NPO 法人国際子ども権利センターの奥山氏に子供の権利（Children’s Rights）についてお話を伺った。その後昼食としてインドカレーを食べ、都内にある公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンを訪問し、磯田崇子氏と田代光恵氏からお話を伺った。初めに、セーブ･ザ･チルドレンの設立や、活動国の紹介、ビジョンについて説明していただき、セーブ・ザ・チルドレンの概要を学んだ。その後、子供の権利に関するクイズを行い、参加青年の意見やそれぞれの国での状況を聞きながら、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンでの事業内容についてお話していただいた。

1989 年に子供の権利条約は採択され、現在 196 か国が批准しているが、大国アメリカはこれを批准していない。子供の権利条約の核は､子供が“生きる”“育つ”“守られる”“参加する”権利である。午前の講義は、この四つの子供の権利に沿って、パワーポイントを使って進められた。講義の途中で、奥山氏から参加青年たちに向けて、「具体的な子供の権利を保障する解決策とはなにか。」という質問があった。考えるのに与えられた時間は、5 分ほどであったが、参加青年たちは途切れることなく、話し合っていた。

この講義のポイントとして、子供たちには、まず自分には権利があり、自分の意見を伝える自由があることを知ってもらうことが肝要だというのが挙げられる。それが、よりよい社会の構築につながると統括された。

ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現コース

視察先：富士ゼロックス首都圏株式会社／特定非営利活動法人 laule'a

午前中は、富士ゼロックス首都圏株式会社総務部・働き方変革推進グループ長の長井由希子氏の講演が行われた。

前半は、女性活躍・障害者雇用推進の取組が紹介された。国内女性管理職登用率が未だに低い現状があり、富士ゼロックスの女性活躍推進委員会では、特に仕事と生活の両立支援を通じて、登用率向上及び女性の経営参画を創出していくと伺った。障害者雇用では、法定雇用率 2% のみでなく､88% の高定着率も富士ゼロックスグループで達成している。その背景には、研修場所での①基本動作、②書類出力等の業務、③一般業務、といったスキルの段階的習得後、インターンシップを経て社内の職場異動、OJT の流れが大切だとよく分かった。

後半は、「働き方改革」の一環で行われている様々な生産性向上施策を紹介いただいた。富士ゼロックス東京株式会社は厚生労働省主催「輝くテレワーク賞」の優秀賞受賞歴もあり、社会的に認知された実績があることも印象に残った。

参加青年の中には学生や公務員も含まれており、「日本企業での具体的な取組が聞けて良かった」という感想があがったり、「当事者以外のインクルージョンにも取組が広がるようになれば尚良い」という今後の課題について指摘される場面もあった。

午後は、放課後等デイサービスと児童発達支援を提供する神奈川県藤沢市にある「遊びリパーク Lino’a（以下リノア）」を訪問した。

まずは、立ち上げの経緯等を NPO 法人 laule’a 横川敬久理事長から伺った。サーフボード 1 枚とバッグ 1 個で 1 年半世界各地を旅した経験から、「知ること・受け入れてもらうこと・受け入れること」の三つの大切な点を念頭にリノアを設立したという。また、障害の有無関係なく、リノアに関わる全ての人を大事にしている点も挙げた。近隣住民や、障害児でないリノアスタッフの子供、障害児自身の兄弟等、誰もがリノアを利用して仲間と遊んだり、おやつを食べたりすることができるというこの大切な理念も印象に残った。

その後、大郷和成副理事長から、子供たちと接する上で大切にすることやリノアスタッフを御紹介いただき、続けて一時間弱、リノア利用者含め、参加青年との交流の時間が設けられた。子供たちとどう遊ぶか最初は戸惑う様子の参加青年もいたが、「ぜひ子供たちと同じ目線になって遊んでみて下さい。まず自分が楽しんで！」という大郷さんの声かけもあり、徐々に参加青年らもリラックスした様子で積極的に子供たちとの時間を楽しんでいた。

防災活動のための人材育成コース

視察先：東京消防庁本所都民防災教育センター（本所防災館）／特定非営利活動法人 CWS Japan

午前は本所防災館を訪問した。まず、過去の震災の教訓から、今後 30 年以内に発生する可能性が高いと言われる首都直下型地震対策をテーマにしたビデオ「君の命を守りたい－自助・共助～首都直下地震への備え－」を視聴し、身近な地域コミュニティ内での防災活動にて災害時に自らの命を守る自助とお互い助け合う共助の大切さを学んだ。その後、四つの模擬災害体験をした。暴風雨体験では、秒速 30m で吹き荒れる暴風雨に身動きが取れず、手すりに掴まることで精一杯となる参加青年の姿があった。消火体験では火元を狙うと速やかに消火できるが、火元をうまく狙えず消火失敗した参加青年もおり、初期消火対応の重要さを学んだ。煙体験では、火災時に煙が充満した建物内では視界が悪く避難が難しいこと、またそこから脱出する方法を学んだ。地震体験では、阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、熊本地震で発生した下から突き上げられるような直下型地震と、東日本大震災で発生した横揺れ地震では体感や家具が転倒するタイミングが異なることを知り、揺れ始まりから完全に収

まった後の一連の動作として、身体防護、火元確認、安全な避難路確保を行う訓練を体験した。

午後は日本の国際協力 NGO 間のネットワーク構築、政府や企業等との連携・協働を促進する JANIC を訪問し、アドボカシー・コミュニケーショングループマネージャーの水澤恵氏に組織概要と事業内容について伺った。その後、JANIC が事務局を務める防災・減災日本 CSO ネットワーク（JCC-DRR）のボードメンバーである小美野剛氏より東日本大震災の教訓を世界に伝える政策提言活動、仙台防災枠組、防災の国際潮流について講義を受けた。仙台防災枠組とは 2015 年 3 月に仙台市で開催された第 3 回国連防災世界会議において、政府間だけでなく、地方公共団体、企業、NGO や NPO などの市民社会組織（CSO）を通じ直接被災者の意見を踏まえて採択された世界の防災指針である。参加青年は、グローバルな連携と同時にローカライゼーションが必要であること、そして若者のリーダーシップが求められていることを学んだ。講義後半は、参加青年から積極的に質問がなされ、世界で防災について協働する方法やコミュニケーションの重要さ、価値の創造、問題解決力、イノベーションについて小美野氏と率直な意見を交わした。

自他をエンパワーする対話コース

視察先：一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）／認定特定非営利活動法人カタリバ

自他をエンパワーする対話コースでは二つの団体の課題別視察を行った。午前の部は、グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）より、代表理事の辰野まどか氏からグローバル・シチズンシップの考えを伺い、事務局の栗林文氏と久保健太郎氏からはワークショップを通して、実際に自分自身に起きたエンパワメントを実感する活動を行った。午後の部では、認定特定非営利活動法人カタリバを訪問し、マネージングディレクターの今井亮氏から学生のもつ自己肯定感が今後の社会に及ぼす影響と、それに対するカタリバの役割についてのお話を伺った。

GiFT からは、一人一人が世界をより良いものにしようという志をもち、地球規模の課題に取り組むことができる人材を育成するためには、「自己を知る、受け入れる」「相手を知る、受け入れる」「共に取り組み、創る」「社会に参画し、還元する」という四つの要素からなるプロセスを実践することが効果的と学んだ。ワークショップではこれまでの自分を振り返り、グループでの対話を通して自分自身の思いや他者との違い、実際にエンパワーされた経験を改めて理解し直した。また、「エンパワーには何が重要か？」という問いを受けたとき、参加青年たちは自分の体験から次は違う誰かのためにと、真剣に答えを探っていた。

カタリバでは、高校生の自己肯定感、オーナーシップの低さを問題視し、対話を通して意欲を引き出し、より主体的に活動するための動機付けのお話を伺った。参加青年たちはかつての自分たちのことや、日本と自国の高校生の傾向などを比べながら、この課題について考えた。カタリバに参加するボランティアが「ななめの関係」となり、現在の高校生を取り巻く環境に良い変化をもたらすことで、これからの社会にも良い変化が起きることが分かった。終始和やかな雰囲気の中で、積極的にお互いの意見を共有する意識が参加青年から感じることができ、有意義な時間を送ることができた。

国際貢献活動コース

視察先：独立行政法人国際協力機構（JICA）／特定非営利活動法人　難民を助ける会　（AAR Japan）

午前は独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の中村貴弘氏より国際協力の概念、日本の政府開発援助の概要についてお話を伺った。国際協力がなぜ必要なのか理解を深めると共に、各国が協力して地球規模の課題に取り組むことが大切であることを学んだ。さらに、「先進国は発展途上国の支援をする責任がある。」という中村氏の言葉に参加青年たちの多くが頷いていた。その後、城西国際大学招聘教授の田中由美子氏より、タンザニアの農業分野におけるジェンダーに関する課題を御説明いただいた後、農業技術普及のための研修にジェンダーの視点を取り入れたことによる成功事例を御紹介いただいた。参加青年たちからは、教育レベルの低い貧困層の女性も研修参加の機会が得られるのか、当該事業のような成功事例や事業からの学びはどのように共有されるのかなどの質問が出された。当ディスカッションコースは将来国際協力の仕事に携わりたいという参加青年も多く、積極的に質問していた。

午後は品川区の特定非営利活動法人難民を助ける会（ARR Japan）を訪問し、プログラムマネジャーの穂積武寛氏から、団体概要、当団体の難民支援活動、世界の難民問題の背景や現状について御説明いただいた後、六つのグループに分かれて「What if I were a refugee?（自分が難民だったら？）」というテーマで ワークショップを行った。

ワークショップでは、参加青年がトルコに逃れたシリア難民という想定で、まず難民キャンプに住むか、キャンプ外で生活するか議論した。生活の安定という観点から五つのグループが難民キャンプ内の生活を選んだ。次に、難民が取り得る三つの選択肢（母国へ帰る、自分が現在いる避難先で生活を続ける、他の国へ移り住む）の利点・欠点について議論した。最後に、グループ毎に異なる事例を与えられ先の選択への判断に影響があるかを話し合った。その結果、参加青年は家族、子供たちの教育、自分自身の将来など様々な要因について話し合うことで、ワークショップの目的である難民が抱える複雑な状況への理解を深めることができた。

最後に、参加青年の 代表がお礼の言葉を述べると、ワークショップをファシリテートしてくださった穂積氏へ感謝を込めた拍手が沸き起こった。

生活習慣病コース

視察先：厚生労働省健康局健康課／株式会社タニタ総合研究所

午前は厚生労働省健康局健康課栄養指導室室長、清野富久江氏より日本の健康増進システムについてお話を伺った。

少子高齢社会において、生活習慣病予防は介護予防という観点からも重要である。そこで、日本の健康増進政策の中心をなす、健康日本 21 について概説していただいた。健康日本 21 は健康寿命の延伸や、健康格差の縮小など五つの柱があり、特徴としては、毎年実施する国民栄養調査を基に目標が設定されること、各都道府県が地域特性に応じた計画を策定することなどがあることなどを実例を交えながら説明していただいた。また、健康日本 21 だけではなく、食育やスマートライフプロジェクトなど他の省庁や民間企業と協力した取組についても紹介を受けた。参加青年は特に、日本で多い疾患への対策や、健康診断システムに関心を持っており、質疑応答では活発な議論がなされた。

午後は株式会社タニタ本社を訪問し、第一部では、今正人社長より立つだけで測定できる世界初の体組成計や、提唱する健康なライフスタイルについて説明を受けた。脂肪が燃えるコーヒー、体重計型の巻尺をいただき、一同大喜びであった。

第二部では、社員食堂で低カロリー食を楽しんだ。ボリュームがあるにもかかわらず、カロリーは約 500kcal であることが明かされると驚きの声が上がった。

第三部では体重科学研究所の西澤美幸氏より、タニタの体組成計の仕組みについて説明を受けた。様々な人種対応の機種と日本人に特化した機種があるという。また、体組成測定を実際に体験した。筋肉量、脂肪量等が詳細に記された結果に、興味津々で多くの質問が飛び交った。

第四部は、オフィスと博物館見学を行なった。厚生労働省表彰の社員健康管理が紹介されるとどよめきが上がった。また、様々な体組成計や健康増進に関する資料を見て、楽しみながら学習した。

実際に様々な体験をしてみることで、自身や社員の健康管理について考える良い機会となった。

持続可能な経済発展を実現するソーシャル・イノベーションコース

視察先：特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO International ／特定非営利活動法人エティック

午前は特定非営利活動法人 TABLE FOR TWO International（以下、TFT）の安東迪子氏を迎え、前半は TFT の立ち上げから現在までを御自身の体験や困難だったことなどについて、スライドを交えて、分かりやすく御講演いただき、後半は参加青年からの質問にお答えいただいた。

講演は団体の簡単な紹介から始まり、団体を立ち上げた理由は「食べることが好きだった」という理由を話してくださった時に参加青年からは思わず笑いが起こり、話に惹き込まれていった。今は大きな団体になっているが、最初の 3 年間は赤字で苦しかったなど、決して楽ではなかったという安東さんのリアルな体験の話が参加青年に大きな共感を生み、「成功の秘訣は Passion, Action, Keep on」という言葉が出た瞬間、参加青年からは大きな拍手が起こった。

後半の問答でも参加青年は積極的に挙手をし、「タイアップしたい企業がある場合、メールや電話などどういう手段で連絡を取っているのか」等、具体的な質問が多く、この講演を貴重なチャンスと捉え、自分自身のビジョンやアイディアに積極的にいかそうとしている様子が伺えた。

午後は NPO 法人 ETIC. のオフィスを訪ね、プログラムマネジャーの番野智行氏が中心となって、ETIC. の概要やビジョン、過去の実績等をスライドとともに細かく説明していただいた後、参加青年からの積極的な質問に対して答えていただく時間となった。後半は問答の時間にあてた。

参加青年は番野氏の講演を時折うなずきながら興味深

そうに聞き入っており、過去に関わったプロジェクトの話を聞きながら細かくメモを取る姿も目立った。

後半の問答の時間では、具体的にどうやって継続をしていくのか、綿密なアイディアプランがある人材と情熱のある人材だとどちらが伸びるのか、など、「継続」「成長」にスポットを当てた質問が目立ち、青年たち自身のアイディアをどう形にしていくのかのヒントを得ようという意思が感じられた。また、ソーシャルビジネスカンパニーと通常の企業の違いについて、社会的意義のある活動とは何か、という大きな切り口での加瀬雅善氏のお考えを聞いた際には、参加青年が大きなうなずく姿が見られ、自分のアイディアやビジョンをより社会的意義のあるものにしたいという意思が感じられた。

3 コース別の活動と成果

子どもの人権コース

副題：次世代を担う子どものために、子どもともに、より良い未来を作るために

ファシリテーター：源 飛輝

参加青年：37 名（日本参加青年 18 名、外国参加青年 19 名）

1. コース概要

2015 年 9 月に国際連合（国連）で採択された「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs)」は、「誰一人取り残さない」という公平性のアプローチに基づき、2030 年までの実現を目指して先進国も途上国も取り組むべき 17 の開発・発展の目標を掲げている。SDGs を定めた文書『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ』では、SDGs が目指す世界は、「子供たちに投資し、全ての子供が暴力や搾取から解放される世界」とされている（パラグラフ 8)。SDGs の実現において、子供は、守られるべき「脆弱な人々」にも含まれているが（パラグラフ 23)、同時に、「変化の重要な担い手」（パラグラフ 51)」とも位置付けられている。SDGs の実現に向けて、世界の子供たちの置かれた現状と課題を理解するとともに、いかにして子供のために、子供と共に、未来を作っていくかを考え、行動することが不可欠である。本コースでは、子供とはどんな存在か、なぜ子供の人権を考える必要があるのかといった考え方の枠組みの前提から議論を行うとともに、児童労働や人身取引といったビジネスと子供の人権にかかる問題、子供の貧困、子供に対する暴力、文化・宗教・教育・平和構築と子供の課題などを取り上げ、身近な問題と絡めながら、問題を理解し、解決策を共に考える。先進国及び途上国を含む世界の子供たちが抱える様々な課題に光を当てながら、参加青年が子供に関する課題を自らの問題として捉え、主体的に課題解決に取り組むための道標を構築することを目指す。

2. コースの全体の目的

本コースでは、講義やワークショップ、ディスカッションなどを通して、自国及び世界の子供たちがどのような課題に直面しているのかについての知識を身に付けるとともに、その原因を分析する力を身に付ける。また、同時に国際機関、政府、国際・現地 NGO、企業などがそれらの課題についてどのような取組を行っているのか、それぞれの特徴・強みや弱みを踏まえながら理解し、分析を行えるようになる。コースの学びを踏まえ、参加青年は子供の課題を身近な問題と絡めて考え、子供たちが社会で直面する課題を解決するための行動を起こせるようになる。

3. 事前課題

3_1. プレゼンテーションの準備

以下の四つの質問について、自らの視点で考察し、まとめてくること。

(1)子供とは何か、子供とはどういう存在か

(2)自分自身の子供の時代に、最も大変だったこと、自分がそれにどのように対処したか、今の自分であればどのように対処するか

(3)自分の国の子供が直面する諸問題のうち、貴方が最も問題だと思うものについて一つ選び、①それは何か、② SDGs のどのゴール・ターゲットに関連するか、③なぜそのような問題が起こっているのか、④どのような解決策がありうるか、⑤その解決策を実現するためには何が必要か、⑥その解決策をとるとどうなるか

(4)現在、自分の国以外の子供が直面する諸問題のうち、貴方が最も問題だと考えるものについて一つ選び、①それは何か、② SDGs のどのゴール・ターゲットに関連するか、③なぜそのような問題が起こっているのか、④どのような解決策がありうるか、⑤その解決策を実現するためには何が必要か、⑥その解決策をとるとどうなるか

※冒頭に必ず、①氏名、②出身国名を入れる。エッセイは Word 形式ファイル A4 二枚程度（英文、フォントは Times New Roman, 字の大きさは 10pt- 12pt、手書きは避けること)。加えて、同内容をポスター（サイズ不問、手書きで一枚もしくは PPT 4 枚程度にまとめる。ポスターに関しては、イラスト・写真などの使用も可能。エッセイに関しては 2017 年 12 月 31 日までにコース・ディスカッションのメーリングリストを通じてファシリテーターまで提出すること。ポスターに関しては、コース・ディスカッションの初回に間に合うように紙媒体で持参すること。

3_2. イシュー・リサーチ：以下の各イシューについて、口頭で定義と事例を説明できるように調べてくること。

(1)児童の権利条約とその選択議定書

(2)子供兵士

(3)児童婚

(4)子供に関わる SDGs のゴールとターゲット

(5)子供の権利とビジネス原則

4. 各セッションの概要

セッション 1：子供の人権序論	
ねらい	活動の内容
■ コース概要を理解する ■ コース参加青年同士の親睦と交流を深める ■ 参加青年が自国で抱える子供の課題、世界の子供の課題についてお互いに理解を深める ■ 東京での課題別視察を振り返り、国際機関、国際 NGO の課題解決における役割について理解する	■ オリエンテーション（コースの全体像／進め方、参加青年たちの目標の共有、安心して発言／質問できる空間作り） ■ ワークショップ（自己紹介、アイスブレーキング、チームビルディング） ■ プレゼンテーションを通じて、基本的な概念の理解を深める。例として、「子供」とは誰か、「子供」は人権や開発の課題の中でどのように捉えられているか、などが挙げられる。 ■ 自分の子供時代の個人的な体験談やそれぞれの国の子供たちがどのような課題に直面しているか、全体で話し合う。 ■【グループワークと発表】東京での課題別視察の振り返りを行い、国際機関と国際 NGOs の特徴、役割、課題等についても意見を述べ、発表を行う。
このセッションの主な学びと成果	
● このアクティビティは参加青年たちに子供の頃の経験がいかに人生の決断に影響しているかを考える機会を与えることになった。多くの参加青年たちが、子供に関わる仕事を選んだりこのコース・ディスカッションに参加したりすることのきっかけとなったであろう個人的な体験談を共有できた。 ● 課題別視察で得た学びについても議論した。二つの訪問先においてはどちらも、いかに日本及び世界の子供たちの現状を向上させるかについて説明を受けることができた。紹介されたプロジェクトやプログラムの例は、子供の人権について非常に詳しく、大事な情報だった。	
セッション 2：子供の人権問題概論	
ねらい	活動の内容
■ 様々な形式のプレゼンテーションに触れ、自らのプレゼンテーション能力を培う ■ プレゼンテーションを通じて、以下の学びを企図する ■ 子供の権利とグローバル経済との関係、企業責任の観点などを含め、子供とビジネスに関連する問題を理解する [SDGs 目標 1（貧困の撲滅）、目標 8（持続可能な経済成長と人にふさわしい仕事の推進）等に関連] ■ 企業と政府の特徴・強みと弱み、またそれらがどのような取組を行っているのか理解する ■ 子供の権利と伝統的慣習や文化、教育に関する問題を理解する ■ 子供と大規模災害・紛争、平和構築に関する問題を理解する ■ 異なるアクターの協働の課題と可能性について学ぶ	■【講義】人権概念の基礎や歴史について学ぶとともに、子供の権利と SDGs の関わりについて理解する。 ■【プレゼンテーションと全体議論】 先進国を含む世界中で問題となっている子供への商業的な性的搾取・人身取引・ポルノや強制労働の問題などについて。また、それらの課題に対する様々なアクターの先進的な取組の現状や好例を共有。 ■ 児童婚や FGM（女性器切除）の問題等を通して、ローカルな慣習と普遍的とされる人権の価値が衝突するときに、どのように考えるべきかについて議論する。また、特に初等中等教育を中心として各国の教育課題について議論［SDGs 目標 5（ジェンダーの平等）に関連］ ■ 戦争・国内紛争における子供兵士の問題や難民の子供たちの課題とともに、地震や津波といった自然災害で国内避難民となった日本や他国の子供たちの事例も検討しながら、大規模災害や紛争が子供たちにどのような影響を与えるのか、どうやってそれらを防ぐのかについて考え、議論する。［SDGs 目標 16（平和で誰もが受け入れられる社会の実現）に関連］ ■ 国際機関・国際 NGO・企業・政府・当事者（子供）等の各アクターによる協力の課題と可能性について議論する。［SDGs 目標 17（目標（SDGs）達成のための仕組みと国際協力の強化）に関連］

このセッションの主な学びと成果	
● 冒頭でファシリテーター自身の子供時代の話や子供の人権への関わりについて紹介され、コース・ディスカッションについての主眼が共有された。 ● 参加青年たちは、相手が子供時代にどのような苦労をしたかを互いに共有することで絆を深め、国によって直面する問題が異なることも理解した。貧困や虐待、崩壊した家庭環境などその他の問題についても話し合うことができた。 ● 質疑応答を通じて、世界中の様々な課題について理解を深めることができた。参加青年たちは今回、プレゼンテーションで取り上げられた諸問題を明確に認識し、自らが最も関心を寄せるテーマについてより多くを知ることができた。	
セッション 3：子供の人権問題に関するケーススタディー	
ねらい	活動の内容
■ 子供の権利に関する問題について、世界各国におけるケーススタディーの収集を行い、知識の幅を広げる ■ 小グループにおける、密度の濃い議論を行えるスキルを磨く ■ 小グループ単位で、全体に向けた効果的な発表を行うための訓練を行う	■ 6 人ごとの班に分かれ、事前課題に基づき、自らの選択した子供の権利に関する問題への分析と考察、解決策についてプレゼンテーションを行う。 ■ その後、班内での質疑応答や議論を経て、その結果を次のセッション 4 で全体へ向けて発表するために準備を行う。
このセッションの主な学びと成果	
● 参加青年たちの議論の内容から、共通項が見出されることとなった。例としては、貧困に関する問題や、きちんとした教育を享受する手段などが挙げられる。 ● 参加青年たちは、取り上げた諸問題について自国の政府や組織がどのような戦略を持っているのか共有した。 ● 班内での議論をまとめるために大きなポスター作成を行ったが、鍵となるテーマに焦点を当てた班もあれば、国ごとに類似点と相違点を比較した班もあった。	
セッション 4：国や地域ごとに異なる子供の人権問題	
ねらい	活動の内容
■ 解決志向の考え方を訓練する ■ 国や地域や文化圏ごとに各種前提や文脈が異なることを学ぶ	■ セッション 3 で分かれた班ごとに、自分たちの議論のまとめ及び提言する解決策を発表する。 ■ 上記の発表や議論によって行われた各種比較により、歴史的・文化的・社会的・政治的要因などがどう子供の権利に影響するのかについて学ぶ。（例：中国における一人っ子政策や戸籍制度）
このセッションの主な学びと成果	
● 前回セッションと同じ班分けで、参加青年たちは自国の抱える主要な問題について発表を行い、その多くでは就学の可否や平等、共生などの観点から教育に関する問題を学ぶことができた。 ● 印象的な例として、メキシコでは麻薬組織によって搾取される子供たちがおり、退学して違法薬物や武器の売買に携わるよう説き伏せられていることを参加青年たちは知った。これは大抵の場合、子供たちの現在に対しても将来に対しても影を落とすものであり、暴力に晒され、危険な状況に身を置くことになる。 ● 第二次世界大戦中の広島と長崎への原爆投下について話が及び、平和と戦争に関する子供たちへの教育について議論が行われた。参加青年たちはその当時及び現在にまで続く影響や、国際問題をどう平和裏に解決していくのかを子供たちに教えることの重要性についても話し合えた。	
セッション 5：子供の人権と SDGs 実現に向けて、解決策を模索する	
ねらい	活動の内容
■ サマリー・フォーラムへの準備及び事後活動セッションへの導入のために、これまでの学習事項をまとめる ■ 具体的事案の検討を通して問題解決能力を身に付ける	■ これまでの議論や学びを振り返りつつ、子供たちや若者たちが各種問題に取り組むために何をすればよいかのアクションプランを参加青年自らが企画できるようになるためのヒントとして、政府･企業･NGO･地域や個人など様々なレベルでの取組例を共有・議論する。 ■「子供の貧困」への対策を例題とし、コレクティブ・インパクトの有効性と重要性を紹介する。その際、政府・企業・NGO・地域や個人の取組の特徴、役割、課題等についても分析する。

このセッションの主な学びと成果
● 多くの参加青年たちが日本の高い自殺率とその対策について知り、驚きを隠せなかった。外国参加青年たちからは精神疾患がどのような認識を持たれているのか、既存の支援制度にどのようなものがあるのかなど、質問が相次いだ。日本参加青年は日本の自殺率が比較的に高い原因について意見を述べた。 ● インドやスリランカ、ポーランドやオーストラリアは政府による無償での教育を受けられるが、こうした国の参加青年たちは、他国では必ずしもそうではなく学校教育や医療面に多くの費用がかかることに驚いていた。 ● モザンビーク、ペルーやメキシコの参加青年たちは、高い貧困率とそれが子供にいかに影響するかについて議論することができた。

5. ファシリテーターのコメント

昼食時の参加青年たちは、我先におかわりの列までなしてアイスクリームを頬張り、口の中いっぱいに楽しんだ。そして食後すぐに始まるコース・ディスカッションでは、一度でいいからと願いながら舌がアイスクリームをかすめることもなく、酷暑や飢えに倒れた 6 歳児や 8 歳児を話題にして座っていた。

冷房の効いた、快適で愉快で安全な客船からは想像できない程、外の現実は容赦ない。この世界はカラフルだが、洋上を照らしつける日差しが嘘としか思えない程、深い暗闇が同居している。正直目を背けたくなる程その闇は深いため、一人一人が自らの持ち場で光を発しなければ抗えないだろう。そして一人一人では弱いから、結束して光らなければならない。これが、参加青年たちがスローガンに据えた“Together we SHINE”の本旨なのではないか。本コース・ディスカッションの成果は何より、「子供の人権」を具体例に、かかる意識を喚起したことに求められよう。逆に言えば、参加青年が社会貢献を考え動く嚆矢となりさえすれば、テーマが何であるかは二の次である。なぜならば、テーマの専門家を養成することや知識の伝授が一義的な目的ではなく、11 か国から集った仲間同士で触発し合い、社会貢献の種を宿して各自の分野に戻ることが大事だからだ。

具体的な行動や企画についてはプロジェクトマネジメント・セミナーや事後活動セッションの管轄だが、コース活動は社会問題を考える訓練の場となったと評価できよう。参加青年が話し合った内容は実に個人的な話や体験談から、非常にマクロな視座からの統計を交えた議論まで多岐に亘り、世界中の声を聴けたのはこの事業ならではであった。

改善の余地としては、参加青年たちの健康管理と意識面の向上が挙げられる。事前に参加青年がコースに集中するための工夫や意識付けが講じられ得たように思える。本コースは初回から病欠者が多く、二日酔いの者も散見された。事前課題の提出状況は理想的とは言えず、議論の価値は半減してしまう。初回から遅刻、無断欠席が見られたが、コースの連続性が失われてしまう。さらに、英語の意思疎通に困難を伴う参加青年が少なくなく、乗船前に更なる英語の訓練を施すのが望ましく思えた。大事なことなので何度も言ったが通じていなかった、ということが多々あり、理解が断片的でないか常に心配だった。

と、厳しいことも言ったが、参加青年の全員が上記を補って余りある魅力的な個性と互助の精神を持っており、これからも時間を共にしていきたいと本当に思うほど愛着が湧いた。ファシリテーターは今回、直前になってピンチヒッターを打診され急遽乗船が決まり、前任者の設計や思惑を毀損しないよう努める中で、戸惑いと慌ただしさがゼロだったと言えば嘘になろう。しかし、全てはこの参加青年たちとの出会いによって報われることができたと思っている。一人一人に対して、心からの感謝を述べたい。

6. 参加青年の感想

相埜 良子（日本）

私は、異なる文化や考えを互いに尊重し認め合える関わりの中で、自分が他者を信頼し、グループで協力し合える関係を築きたいという思いからこの事業に参加した。今からちょうど一か月前、初めてディスカッションメンバーが一堂に会した際、地球を凝縮したような空間に自分が存在しているかのようだった。同時に、このコースのメンバーが子供時代にどのようなことを考えていたか、そして成長した今、何をしたいのかをできるだけ子供の視点に立って話し合い、ディスカッションを発展させたいと思った。私がディスカッションから学んだことは、「全ての子供の権利が保障されるために、私は大人の一人として、何か一つでも行動する責任がある」ということだ。私は子供時代にエンパワーしてもらった自身の経験について発表した。自分に自信がなかった頃、自分は一体どうなりたいのか、何をしたいのか、塞いでいた気持ちに耳を傾けてもらった経験から自分の生きる道が拓けたことを振り返った。仲間の発表では、社会問題の視点や、言語や文化や宗教の視点から各国の子供の状況を話し合った。自分の言語による教育がなく、学校へ行っても理解が難しい状況にいる子供たち。家族のために出稼ぎにいく選択が当たり前にある子供たち。麻薬戦争などの社会問題から安全に生活する権利を侵害される子供たち。社会の構造的な暴力によって子供が犠牲になることを防ぐ仕組みが必要だと再認識するに至った。この船で、私は 11 か国の仲間と共に幾多の課題に多様な視点を持ち、子供の権利の保障について向き合うことができた。最終回には、課題解決として、教育機関、地域、

個人、企業、政府、NGO、そして子供たちのアプローチの可能性をチームで話し合うことができた。たとえ短期間ですぐに解決できる課題ではなくても、必ずや草の根でできることがあると私は考えられるようになった。私は現在、「NPO 法人えんぱわめんと堺」の活動会員として子供へのあらゆる暴力を予防する権利教育に携わっている。今回、子供の人権コースのメンバーに日本の子供の声を紹介し、議論できたことが私の今後の活動に多様な視点を持たせてくれた。私は、日本の全ての子供が「子供の権利」を知るべく啓発していきたいと考えている。具体的な今後の活動として、地域の掲示板に子供の権利をポスターで掲示し、小学生を対象に子供の権利をテーマにワークショップを行うところから始めたいと思っている。最後に、私はこのコースを通して、11 カ国に「子供一人一人を尊重し、エンパワーできる大人でありたい」と考える仲間を持つことができたことを大変誇りに思う。

アンドレス・カマチョ（メキシコ）

子供は通常、我々の未来と考えられているが、我々の過去だと捉えて考えてみたい。というのも、子供たちは我々の文化によって形作られているのだ。学校に通うと、子供たちは我々の歴史と伝統について勉強する。これらは大事な事柄であり、我々の用いる言語のことであり、だからこそ次世代に引き継いでいる極めて影響力の大きいものだ。他者との接し方を決め、古くからの社会通念を体現しているのが言語なのである。言葉は未来の子供たちを力付けることも押さえつけることもできる。我々の総体としての史観が、意識的にも無意識的にも、我々が子供たちに伝える教訓や価値観、また子供たちの取る行動を左右する。だからこそ、我々は努めて意識しなければならないのであり、それは、今日という日がいつかは「過去」の一部として未来につながるからなのである。

子どもの人権コースで私は、世界が直面している問題の重大さをより強く認識することができた。例としては貧困、教育の不平等、児童労働や児童虐待などが挙げられる。メキシコの子供たちの全てが自らの夢を追い求められるわけではないことを認めるのは、私にとって非常に辛かった。子供らしい普通の暮らしを送るよりも麻薬組織の構成員になりたがる子供たちをスペイン語で「ナルコトラフィコ」と呼ぶ。メキシコにおける子供の人権に関して言えば、子供たちに対する犯罪組織の影響というのが、乗り越えなければならない難題の一つとして数えられる。

このコースは、私が母国で目の当たりにしてきた問題について焦点を当て議論し、世界の異なる地域から来た仲間たちと共に比較検討を行う土台となってくれた。私はこの機会によって、ある時は他国における解決策を学び、またある時はクリエイティブな思考法や問題解決法を用いることで、見通しは真っ暗なのではなく、協働して解決策を模索することができるのだと認識を新たにするに至った。

子どもの人権コースは単なる授業にとどまらなかった。ここは、洋上における日の出のように、毎日輝く日輪が生まれ、触発と希望をもたらしてくれる場所である。

ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現コース

副題：一人一人を大切にする社会を共創するリーダーシップ

ファシリテーター：藤原 加代
参加青年：37 名（日本参加青年 20 名、外国参加青年 17 名）

1. コース概要

多様性（ダイバーシティ）と包括的（インクルーシブ）社会について理解をするために、多様な参加者同士でのオープンな対話を通して、お互いの違い、内在化している（当たり前のこととして無意識化されている）認識を紐解き、グローバルレベルでの多様性に関する相互理解を深める。多様性にある背景とそれぞれのニーズを学びあい、より包括的な社会とはどういうものか、包括的社会実現に向けて何が必要かを参加型のワークショップを通して、知識レベルのみならず、自分自身の実感として理解する。参加青年は、プログラム期間中の日常生活においても、自身と違う考えや背景を持つ人と積極的に関わり、少数派の声に耳を傾ける実践を積むことにより、そこから広がる可能性を体感する。同時にグローバルな視点を持ちつつ、自国における自身のコミュニティ（同級生、サークル、職場、地域社会など）で実践できる取組イメージを明確に持つ。

※ ここでの多様性とは、民族、人種、性別、性自認、性的指向、文化、身体的属性（障害の有無を含む）の違いなど、あらゆる観点での多様性を広く指す。
※ インクルーシブ社会とは、自身の立場や属性に限らず、一人一人が除外されることなく、構成員として尊重される社会。

2. コースの全体の目的

個人レベルから地域社会、そして国家間に亘るグローバルレベルにおいて、お互いの違いからくる他者排斥や差別は未だになくならない。それが個人レベルから国家間レベルの葛藤や紛争にもつながっている。そのような中で、今後、グローバル社会で活躍するには、一人一人の文化的背景に基づくものの考え方の違いを理解し、多様性や違いを豊かな資源として認識できる理解力を養うことが必須である。本コースでは、民族、人種、性別、性自認、性的指向、文化、身体的属性（障害の有無を含む）による多様性を理解した上で、無意識的にもってしまっているステレオタイプやバイアスに自覚的になる機会を提供する。また船内生活で生じる国民性の違いによる文化的摩擦、戸惑い、誤解なども具体的な事例として取り上げながら、理論の学びを深める。そして、参加者同士がディスカッションを通して、多様性を理解するだけにとどまらず、いかに誰もが対等な関係で関わり合える包括的な社会を自身の現場で築いていくかを学び、持ち帰ることをねらいとする。

3. 事前課題

3_1. 自己紹介
以下の内容について、外国参加青年がメーリングリストに合流後に自己紹介を投稿する
① 名前
② ニックネーム（周りからどのように呼んで欲しいか）
③ 出身国
④ 今回の「世界青年の船」事業への参加のきっかけと動機
⑤ 自分のことについてみんなに知っておいて欲しいこと

3_2. エッセイ
以下の内容に関するエッセイを作成し、コースのメーリングリストに投稿する。
（英文必須・和文任意、英文の場合 12pt, Single-spaced, 900-1200 words 程度。
※ 英文エッセイについては、今回のコースで扱う内容に関する英語表現、関連単語に慣れることが大切であるため、文法的に完璧な英語を目指す必要はない。

① 自分の独自性（英語でいう uniqueness、マジョリティーとは違うと思う点）とは何か。またそれによって感じた生きづらさについて
② これまで自身が感じた多様性に関するトピックの中で、1) 自分が注目したいもの、2) その課題、3) 将来に向けた解決策について
③ あなたが考えるインクルーシブ社会とはどのようなものか、自分のコミュニティ（同級生、サークル、職場、地域社会などから一つ選択）を想定して述べる。その実現の際に阻害要因となるものと、実現に向けて必要とされることについても触れること。

3_3. 2 分間のプレゼンテーションの準備（提出の必要はないが研修中に発表する）
Erin Meyer の The cultural Map のなかで、1) 自分が思う自国の平均、2) 自分自身が八つのスケールそれぞれにおいてどこかを示しなさい。

八つの中から、一つの項目を選び、なぜ自国と自分のスケールがそこにあるかを事例を交えて 2 分間で述べる準備をする。

(1) コミュニケーション：ローコンテクスト vs ハイコンテクスト
(2) 評価（ネガティブフィードバック）：直接的 vs 間接的
(3) 説得：原理優先 vs 応用優先
(4) リード：平等主義 vs 階層主義
(5) 決断：合意志向 vs トップダウン式
(6) 信頼：タスクベース vs 関係ベース
(7) 見解の相違：対立型 vs 対立回避型
(8) スケジューリング：直接的な時間 vs 柔軟な時間

● The Cultural Map について
http://www.businessinsider.com/the-culture-map-8-scales-for-work-2015-1

4. 各セッションの概要

セッション 1：多様性と包括性について

ねらい	活動の内容
■ どんな多様性があるか、なぜ包括的な社会を目指すのかを明確にする	■ オリエンテーション：コースで取り扱う内容の紹介 ■ エクササイズ・ディスカッション：このグループにある多様性 ■ エクササイズ：プリビレッジ・ウォーク ■ ディスカッション：国籍、性別、身体、教育、階級などの視点から特権について考える

このセッションの主な学びと成果

- ダイバーシティとインクルージョンがなぜ大切なのかを議論し、チームやコミュニティが多様であるだけでは十分ではなく、インクルーシブであることが大切であることを学んだ。
- このグループメンバーの中にある多様性を知るためのエクササイズを通して、個々のバックグラウンドをジェンダー、人種、階級など、様々な切り口から知り合う機会を持った。同時に、お互いの背景を知り合うことを通して、安心安全な場作りの土台を築いた。プリビレッジ・ウォークというエクササイズを通して、ダイバーシティとインクルージョンを考える上でのキーワードである「特権」について学んだ。
- 特権は、普段、自分自身が特権がある側にいるときほど、自覚することが難しい一方で、知らないことで、無意識のうちに他者を排斥してしまう一因にもなり兼ねない。その特権について体感を通して学んだことは、多くの参加者にとって、とても深い体験であった。

セッション 2：身体障害の有無、多文化共生社会

ねらい	活動の内容
■ 障害者のアクセシビリティについて学ぶ ■ 異文化理解のための八つのスケールを学ぶ ■ 多文化共生社会を実現するために必要な要素を考える	■ 参加者プレゼンテーション：日本とモザンビークの事例 ■ ディスカッション：①障害者と教育、②障害者と雇用 ■ レクチャー：カルチャー・マップの八つのスケール ■ 参加者プレゼンテーション・ディスカッション：カルチャー・マップ参加者プレゼンテーション：日本の多文化共生社会に向けた取組 ■ ディスカッション：各国の移民問題について

このセッションの主な学びと成果

- 障害者を取り巻く社会の現状として、参加青年からのモザンビークと日本の事例共有をベースに、教育と雇用の問題について、各国の現状を共有しながら、何が必要かを議論した。
- 事前課題として、各参加青年が準備してきたカルチャー・マップのプレゼンテーションを通して、各国の文化的な違いを理解すると同時に、国籍によって個々人を一般化することができないことも学んだ。
- 日本参加青年によるプレゼンテーションを通して、日本の多文化共生に関する取組を学んだ。在留外国人に対して、日本語や日本の文化を伝える大切さもさることながら、彼ら・彼女たちの文化を守ることの課題も共有された。
- 各国の移民問題のディスカッションでは、参加者自らのリアルなストーリーを通して、当事者が抱える難しさが共有された。
- 障害者の問題及び多文化共生社会実現に向けたディスカッションを通して、インクルーシブ社会の実現に向けて必要な三つの要素として、①教育、②法律・政策、③社会での啓発があることを学んだ。

セッション 3：ジェンダー（性の多様性と男女平等）

ねらい	活動の内容
■ 世界各国における LGBT を取り巻く状況を理解する ■ 性的指向、性自認、身体の性、性の表現の仕方の違いについて学び、その多様性を認識する ■ 男女平等の実現に向けて、各国の課題と取組を理解する	■ レクチャー：LGBT の基礎知識と世界の現状 ■ ディスカッション：社会的に構築された男らしさと女らしさについて ■ ワークショップ：性的指向、性自認、身体の性、性の表現の仕方の多様性（LGBT） ■ レクチャー：支援者（アライ）になるために知っておくべきこと ■ ディスカッション：ジェンダー・ギャップ指数から見て取れる各国の男女平等の現状と課題

このセッションの主な学びと成果

- 今回の参加国の中でも、同性婚が合法化されている国もあれば、同性愛者であることが犯罪の国もある。そのような中で、性的指向及び性自認の多様性は人権の一つとして尊重されるべきであることを学んだ。
- 性的指向と性の自認の多様性は、L・G・B・T だけでは表しきれないほど多様であること及び当事者が抱える生きづらさの背景に異性愛規範があることを学んだ。
- 参加青年同士で、男らしさ、女らしさの具体的な事例を共有しながら、社会の期待によって構築されているステレオタイプを明らかにした。
- ジェンダー・ギャップ指数の結果を元に、各国の男女平等に向けた現状を、経済活動への参画、教育、健康、政治への参画の四つの視点から分析し議論した。

セッション 4：人種と民族

ねらい	活動の内容
■ コースでの学びとプログラム中の日常生活を結び付ける ■ 人種差別や、民族アイデンティティーに関する各国、各個人の体験を共有し合い議論する	■ ディスカッション：「世界青年の船」事業の中で感じるダイバーシティとインクルージョンの具体的な事例について ■ レクチャー：ミクロ（個人）、メソ（コミュニティ）、マクロ（社会構造）レベルで起こる人種差別 ■ ディスカッション：各人の人種・民族問題の経験の共有 ■ レクチャー：マイクロアグレッションについて

このセッションの主な学びと成果

- レクチャーやディスカッションのみならず、プログラム中の日常に存在事例を取り上げることで、ダイバーシティとインクルージョンについて、自分ごととして考えるきっかけを得た。
- 人種差別や民族の問題について、三つのレベル（ミクロ・メソ・マクロ）から自分自身の経験を振り返り共有することを通して、課題の構造的理解を深めた。
- 無意識のバイアスから日常生活の些細なコミュニケーションで生じうるマイクロアグレッションを具体的な事例と共に学んだ。それにより、無意識であっても意識的にであったとしても、人を不快な想いをさせる可能性があるマイクロアグレッションに自覚的であることの必要性を学んだ。

セッション 5：包括的な社会に向けて

ねらい	活動の内容
■ 多様性を包括する理想的な社会の姿を描く ■ インクルーシブ社会の実現に向けて具体的に何をするかを明確にする ■ これまでの学びを振り返り共有する	■ レクチャー：インクルーシブ社会を構築するために必要な要素 ■ エクササイズ：インクルーシブ社会を具体的に視覚化し表現する。 ■ ディスカッション：それぞれが描くインクルーシブ社会をグループメンバーに共有する ■ エクササイズ：その社会実現に向けた具体的なアクションステップを設定する ■ ディスカッション：これまでの学びの振り返りと共有

このセッションの主な学びと成果

- 参加青年たちは、ディスカッションのみならず、粘土を使ったエクササイズを通して、自身が築きたいインクルージョン社会を視覚化し表現した。クリエイティブな手法を用いることで、普段言語化されにくい価値観なども引き出された。
- 自分が描くインクルーシブ社会実現に向けて、自分がどのような役割を担い、具体的にどのような行動を起こすのかを明確にした。
- 5 回のセッション全てを振り返り、全体で共有することで、何をコースから持ち帰るのかを確認した 。

5. ファシリテーターのコメント

本コースでは、ダイバーシティとインクルージョンの中でも、文化・障害の有無・ジェンダー（男女平等、性の多様性）、人種・民族・多文化共生などを切り口にディスカッションを展開した。コースでは、参加者同士の意見交換や個々人の体験共有を主体にしながらダイバーシティとインクルージョンを考えるに当たって欠かすことのできないいくつかの共通概念を折り込んでいった。具体的には、特権、ステレオタイプ、評価判断を保留すること、教育・政策・社会的風土醸成の大切さなどである。

ファシリテーターとしては、まず第一に安心安全な場作りを心がけた。最初の顔合わせセッションの際に、このグループでディスカッションしていく際の恐れと期待を共有した上で、大切にしたいグラウンド・ルールを話し合った。そこでは、「理解すること諦めない」「お互いを尊重する」「誰一人取り残さない」などがあがり、オープンかつ建設的なディスカッションを進めていく上での土台となった。セッション 1 で取り扱った特権は、自分が特権がある側にいるときほど、気が付きにくい概念であるため、体感を伴ったエクササイズでの参加青年への

学びは、とても印象深いものであったようである。また最後のセッション5では、これまでの学びを統合すべく、右脳を使ったエクササイズを取り込みながら、どのようなインクルーシブ社会を実現していきたいかを描き、言語化した。またアクションステップとして、48時間以内にできる小さな第一歩を明確にした。コースで取り扱うテーマ一つ一つが大きなテーマであり、また参加青年一人一人の経験、知識、期待も多様であったため、全員が一緒にディスカッションができる状態にしてから、議論を深めていくこと、更にそこから具体的なことへ落とし込んでいくことの難しさがあったことは否めない。

本コースは、ファシリテーターからのレクチャーも去ることながら、参加者たちが持ち寄る体験や意見の共有から一緒に学び合うことがハイライトであった。一人の個人のストーリーの共有から場全体が開き、深まっていく瞬間もあり、惜しみなく各自の体験、感情、考え、アイディアを出し合い、そして聞き合うことで場を作ってくれた参加青年一人一人に感謝したい。

6. 参加青年の感想

ケレボジレ・モルアネ（南アフリカ共和国）

私は「世界青年の船」事業と「ダイバーシティの推進とインクルーシブ社会の実現」コースのメンバー同士をつないだ共通の社会的プレッシャーは、若者としてより良い社会を築くことに携わるための探求であり強い願望であったと確かに証言できる。人々のお互いの関わりと従事の結果として、ダイバーシティとインクルージョン、そして平等が社会の中で実現される。しかし、残念ながら、現段階で私たちはそこからとても遠いところにいるのが実状である。

私はLGBTマイノリティグループの一員であり、異性愛規範主義が蔓延している保守的な世界に住んでいる。そこでの私の個人的経験、社会と関わり方や恐れは、私独自の世界の見方を形作っている。それゆえ、この多国籍からなる船旅は、女性や子供、障がい者というマイノリティグループが抱える困難に向き合い、それを表現し、主張し、背景を考慮するにおいてすばらしい機会であった。

このコースは、私たち全員が願っている理想的な世界を実現するための完璧な出発点であった。
土着の民族性を包含し、多種多様な文化を尊重し、異なる宗教的実践の中から居心地の良さを見付け出し、流動的な性的志向を認め、男女格差を根絶し、人種や健常者・障がい者といった個性の違いを包摂し大事にする社会。偏見や差別のない社会。

このコースでの一般的な理解や原理は特にそれぞれの国で政策を作り施行する未来のリーダーたちの議論の基盤となった。この場に集った未来のリーダーは今後、ジェンダーに基づいた暴力やセクシュアルハラスメント、矯正レイプというマイノリティが直面するであろう問題に決着をつけるだろう。
コースでは多様な実践的取組が行われた。プリビレッジ・ウォークというエクササイズによって、社会に存在するあらゆる特権を身をもって経験することができた。社会的な要素を参加者にとっての重要性に基づいてマッピングをする、マタリング・マップというエクササイズを通し、同じ概念について、参加青年同士でも、異なって優先順位がつけられることを直接学ぶことができた。

カラフルで活発なキャラクターであるGenderbread Personを使ってのエクササイズは私たちを驚かせ、知識を与え、私たちのジェンダーに関する見識を広げた。またセクシュアリティの流動性やジェンダーのダイバーシティについて私たちを魅了した。

障がいを持つ子供たちに安心できる場所を提供している神奈川県のNPO laure'a、女性のエンパワメントを促進しているインドのKerala Kathakali CentreやSri Lanka Women's Development Services Cooperative Society Ltdへの課題別視察は、コースの内容を補完し、多文化理解を促進し、関連する項目に関して各国の現状を共有し、ネットワーク作りとコラボレーションを実現する機会となった。

最も重要なことに、課題別視察は、私たちがそれぞれのコミュニティでモデルケースとして用いることができるであろう成功した草の根のイニシアティブを、直接に目で確かめ経験する機会となった。

コース・メンバーが作り共有したグラウンド・ルールによって作られた安心できるこの場所では、個人的な経験が、Googleよりもはるかに優れた学びとして偏見無しに共有され、個人的な傷つきやすさや溢れ出る感情は、個人の経験に関する洞察力を提供した。

アイディアや意見の交換は、私たちの前に形成された社会問題に関する見識を変える機会となり、私たちはコースに参加する前と比べ、はるかにオープンマインドを持つようになった。充実したディスカッションは、参加者をエンパワーし、知識を与え、インクルーシブな味方を形成し、日々の交流からダイバーシティとインクルージョンが実現されたコミュニティを求める声を上げることを可能にした。

西村 里佳子（日本）

このディスカッションを通して多くの知識を得、全く異なる意見を持つ人たちと討論することができた。ダイバーシティとインクルージョン・コースでは主に、障がい者、男女格差、性的指向性自認（以下SOGI）、人種・民族を題材にディスカッションを行った。まず、ファシリテーターの藤原加代さんから基礎的な知識の共有とそのトピックに対する個人の考えをブラッシュアップするワークショップが設けられ、その後、少人数のグループまたは全体で討論を行った。

私は、このコースから二つのトピックに対する考えを深めることができた。一つ目は障がい者についてだ。都内視察や各国の現状と取組をシェアするディスカッションを通して、会社が障がい者を積極的に雇用する傾向が世界的に高まってきているため、それに合わせて障がい者の生活だけではなく社会進出を支援する取組や健常者と共同で何かをする経験を提供する施設が必要とされていることが分かった。また、社会的にも障がい者と距離をとるのではなく、より関わりを深くし理解を示す必要がある。

二つ目はSOGIについてだ。性別は身体的特徴だけではなく性のアイデンティティーと惹かれる性別によって左右される。そのため一言にセクシュアル・マイノリティーと言っても様々な在り方があり、自身のジェンダーは区別されるものではなく、グラデーションの中でどこに位置するかというものだと認識するようになった。

また、私の中での結論としてこの二つのトピックについてはそれぞれを問題ではなく個性として捉え、当事者たちが意見を述べられる社会を作ったり、長所を伸ばし個性を認めていったりすることがダイバーシティでインクルーシブな社会作りにつながると考える。

防災活動のための人材育成コース

副題：グローカルな連携の持つ力ー防災力を高める協働

ファシリテーター：芳賀 朝子
参加青年：32名（日本参加青年17名、外国参加青年15名）

1. コース概要

災害発生時に、最初にあなたを助けてくれるのは誰だろうか。それは第一番目に自分自身（自助）、次に身近なコミュニティの構成員による助け合い（共助）である。国連や政府の役割が不可欠である一方で、公共セクターによる活動や能力（公助）の限界を自助・共助により補完する必要性は恒常的に存在している。

また、持続可能な開発目標（SDGs）でも強調された通り、防災は持続的な発展を達成する上でカギとなるコンセプトである。災害に対するレジリエンスを高めるためのリーダーシップが、コミュニティ・地方自治体・国家レベルのみならず、近隣諸国との連帯、そしてグローバルレベルで非常に重要である。

このような文脈において、いかにして市民は防災力を高めるためのリーダーシップを発揮することができるだろうか。そして、社会全体による参加と連携は、どのように実現できるだろうか。

また本コースでは、グローカルな連携による防災力の強化をテーマに、① 様々な状況や情報を多角的に分析する力、② 議論を通して洞察を深めあう力、③ ①と②をベースに建設的な意見を交換できるディスカッション能力も高める。

2. コースの全体の目的

あなた自身がどのセクター（行政、企業、NGO/NPO等）・組織・レベルに属して活動するとしても、防災の取組に必要とされるリーダーシップには、明快なビジョン、計画、能力、所属するセクター内や他セクターとの間における連携及び関係者との協働という要素が含まれる。そこで本コースでは、市民社会組織（Civil Society Organization =CSO）による様々な防災活動事例をもとに、災害の定義、災害マネジメントサイクルと防災を担うセクターの種類、多様な関係者の参加と連携、人道支援の質と組織の説明責任、支援活動の終了基準、ステークホルダーの自発性を高めるコミュニケーションの要素などを議論し、実践につなげる。

また、将来のグローバル・リーダーとして、参加青年は防災に関する互いの経験や知識を共有し、様々な視点から学び合うことを通して、共感の伴った傾聴力を磨き、説得力のある論理的な伝え方ができるディスカッション能力を高めていく。そしてプログラム終了後には、リーダーシップを発揮して社会に働きかけることができる人材となることを目指す。

3. 事前課題

※日本参加青年のみの事前課題

- 課題図書に基づくエッセイの提出
  以下に紹介する参考文献を精読し、本コースで取り扱う防災に関する基本的な知識を、自身の見解とともに整理しておくこと。

＜参考文献＞
『災害ボランティア入門』
発行：ピースボート災害ボランティアセンター（編）
https://pbv.or.jp/volunteer_training/booklet
＜エッセイ内容＞
全3章のうち、自身が最も興味を持った章を一つ選び、以下の内容をエッセイにまとめること。

i) その章に興味を持った理由
ii) 自身の見解

なお、エッセイはまず和文で作成し（A4 × 1 ～ 2 枚程度）、更に同じ内容で英文でも作成すること（A4 × 1 ～ 2 枚程度）。ただし、英文エッセイについては翻訳能力をテストすることが目的ではないので、逐語訳である必要はない。あくまでも、自身の見解を自らの言葉で伝えるための準備として取り組むこと。

※日本・外国参加青年共通の事前課題

3.1. プレゼンテーションの準備

自分自身がこれまでに参加した（もしくは関心のある）身近な防災の取組について、下記の要領でポスター形式のプレゼンテーション資料を作成する。

- ポスターに盛り込む内容として、氏名、出身国名、居住地域もしくは自国における主な災害の概要、身近な防災プロジェクト、その目的、内容、活動主体、社会的ニーズ、鍵となる要素、実施に当たって必要な資源（資金・人的資源・物的資源を含む）、対象、期間、成果、社会にとっての利益、評判、自身の見解などを含むこと。
- 仕様は A4 一枚とする。文章だけでなく、写真やイラストなどを効果的に盛り込むこと。作成に当たってはパソコンあるいは手書きどちらでも良いが、必ず PDF 形式のファイルにして提出すること。

3.2. エッセイを書く

自分自身が将来運営したい防災活動について、下記の要領で短いエッセイにまとめる。

i) 氏名、出身国名
ii) 自身が将来取り組みたいと思う災害リスク一つと、その背景
iii) そのリスクに関心を持っている理由
iv) そのリスクが低減された理想の状態
v) あなた自身の活動プラン

- 仕様は A4 一枚（400 ～ 800 ワード）、英文、Word 形式で作成・保存することとする（手書きは避けること）。なお、原本はコース中にも使うため、紙媒体の形で一部持参すること。

3.3 自国政府による災害対策について調べる

自国の政府がどのような災害対策を講じているか分かるサイトや資料を探し、各自で概要を把握しておく。（日本参加青年については、次の資料に目を通しておくこと。）

『日本の災害対策 Disaster Management in Japan』
発行：内閣府
http://www.bousai.go.jp/1info/pdf/saigaipamphlet_je.pdf

3.4 国連による仙台防災枠組について予習する

2015 年 3 月に国連防災世界会議において採択された仙台防災枠組について、下記に紹介する資料を読んでおく。

＜参考文献＞

『市民のための仙台防災枠組 2015-2030』
発行：防災・減災日本 CSO ネットワーク（JCC-DRR）
http://jcc-drr.net/wpJD/wp-content/uploads/2016/03/SFDRR_2a.pdf（日本語）
http://jcc-drr.net/wpJD/wp-content/uploads/2017/03/SFDRR_EN_1a.pdf（英語）

4. 各セッションの概要

セッション 1：災害マネジメントのサイクル、世界の様々な災害リスクとその取組	
ねらい	活動の内容
■ 世界の災害リスクについて互いから学ぶ	■ プレゼンテーション：参加青年の出身各国にみられる災害の概要 ■ 講義：「世界リスク指標 (WRI)」に基づいた、出身各国のリスクレベル ■ ディスカッション：高額保険損害額の上位 40 件と大災害による犠牲者数の上位 40 件の比較から課題を特定する ■ 講義：災害マネジメントのサイクル ■ プレゼンテーション：参加青年のコミュニティにおける身近な防災の取組例及び以下の項目 • 目的 • 内容 • 活動主体 • 社会的ニーズ • 鍵となる要素 • 実施に必要な資源 (資金、人的資源、物的資源) • 対象 • 期間 • 成果 • 社会にとっての利益 • 評判 • 自身の見解など
このセッションの主な学びと成果	
● 参加青年は互いのプレゼンテーションから世界各国の様々な災害リスクの特徴を理解したほか、「世界リスク指標 (WRI)」から各国のリスクレベルについても理解を深めた。 ● ディスカッションでは、世界での災害における保険損失額と犠牲者数の比較をするなかで、途上国と先進国では異なる脆弱性が見受けられることに気付いた。防災活動を行う上で、何が問題の本質なのかを特定し、真の課題に対する有効な解決策を導き出すことは、世界的な挑戦であると多くの参加青年が感じた。 ● 参加青年は、各自の出身地域における防災プロジェクトを紹介し合い、災害マネジメントには災害前の備え、災害後の緊急対応、復旧、さらに長期的な復興というサイクルがあり、それぞれの段階ごとに様々な取組があることを学んだ。	

セッション 2：災害の定義、防災のステークホルダー	
ねらい	活動の内容
■ 防災活動を担う多様な主体・組織形態等について理解する ■「災害」の定義や防災活動の意義等について考える	■ ディスカッション： • 「災害」の定義とは？ • 防災活動の意義とは？ ■ 講義： • 防災の多様な主体(行政、企業、CSO 等) 及びそれぞれのステークホルダー • CSO が国連の場において、どのように国際社会に向けた提言活動を行ったか (例：仙台防災枠組) ■ ディスカッション： • 災害時に起こりうるシナリオを想定した、自助・共助・公助の防災・減災策 • 公的支援の役割及び限界
このセッションの主な学びと成果	
● 参加青年は小グループに分かれ、防災の定義と防災活動の意義について話し合い、その後、UNISDR (国連国際防災戦略事務局) による定義と照らし合わせた。 ● 参加青年は、第 3 回国連防災世界会議に際し、東日本大震災の経験と教訓をもつ日本の CSO たちがどのように国際社会に向けて提言活動を行ったか、またその結果として、仙台防災枠組は自然要因だけでなく人為的要因による災害リスクにも適用されることになったことを学んだ。 ● また、このセッションでは防災の文脈において誰が何の役割を担っているのかについても扱った。リスクの低減とレジリエンスの向上には公共セクターの役割が重要である一方で、コミュニティを強くするためには、全関係者の参加によるチームとしての努力が不可欠である。参加青年は、異なるセクターにおける多様な主体、それぞれの関係者及びその役割と限界についても理解した。	

セッション 3：コミュニティ主体の防災・減災策は、どのように立案できるか	
ねらい	活動の内容
■ 防災・減災策の意思決定プロセスに多様な関係者を巻き込む必要性について考える	■ ワークショップ：災害図上訓練（災害想像ゲーム DIG）- “SWY 島”での災害シナリオに基づくコミュニティ主体のハザードマッピング演習 ■ ディスカッション： • コミュニティの特徴及びその弱みと強み • 自助・共助・公助それぞれが取るべき防災・減災策
このセッションの主な学びと成果	
● このセッションでは災害図上訓練（災害想像ゲーム DIG）が紹介された。これは簡単かつ低コストな机上で実施できる災害マネジメント演習である。実施に当たり、参加青年には「SWY 島」に地震と津波が発生したという想定のシナリオが与えられた。参加青年は、配布された船のフロアマップを用い、ハザードマップを作成した。地形･主な施設･活用しうる資源などを地図上で特定、潜在的な危険を想像し、避難計画について話し合った後、自助・共助・公助それぞれの防災・減災策を計画した。 ● 参加青年は、皆で同じ地図を囲み、一緒に考えたにもかかわらず、様々な視点を持ち込むことで、考え方や優先順位に違いが生じること、そのためコンセンサスを得ることはある種の挑戦であり、平時からの備えが重要であることに気付いた。 ● このような参加型の手法によって、参加青年は自分たちのコミュニティに対してオーナーシップの意識を持つことが、レジリエンスを高めるためのコミュニティ・エンパワーメントにおいて最初のステップであることを理解した。	
セッション 4：防災を担うセクターの中でも、特に市民社会組織（NGO/NPO）についての批判的な分析	
ねらい	活動の内容
■ 人道支援の質と、受益者に対する支援者の説明責任について学ぶ ■ 支援活動の終了基準を明確にすることの重要性について認識する	■ 講義： • 人道支援の質と説明責任に関する必須基準 • 出口戦略策定の重要性 ■ ディスカッション： • 災害後における被災者のニーズと、それに対応する支援者の思い • 危険を伴う活動にボランティアを派遣する前に、CSO が検討すべきこと（例：福島原発事故後の支援） • プロジェクトの成功度合はどう測るか？ • 活動終了の適切なタイミングを決定するに当たって、何がその目安となるだろうか？ • 残された課題がある場合、何ができるだろうか？
このセッションの主な学びと成果	
● このセッションでは、防災を担うセクターの中でも、特に人道支援団体についての批判的な分析を行った。参加青年は支援の質と説明責任の概念について議論し、適切な活動を行うこと、責任をもってリソースを使うこと、透明性を保つこと、コミュニティに対して適切に関与・滞在・撤退することについて学んだ。本セッションを通じて参加青年は「良く行うこと」と「危害を加えないこと」の違いを深く理解した。	
セッション 5：ステークホルダーの自発性を高めるコミュニケーション	
ねらい	活動の内容
■ ステークホルダーのモチベーションを高めるための、コミュニケーションの要素を学ぶ	■ 講義：個人・グループ・組織・社会の各レベルにおいてレジリエンスを高める、効果的なコミュニケーションのための「三つの要素」 i)「わかる（＝把握可能感）」：情報把握 ii)「できる（＝処理可能感）」：資源調達 iii)「意味がある（＝有意味感）」：動機の源泉 ■ ワークショップ：SWY 防災プロジェクト –「世界リスク指標（WRI）」から特定される課題を題材にした模擬プロジェクト立案演習 ■ プレゼンテーション：参加青年各自が将来運営したいと考えている防災活動

このセッションの主な学びと成果
● このセッションでは、課題やストレスに直面する際の個々人の能力について焦点を当て、アーロン・アントノフスキーが提唱する医療社会学理論を学んだ。この理論によると、人が課題やストレスを乗り越える時の重要な要件は首尾一貫した感覚を発達させることである。防災活動においては、分類の三つめの要素である有意味感が重要である。意味を見出せなければ人々のモチベーションは低下するであろうし、状況改善に向けた努力をしようと動機づけられることはないであろう。 ● 次に参加青年は小グループに分かれて模擬企画の立案に取り組んだ。各グループには四か国の青年が含まれており、そのうちの二か国は、「世界リスク指標（WRI）」によると、国家的課題点として「災害の影響を受けやすい」「対処能力が不足している」「適応能力が不足している」のいずれかが指摘されている。そこで参加青年は、これらの国に横たわる社会問題を特定し、それを解決するプロジェクトを立案した。発表に際しては、聴衆が潜在的なステークホルダーであると仮定して、彼らから企画に対する賛同を得やすいように、先に学んだ理論をふまえ、概要・目的・必要となるリソース（それぞれ「把握可能感」「有意味感」「処理可能感」に関連）について明確に説明した。 ● 最後に、参加青年各自が将来取り組みたいと考える防災プロジェクト案についても三つの要素を踏まえながら発表したところ、他の参加青年たちから多くの有益なフィードバックを得られることを体験した。このことから、参加青年は、コミュニケーションにおけるこの三つの要素を用いると、いかに周囲から様々な協力が得やすくなるか、そして実践に向けてモチベーションが高まるかを理解した。

5. ファシリテーターのコメント

本コース・ディスカッションの目的は、社会のレジリエンスを高めるグローバル・リーダーとしての能力を、各参加青年が防災の観点から習得することであった。したがって、災害の定義、災害マネジメントサイクルと防災を担うセクターの種類、多様な関係者の参加と連携、人道支援の質と組織の説明責任、支援活動の終了基準、ステークホルダーの自発性を高めるコミュニケーションの要素などの理解に、指導の力点を置いた。また、各家庭やコミュニティにおける潜在的なリスクに対する関心を高めるために、災害シミュレーションを通した実習の機会も設けた。

事前課題は互いから学び合うための教材として活用され、参加青年はセッションを通して各自の様々な知識・経験･関心･ビジョン･アクションプランを共有し合った。参加青年ごとにそれぞれ固有のトピックやビジョンでありながら、バックグラウンドにおける違いを越えて大いに共感を覚えるものであった。

ディスカッションの前提として、災害リスクが人間生活や社会発展に与える影響について、説得力を伴う議論を展開するためには、証拠を活用することも重要である。そこで、Bundnis Entwicklung Hilft による「世界リスク指標（WRI）」を度々参照し、課題特定の根拠とした。

また、特定した課題を解決する手段として人道支援プロジェクトを立案・実施するに当たっては、そのモラルが厳しく問われる。そこで、世界中の人道支援を提供する CSO がどのようにして、人道及び人権という共通の価値に根差した支援策を実施しているかに触れた。さらに、防災・減災計画の協議プロセスに多様なステークホルダーを巻き込むことについても焦点を当てた。将来の CSO リーダーという前提で、参加青年たちは適切かつ責任を伴った人道支援策を計画・実施する上での重要な視点について検討したが、その目指すところとは、安定した状況で被災者が尊厳をもって生存・回復できるようにすること、そのためにコミュニティをエンパワーし、その自立を支援することである。将来、参加青年はここで得た知識を実践の場でいかしてくれるであろう。

最後のセッションでは、防災活動におけるステークホルダーのやる気を引き出すコミュニケーション能力を身に付けるため、ストレス対処能力に関するアントノフスキー（1979）の「首尾一貫感覚（Sense of Coherence = SOC）」モデルを基礎とし、その中核となる三要素【把握可能感（「わかる」感覚）】、【処理可能感（「できる」感覚）】及び【有意味感（「意味がある」感覚）】についてもコース・ディスカッションで育成した。ここで把握可能感とは、出来事が論理的で秩序があり、矛盾なく構造化されていると理解する程度を指す。また、処理可能感とは人が対処可能であると感じる程度を指し、有意味感とは、人生に意味を見出し、試練に立ち向かう価値があると感じる程度のことをいう。強い SOC は人生の満足度を高め、疲れ・孤独・不安を和らげるとされる。被災者に対してメンタルヘルス及び心理ケアを提供するという文脈においての理解のみならず、参加青年がこの理論を応用しながら互いにビジョンを表明し、応援しあう関係を築いていく様子は非常に喜ばしいものであった。参加青年にとっても、社会貢献への一歩を踏み出す自信となったことであろう。

コース運営に関しては、英語力と専門的経験において参加青年の間にバラつきがみられ、初期の段階で大きな問題点として認識されたが、参加青年は第二言語としての英語話者に対するコミュニケーション上の細やかな配慮を示し続けた。また、コース・ディスカッション委員の発案により、日本参加青年向けには日本語による予習・復習の機会を各セッション毎に設けた。参考資料には、基礎的な情報は英語版と日本語版の両方を用意したほか、上級者の学習ニーズには学術論文や研究報告書などの副教材を配布することで対処した。全体的に、コースは主な目的とねらいを満たしたと言える。

このたび防災コースの参加青年と共にいられたことは、大きな喜びであった。彼らは、一人一人が豊かなリ

ソースを持つ個人として存在すると同時に、集団としての力を最大化し、「世界青年の船」事業の特性を存分に発揮した。殊に、コース・ディスカッション委員が発揮したすばらしいリーダーシップと参加青年全員の活発な参加が、本コースを価値ある場に創りあげたことを特筆したい。

参加青年は積極的な市民となるための新しい視点やヒント、そして真の知恵を得てくれたものと思う。今後は各自の地域コミュニティで、またグローバル社会において、本コースの参加青年がリーダーシップの担い手となってくれると信じている。リーダーとして存在することは、必ずしも薔薇色のプロセスではないかもしれない。しかし、参加青年一人一人がこれから社会にもたらすプラスのインパクトは、彼らが手を差し伸べようとする人々の前途を薔薇色の光となって照らすことだろう。彼らの輝かしい未来を祈念したい。

6. 参加青年の感想

コートニー・ハンター（オーストラリア）

災害には自然災害・人為災害の二種類があり、これらは私たちの地球上での暮らしの一部である。ところが近年、その議論の焦点は「災害発生後どう対応するか」から、「災害の影響や危険を事前に軽減するために、人間やコミュニティのキャパシティをどう強化するか」へと変化してきている。

日本は自然災害に対して脆弱であるので、自助・共助・公助という三つのレベルにおける災害への対応やその軽減に関する教育に、膨大な時間・資金・労力を注いできた。東京での課題別視察でDRRコースは、防災・減災におけるキャパシティ・ビルディングに力を入れている二つの組織を訪問することができた。

東京の「本所防災館」では、台風や地震、そして火事が起こった時のシミュレーションを体験した。私たちの多くは、これまで自然災害を経験したことがなかったため、楽しく安全な環境の中で大切なスキルを学ぶすばらしい機会であった。

次に「防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）」を訪問し、小美野剛氏からお話しを伺った。小美野氏は防災・減災についての経験が豊富で、多くの災害関連CSOをつなぐ中心的存在である。小美野氏は講演の中で自身の現場での経験を話してくださり、コミュニティの防災・減災能力を強化していくという観点で、更にこのテーマを学び進めたいという意欲を私たちに抱かせてくださった。

世界の災害及びその影響について理解が一段と深まったところで、この知識を実際に試してみることになった。「災害図上訓練（災害想像ゲームDIG）」では、架空の災害が私たちのホームである「にっぽん丸」に降りかかり、私たちの生活を根底からひっくり返してしまう。そこで、船のフロアマップを使い、どのように自分自身の身を守り、そしてどのように災害時に仲間と共同して対応するべきか考えた。このゲームから得られた学びは、私たちが自身のコミュニティに戻ってプロジェクトを実行するときに重要なものとなるだろう。

防災・減災に関する新しい知識を得た私たちは、次にインドのコチ科学技術大学とスリランカのコロンボ大学を訪問した。そこでは、これまでの学びをもとに現地学生とディスカッションの場を持ち、インド及びスリランカにおいて、どのようにしたら防災・減災の活動をより良く実行できるかという解決策について、彼らと一緒に考えた。彼らがコミュニティの中で防災・減災活動を実行していく上で、私たちとの出会いがきっかけとなればと考えていたとおり、まさに彼らは将来の変化をリードするであろう存在で、そんな彼らと重要な対話をし始めることができた手応えを感じた。この現地学生との議論は私たちにとっても非常に実り多く、船内でのその後のコース・ディスカッションにつながるものとなった。

このコースへの参加によって私たちが得たものとは、各自がコミュニティで直面する災害へより良く対応するスキルであり、また、それらの知識を自身のコミュニティに還元していく力だと感じている。気候変動の影響が高まっており、それがより多くの自然災害にも影響を与えていることを踏まえれば、起こってしまった災害の被害を最小限にとどめること、災害に対応すること、そして究極的には「ビルド・バック・ベター（より良い復興）」ができるよう、自分たちのコミュニティをしかるべき知識とスキルで備えさせることがますます重要である。

岩崎 真夕（日本）

私が防災活動のための人材育成コース（DRR）を選んだ理由は、防災・減災に関する知識を得て、将来災害現場の取材に行ったときに被災者の心境やニーズに寄り添った情報発信をしたいと考えたからだ。

私はこのコースに参加するまで、防災の担い手としての当事者意識を持てずにいた。東日本大震災が起こったときにも、私の住んでいた高知県はほとんど被害を受けることがなかった上、被害を受けた地域に住む知り合いもいなかったからだ。

しかし、このコースに参加し、世界各国から集まった青年たちと意見交換をしたことが私の見方を変えた。被災経験や災害ボランティアへの参加経験を聞き、災害発生時に自分自身や周りの人を守るために何ができるのかと思いを巡らせた。また、今回の寄港地であるインドは原発政策を推進しているが、日本では2011年の福島第一原発の事故以降、原発の安全性を疑問視する声が高まっている。もし日本の原発事故の教訓がいかされなければ、インドで温かく歓迎してくれた人々、この船で出会ったインドの友人にも同じことが起こるのではないかと危機感を覚えると同時に、災害リスクをより現実的で身近なものに感じた。

また、一市民でも社会に影響を与えることができるという講義も印象的だった。講義の中で「いつかあなたの声を国連に届けることができると思いますか」とファシリテーターが問いかけた時、「できる」と答えた人はほとんどいなかった。しかし、東京での課題別視察でお話を伺った防災・減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）では、アドボカシー活動を行い、国連で採択された仙台防災枠組に影響を与えることに成功した。私たちは世界的な課題に対しても当事者意識を持ち、それぞれの立場から働きかけることができると知った。

私は将来、ジャーナリストになり、情報発信の観点から防災・減災に貢献したいと考えている。特に、災害発生時には様々な流言やデマが蔓延り混乱をきたすほか、日本語の分からない外国人は情報弱者となりうる。そのため、本コースで得た知識をSNSやブログで発信することで、平時から災害リスクについての正しい理解を促進することや防災意識を向上させることに継続して取り組みたい。また、ジャーナリストとしては、災害現場で早く正確な情報を発信することで混乱を防ぎ、被災した地域の人々を支えたい。さらに、防災・減災に役立つ情報を提供し続けることで、災害による被害を最小限にとどめ、1人でも多くの命を救う存在になりたい。

自他をエンパワーする対話コース

副題：副題：自分のため、そして私たちのために生きる

ファシリテーター：ポール・ファリス
参加青年：35名（JPY 20名・OPY 15名）

1. コース概要

参加青年はエンパワメントの世界的な傾向について検討する。各セッションは参加青年が自身と他者をエンパワーする方法に基づいて計画される。また、本コースの内容は、今年度の「世界青年の船」事業の全セミナーやコース・ディスカッションで扱われるリーダーシップの要素にも共通する。参加青年はエンパワメントの特徴を分析し、国際連合の持続可能な開発目標に含まれる質の高い教育の実現に貢献することを目的とする。

2. コースの全体の目的

参加青年は少人数・大人数でのディスカッション、発表、ワークショップ等の様々な活動を通して、個人や船上での経験に重ねることにより個々や集団によるエンパワメント、エンパワーされることについて理解を深めることをねらいとする。

期待される成果：

1) エンパワメントに対する知見を深めるとともに、公私の中での必要性を理解する。
2) 政策立案、プロジェクトマネジメントとデータ分析上でのエンパワメントの役割について認識する。
3) 国連の持続可能な開発目標の一つである質の高い教育の実現に向けエンパワメントを実践する。

取得できる能力：

1) 正直であることに不安を感じず、質疑応答をすることに抵抗を感じない信頼できる環境でクリティカルシンキング、プレゼンテーション能力やコミュニケーションスキルを成長させる。
2) 異なるバックグランドや意見を持つ他者を敬い、尊重する。
3) 個人のアイディアを共有し、他者をエンパワーできるようになる。

3. 事前課題

- 12月30日までにコースのメーリングリストを使用し、同エンパワメントコースメンバーに自己紹介をする。形式は自由とする。
- 本コース内容は「インビテーショナル教育」に基づいている。下記教材を事前に一読すること。ウィリアム・ワトソン・パルキー及びジョン・マイケル・ノバック著「An Introduction to Invitational Theory」(2015年9月)。
- 自由なテーマで相手をエンパワーするための2分間レッスンを準備する。例：特技、手品、豆知識、ゲーム、体操、アイディア、ハウツー等。会話でも話さずとも教えることができるように用意しておく。第二言語が話せる場合、第二言語での発表も含む。自分の熱い思いを伝えること。
- インスパイアされたアート作品を共有できるよう用意する。文学、映像、音源、メディア等をアナログもしくはデジタル形式で船上研修に持参すること。持参した作品にエンパワーされた理由を説明できるよう準備しておく。
- 自分がエンパワーされた経験について（いつ・どの様に）箇条書きでまとめる。またディスエンパワーされた経験についても記載する。両ケースの

理由を述べること。
- エンパワーできる人とディスエンパワーする人の特徴を挙げる。
- 他人からの指摘やアドバイスを受け入れるのが得意・不得意な人の特徴を挙げる。
- 誠実さ、信用性、公正性、好奇心と共感力について述べる。

※ 上記の課題は、エンパワメントの基礎的手法を用いて共有、実践するために用意された課題である。各質問において特定の解答はなく、質問の中には議論を促すためにあえて曖昧にしたものも含まれている。各回答は１月の集合時に持参すること。

4. 各セッションの概要

セッション 1：エンパワメントとは何か及びエンパワーされることとは

ねらい	活動の内容
■ エンパワーされるレッスンについてディスカッションする ■ 人をエンパワーするために知っておくべきこととは	■ 2 分間レッスンの発表及び刺激を受けたアート作品の共有。 ■ 人を巻き込む力とは。 ■ エンパワーされるためには、どのような姿勢が必要か。 ■ ビデオ「文化的観点」

このセッションの主な学びと成果

- 自身をエンパワーするもの、ディスエンパワーする事柄について簡単なディスカッションからセッションを開始した。ディスカッションを続け、「差別」の恐ろしい部分とは何か、表面化されてない社会システム内での差別とは何か、参加青年が人生を通して体感する差別とは何かという話へ変わっていった。制度内の人種差別の意味を問われた参加青年は、「体験したことがないので分からない」と答えた。生まれ育った環境や国の違いを超えた理解を深めるため、本コースの全メンバーの様々な視点・観点を互いに理解するのが不可欠であるという事実を明確にした。
- 事前に準備を行っていた 2 分間レッスンの発表を行った。発表されたレッスンを基に、エンパワーされたレッスンに共有していた特徴についてチームで話し合った結果、APR サークルの法則に当てはまると認識された。
- エンパワーするためのツールの一つとして、予見（Anticipation）→参加（Participation）→反映（Reflection）→ A → P → R → A の法則についてディスカッションを行った。良い準備（予見）によって行う効果的な発表（参加）、自分のプレゼンに対する批評を受け入れること（反映）はまた次のステップの予見、参加につながる。
- 学ぶ際の姿勢や態度の重要性に関するビデオを鑑賞した。

セッション 2：どのようにエンパワーをするか

ねらい	活動の内容
■ エンパワメントに対するイメージを固める ■ エンパワメントの特徴について考える	■ 人生や学び、また経験についてのサークルを描く。 ■ 相関性と蜘蛛の巣モデルについての意味とは。 ■ ビデオ「リーダーシップの行動」

このセッションの主な学びと成果

- 自分の蜘蛛の巣モデルを発展・拡大させ続けることが重要である。また、下記の手法を用いることにより効果的に発展させることも可能である。
  - 多くの人々との出会い、経験を重ねる。
  - 蜘蛛の巣モデル内の各要素の相関性を強化する。
  - 蜘蛛の巣モデルの各要素の共通点を強化する。
  - 素直になることでサポートを受けること、信頼してもらうことに慣れる。
- 日々の中のささやかなリーダーシップの必要性と重要性についてのビデオを鑑賞した。自分のささやかな行動・行為が相手の手助けをしているという思想があった。ビデオ内で登場したドリュー・ダドリーによると、リーダーシップは特別な人間でない限りとることができないということは難しく考え過ぎであると強調した。

セッション 3：自分の経験

ねらい	活動の内容
■ 招致教育について議論する	■ 招致教育論について議論する。 ■ 好奇心と共感について定義する。

このセッションの主な学びと成果

- 「個々の集合体」は蜘蛛の巣モデルのイメージとアイディアを説明するために用いられた。個人の能力、経験、開発は自分の蜘蛛の巣モデルを発達させるのに役立ち、尚かつ個人や世間へ良い効果をもたらす。
- 相関性の構築は蜘蛛の巣モデル上で情報を見付けるための方法と道筋を結び付けるために使用された言葉である。
- 好奇心は本質をとらえ質問し、より良い決断をするのに役立つということを学んだ。その学びから、4 種類の情報に分類ができるという考えを議論した。
  1. 自分が知っている知識があることを自分で知っている（自分自身に知られている既知）。
  2. 自分が知らない知識があることを自分で知っている。
  3. 自分で知っている知識があることを自分で知っていないという事実。
  4. 自分の知らない知識があることを自分が知らないという事実（自分が知らない未知）。
- 自分が持っている関心や自己不信を共有することや共感することについてチーム内で議論した。個人的な不安を共有した参加青年 2 名に対して支援をしたり、涙を流した人もいた。
- コースのチームメンバーは自然と抱き合いながら円となり、その参加青年 2 名をサポートし涙を流した。その光景はとても力強いものであった。
- 招致教育の理論は「意図的に勇気を奮い起こさせることは、人間の全ての試みにおいて彼らの無限の可能性に気付かせること」と定義され、エンパワメント・コース内の議論におけるベーシックな考え方となる。
- 好奇心とは「事実を集めるためのエンジン」と定義した。
- 共感力とは「感情を集めるためのエンジン」と定義した。
- 上記二点の集合体をより深く発展させ育てることは自身や世界のエンパワメントにつながる。
- イヌイットの教育に関するビデオを 2 本鑑賞した。イヌイットの教育では、狩りや伝統的な遊びを知り、先祖代々続く文化を学ぶことによりエンパワーされている事実を知った。そして、チームはトニ・モリスンの言葉を引用しその後セッションを締めくくった。
  「自分がされたことや言われたことは覚えていないかもしれない。しかし、どのような気持ちにされたかはずっと覚えているだろう」

セッション 4：個人から世界レベルで通用するコミュニケーション

ねらい	活動の内容
■ エンパワメントのルーツについて話し合う	■ エンパワーできるコミュニケーション哲学とは何か。 ■ 個人とグループでの議論「両親を選ぶことは人生における選択の中で最も重要である」

このセッションの主な学びと成果

- 以前のコミュニケーション･レッスンについて振り返り、実際に実践した。その際、正確さ、明確さ、精密さやシンプルさを重点とし、プレゼンテーションやコメントを行った。
- 「早く行きたければ、一人で行けば良い。遠くに行きたければ、共に行きなさい。」という言葉の意味をチームで繰り返し話した。
- 自分の親を選ぶことは、人生の中で決める選択の中でも最も重要であるかどうかということについて議論した。参加青年は家族関係、子供の頃の経験、ロール・モデルとはどうあるべきかなど個々の経験を共有した。また、恵まれた家庭環境に生まれることについても話し合った。養子縁組や血のつながりがある両親を探すことについてどう考えるかについても共有された。誕生は宝くじのようなものであり、社会経済的ステータス、国籍、人種、民族やアクセスの全てが運に影響されていることについても考えた。
- 分けたボードに良い点・悪い点をそれぞれ書き出し、書き出す際には互いに見えないように書いた。最終的には共通点が多く見つかり驚く結果となった。その中でも承認と機会は特筆した言葉となった。両方のホワイトボートを基に参加青年が討論した結果、両親が選べる・選べないことや重要な選択であるか・ないかにかかわらず、その二点にアクセスできるかがより重要であると参加青年の中で結論に至った。当初の質問からディスカッションを通し、人生をどう導くことができるか（エンパワメント）について幅広く議論することができた。
- リンダ・エリスの「The Dash」という詩を振り返り、本セッションを終えた。その詩は、人々を墓石の日付へ焦点を当てることを勇気付けた。人生をどのように送るか、どのように人に接するかは自分が死んだ後にどのように人の記憶に残るかに影響する。

セッション 5：エンパワメントしている状態

ねらい	活動の内容
■ 仲間とつながりエンパワメントを一生の学びにするための方法や特性を話し合う ■ ディスカッション「あなたの人生は、あなたの選択によってではなく、あなたが他者をどのように扱うかによって定義される」	■ 参加青年のストーリーを共有する。

このセッションの主な学びと成果
● 最後のセッションは共有の時間となった。参加青年たちは自分の成功や痛み、後悔や信じているものについてのストーリーを共有する際に、そのほかの様々なことも共有した。他にも青年グループのリードの仕方、人命救助のテクニック、自分の世界を制限する事柄、想像をより豊かにするアート、悲劇の話や失敗、成功、憎しみや受諾、自分のリラックスした空間を広げるもの、自分を賞賛するもの等。そして、災害時救援パン（救缶鳥）について参加青年から共有があり、他にも刺激を受けたな製品についても話し合った。 ● 好奇心と共感の重要性を何度も表現するのにふさわしい、数えきれないほどの愛と承認の瞬間が多々あった。最近あった家族の死についての悲しい話が参加青年から共有された際には、本人の耐える力と素直さにチーム全体が涙を流した。また、別の参加青年は、自分が成功から見放されていると感じている話を話した。本コースを通して、勇気と強さをもって話をシェアすることは、エンパワメント・コースのメンバーが互いを思いやり考える直接的な要因となった。 ● 参加青年はありのままのお互いを受け入れ、優しさを持って他人と接するよう努力することを誓った。お互いに対する、サポート、信頼や愛は永遠に互いをエンパワーするだろう。

5. ファシリテーターのコメント

2018 年 1 月 21 日は、東京で 15cm 以上の積雪となる珍しい日であった。雪が積もったオリンピックセンターは美しく、北半球と南半球から集まった 35 人のエンパワメントチームメンバーは雪だるまを作り、雪合戦を行っていた。そして、聡明で思いやりがあり、好奇心旺盛で共感する力があるリーダーたちが初めて集合した日でもあった。互いへのサポートと信頼を堅く約束し、平成 29 年度「世界青年の船」事業のエンパワメントの冒険はそこからスタートした。

参加青年たちは、長い年月をかけて培われた「世界青年の船」事業の絆に対する理解を深めた後に、チームの最初のセッションは 2 分間レッスンからスタートした。始まると同時に、仲間の価値観や客観性を理解することが、「世界青年の船」事業やエンパワメントチーム内の交流をより良くすることを理解した。構造的な差別に対する議論をした後、一人の参加青年に対して構造的な差別の意味を理解しているかどうかの質問があった。彼女は「体験したことがないので、答えられない」と返答した。その返答はエンパワーする相手のバックグラウンドを理解することが極めて大切である事実を明白にするものだった。

他人をエンパワーする場合は質問することが重要であると学んだ。最も重要な質問は、自分が何を知らないのかということに対して正直に自己評価すること。誰かをエンパワーする際は、相手をリラックスさせた状態で質問をする必要があり、リーダーになるためには不可欠なことである。自分自身をエンパワーする際にも、正しい質問をすることが自分自身のエンパワーにつながる。

二つ目の特徴は共感である。家族や関心がある事柄、経験の絵を描くことにより、事前に一度も会ったことがない参加青年同士でも多くの関連性が見えてきた。共通点は蜘蛛の巣（スパイダーウェブ）にたとえられ、参加青年たちは互いのスパイダーウェブの線を継続的に増やし拡大し続けながら、自分自身や他人をエンパワーすることを推奨された。

招致教育の理論を「意図的に勇気を奮い起こさせることは、人間の全ての試みにおいて彼らの無限の可能性に気付かせる」と定義し、エンパワメントチーム内のディスカッションの原則とした。各グループが議論内容を共有し、招致的な会話は好奇心と共感を持って成り立つと大きな気付きがあった。会話を共有することは、あらゆるコミュニティや個人に活用できる個人的かつ組織的な文化構築の要素となる。

インドとスリランカの訪問を終え、ナショナル・プレゼンテーションと言葉のフラストレーションについて意見を述べた。言葉の壁に対する理解に務め、正確さや、明確さ、精密さやシンプルさをプレゼンテーションや共有の際に意識することを改めて理解した。「早く行きたければ、一人で行けば良い。遠くに行きたければ、共に行きなさい。」という言葉の意味をチームで再度確認した。

チームが『人生で一番重要な決断は、両親の選択である』という考えについて議論していた時、討論していた両サイドが、考えを説明する際に使った共通の言葉が『承認（acceptance)』であったという事実は、全員をエンパワーした。人生における運命とコントロールできないことを認めるという能力は、自身をより良くするものであり、力強いものである。

最終セッションはとても力強く人を動かすもので、喜びや痛み、後悔、仲間の信念を受け入れることができる、安心と力強さ、優しさがあるものであった。人生をエンパワーするキュリオシティ（好奇心）とエンパシー（共感）の重要性を改めて強調していた。チームの強み、反発力、他者の承認は、新たなエンパワメントのフレーズを導いた。『どこにいても、私はあなたを支えます。何が起こっても、あなたを信じます。永遠に、あなたを愛します。』

6. 参加青年の感想

長瀬 智寛（日本）

エンパワメントとは、一体何だろう？事業に参加する前は、参加青年の多くが抱えていた疑問であると思う。

ディスカッションでは、相手をエンパワーする「2 分間レッスン」と自分がエンパワーされたことがある「芸術作品の持ち寄り」という二つを軸に、私たち自身の経験や価値観をすり合わせながら対話を重ねていった。セッションを重ねていくなかで、参加青年たちは徐々に心を開いて、経験を共有することがしやすくなってきた。お互いに助け合い信頼し合うことが前提としてあるため、共有したい経験がどのようなものであれ、否定されることはないという安心感はこのチームにおいて大切な考え方である。

経験を共有することを通してチームとして一体感が生まれていた。しかし、一体感というのは、チーム全員が同じ考え方を持っている、同じアプローチをしていることではない。共感できる時もあれば、共感できない時もある。エンパワメントチームとして、自分自身が感じている感覚を自由に表現することができる雰囲気の中で過ごすために必要な一体感に心の底から感動した。

自他をエンパワーするためには、共有したり共感したり様々な方法があるが、それ以前に生きていることの尊さを実感し、そばにいる仲間と共に生きていることに改めて気付かされた。自分でできる最初のステップは、生きていることである。生きていれば、自他をエンパワーするという可能性が生まれてくることを学び、これからも自他をエンパワメントするために生きていこうと思った。

ジョシュア・ジョン・マックイラン（オーストラリア）

エンパワメントコースは全 5 回のセッションがあり、様々な幅広いトピックや問題を取り扱った。ディスエンパワメントや、何を既に知っていて何を知らないかを理解し、自分がどんな人間であるかを理解すること、人生において最も重要な決断などが含まれていた。全てのセッションの礎石となったのは好奇心と共感であった。これによって人生の本質的な部分を共有することにより、互いの信頼のレベルを高めることができた。それぞれがグループ内で共有したことはユニークものであり、共有した人自身の一部となっているもの、勝利や失敗、悲劇、憎しみ、承認に関する話であった。

私たちは日本と寄港地にて課題別視察や施設訪問を行った。コチ科学技術大学を訪問した際には、私は Keerthy という若い法学科生の隣に座り、彼女は母親と同じ様に教師になる道を進みたいと話してくれた。他にも、写真を見せてくれ、いろいろなエピソードを話ながら、彼女の家族に関して詳しく語ってくれた。話をするほど彼女の顔の表情は明るくなっていった。彼女自身は血のつながる家族を彼女にとって精神的支えにしていることが明白だった。彼女と過ごした時間は短いものであったが、これからも私の記憶の中で残るであろう。

エンパワメントによって得られる成果は、特定のアイディアを出したりや製品として物理化するといったものではなかった。達成された成果は、個々の成長とエンパワメントチームの家族、兄弟や姉妹の個々の強大なる成長といったものであった。ディスカッションは終わりを迎えたが、言葉自体はまだ生きている。このプログラムによってメンバー全員がエンパワーをされ、これからもエンパワーをされ続けるだろう。また、学んだことをいかして周囲の人たちをエンパワーをし続けるであろう。

国際協力活動コース

副題：地球市民として国際協力を考える

ファシリテーター：伊藤 洋子
参加青年：36 名（日本参加青年 18 名、外国参加青年 18 名）

1. コース概要

貧困、飢餓、テロ、紛争、自然災害、環境破壊、気候変動など、今、世界は一国だけで解決するのは困難な、複雑に絡み合った課題に直面している。今を生きる私たちに一体何ができるのだろうか。このコースでは、国際協力の異なるアクター（国際機関、政府、市民社会、企業など）や分野（食糧、水と衛生、保健、教育）など、いくつかの視点から国際協力活動への理解を深め、将来グローバル・リーダーとして国際協力活動で活躍できる人材になるために必要な知識、技術、経験は何か理解し、世界の課題解決のために何ができるのかを共に考えることを目的とする。国際協力は持続可能な開発目標（SDGs）とも密接に関係しているので、コースの中では SDGs とも関連付けながらディスカッションを行う。

2. コースの全体の目的

このコースでは、国際協力活動についての基礎的な知識を身に付け、人道支援や開発支援における意義や課題を理解する。そして、その課題解決のために求められる人材についての理解を深め、将来、国際機関、NGO、政府援助機関、企業などによる国際協力活動で活躍するためのアクションプランを作る。

3. 事前課題

日本参加青年のみの事前課題

① 国際協力に関連した活動を行い、ポスター発表にまとめる。発表には、活動先の団体プロフィール、なぜその団体、その活動を選んだのか、あなたのその活動が現地でどのように役に立つのか、受益者は誰か、その団体の行っているプログラムはSDGsのどの目標とどのように関係しているのかについては最低限含めること。活動は、例えば国際協力NGOでボランティアをする、物やお金を集めて国際協力NGOに寄付をするなど、各自クリエイティブな活動を考えて実践すること。活動について相談したい場合は、ファシリテーターに連絡する。また、各地のNGO相談員に相談することも可能。
NGO相談員リスト：http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/shimin/page22_000597.html
仕様：A4で2枚程度のカラーポスター。文字だけでなく、写真やイラストなども利用し、クリエイティブに作成すること。PDFデータを事前にファシリテーターにメールし、プリントアウトしたものをコース中の発表で使用できるよう準備する。

② 日本の国際協力（JICAやJapan Platformなど政府資金による国際協力）の取組（どのようなスキームでどのように現地の役に立っているのかなど）について調べ、ポスター発表を準備する。
仕様：A4で2枚程度のカラーポスター。文字だけでなく、写真やイラストなども利用し、クリエイティブに作成すること。PDFデータを事前にファシリテーターにメールし、プリントアウトしたものをコース中の発表で使用できるよう準備する。

③ 日本の開発支援がどの地域にどの分野でどのくらいの金額で行われているか調べよ。調べた情報を上記②の発表に盛り込んでもよい。
外務省のサイトなどを参照すると便利
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/index.html

外国参加青年のみの事前課題

④ ポスター発表の準備
これまでに携わった国際協力活動について、コース中に発表する準備。プロジェクト名、実施機関、プロジェクトの目的、内容（グッドプラクティス、課題、学びも含める）、受益者、SDGsのどの目標に関連しているかなどの情報を含める。これまでに国際協力に携わったことのない人は、自分の国の国際協力のスキームについて調べ、発表すること。
仕様：A4で2枚程度のカラーポスター。文字だけでなく、写真やイラストなども利用し、クリエイティブに作成すること。PDFデータを事前にファシリテーターにメールし、プリントアウトしたものをコース中の発表で使用できるよう準備する。

日本参加青年・外国参加青年共通の事前課題

⑤ メーリングリストを通じて自己紹介する。その際、名前、なぜ国際協力コースに興味を持ったのか、このコースから学びたいことなどを述べる。すでに国際協力活動に携わっている人は、どのようなことを行っているのかも簡単に述べる。

⑥ UN competenciesを読んで、どのような人材が国際協力に求められているか述べよ（A4、1枚Font: Times New Roman, Font size: 10.5英語）。コースが始まる前までにファシリテーターにメールで提出すること。コース中に人材について話し合うときに、必要であれば各自参照すること。
UN competencies: https://careers.un.org/lbw/attachments/competencies_booklet_en.pdf

持続可能な開発目標（SDGs）については以下のリンクなどを参照すること。
https://sustainabledevelopment.un.org/sdgs
（英語）
http://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sdg/post-2015-development-agenda.html　（日本語）

4. 各セッションの概要

セッション 1：国際協力活動とは何か	
ねらい	活動の内容
■ 参加青年同士の関係構築 ■ このコースで扱う国際協力活動について共通理解を持つ ■ 国際協力の異なるアクターや分野について理解を深める	■ グループワーク：国際協力コースでの学びを最大化するためにはどうしたらよいかアイディアを話し合い、発表。 ■ グループワーク：グループごとに、事前課題の国際協力活動についての発表を行い、国際協力のアクター、分野、具体的な活動、SDGsとの関連についてまとめ、発表。
このセッションにおける主な学びと成果	
● 参加青年は国際協力コースでの学びを最大化するためにどうしたらよいか、それぞれの考えをシェアした。 ● 日本参加青年と数名の外国参加青年は、自身で参加したことのある国際協力活動について発表した。その他の外国参加青年は自分の国の国際協力活動について発表した。それぞれが小グループで発表した後に、国際協力のアクター（政府機関、NGO、個人、UN機関、ドナー、民間セクター）、セクター（平和、教育、難民）、活動、SDGsとの関係について話し合った。IC活動は全てのSDGsと関連していることが分かった。	

セッション 2：なぜ国際協力が求められているのか	
ねらい	活動の内容
■ SDGsについての理解を深める ■ 人道支援についての理解を深める	■ グループワーク：SDGsに詳しい参加青年によるSDGsの概要説明の後、なぜ国際協力が必要かグループごとに話し合い、発表。世界の課題やSDGsなどとも関連付けながら話し合うこと。また、その課題解決のために、国際機関、各国政府、市民社会、企業などがどのような役割を担っているか、一市民として私たちに何ができるのかも話し合い、発表する。 ■ 看護師の畑井智行氏による国境なき医師団での国際協力活動経験のシェアリング
このセッションにおける主な学びと成果	
● 参加青年は国際協力の重要性について学ぶとともに、SDGs達成のためのアクターの役割について話し合った。例えば、SDG4「質の高い教育をみんなに」についての発表では、政府はより良い政策と投資によって教育を優先すること。恵まれず、脆弱で、周縁に追いやられた人々を支援する機会を増やす。民間セクター、NGO、市民がSDG4で言われている質の高い教育を実現するための教育資源や施設を提供するよう奨励する。 ● 参加青年は畑井氏の経験からどのように人道支援活動従事者になるのか、現場で何をするのか、国際協力活動を継続する動機などについて学んだ。	

セッション 3：人道支援について	
ねらい	活動の内容
■ 人道支援について理解を深める ■ 人道原則について理解する	■ 発表：SDGsとSDGs達成のための国際協力アクターの役割についてグループ発表 ■ 講義：防災管理サイクルと人道支援のためのクラスター・アプローチについて ■ 講義：人道原則（人道性、公平性、独立性、中立性） ■ グループワーク：人道支援の課題についてグループごとに話し合い、発表
このセッションにおける主な学びと成果	
● 参加青年は防災管理サイクル（被害抑止、被害軽減、準備、災害、応急対応、復旧、復興）と人道支援組織がコーディネートするためのクラスター・アプローチについて学んだ。 ● 参加青年は人道支援活動の従事者が、組織が適切に支援活動をコーディネートするためのクラスター・アプローチや、原則に基づいた方法で支援活動を行い、責任ある行動をするために人道原則を学ぶ重要性について学んだ。	

セッション 4：開発支援について	
ねらい	活動の内容
■ 国際人道法、国際人権法について理解する ■ なぜ人道支援活動従事者は国際人道法や国際人権法を知る必要があるのかを理解する ■ 開発支援についてファシリテーターの経験から学ぶ	■ 講義：法律の知識のある参加青年による国際人道法と国際人権法についての講義 ■ ファシリテーターによるミャンマーにおける開発支援活動のシェアリング
このセッションにおける主な学びと成果	
● 参加青年は国際人道法のうちジュネーブ条約I、II、III、IVと追加議定書I、II、III、及び国際人権法について学んだ。また、参加青年は条約法と、国がたとえ署名していなくても従わなくてもならない国際慣習法について学んだ。さらに、戦闘力を失った兵士、一般人、病院などの民間施設はこれらの法律によって守られていること、法は国際的武力紛争と非国際的武力紛争に適用されることを学んだ。 ● 国際人道法や国際人権法で、被災者は保護され、支援を受ける権利があるということが定められているので、人道支援団体はそのサービスを提供することができることを学んだ。 ● 参加青年はファシリテーターの経験のシェアリングを通して、開発支援活動実施プロセスについて学んだ。	

セッション 5: 国際協力活動で求められる知識、技術、経験。今わたしたちに何ができるのか	
ねらい	活動の内容
■ 参加青年が関心のあるトピックについて意見を交換する ■ 日本の国際協力について提言を作成する ■ 国際協力を実践するためのアクションプランを作る	■ グループディスカッション：参加青年が関心のあるトピックについて話し合う ■ 日本参加青年による、日本の国際協力についての発表：いくつかのグループに分かれてポスターを用いて発表。その後参加青年は日本の国際協力について改善点などを提言する。 ■ 国際協力関連のキャリアについて参加青年によるシェアリング ■ アクションプラン作成
このセッションにおける主な学びと成果	
● 参加青年自身が関心のあるトピックについて話し合った。「自分自身の国にも自分が貢献できる問題があるのに、なぜわたしたちは他の国にボランティアに行くのか」、「このプログラムをわたしたちの国の人々との国際協力のスタート地点にするにはどうしたらよいか」、「どのように世界の奴隷や奴隷のように働いている人々をなくすか」、「「世界青年の船」事業であなたはどのように変わったか」、「社会的に作られた差別」、「世界はアメリカと北朝鮮の戦争を防ぐために何ができるか」、「市民権とは何か。移住についてどう考えるか」、「標準化について」、「開発を妨げる汚職」などのトピックについて話し合った。問題によっては解決が難しいが、話し合いを通して、そのトピックへの理解を深めることができた。 ● 将来の日本の支援への提言を作成した。提言は以下のとおりである • 帰国した青年海外協力隊が就職支援も含めて日本社会へ再統合できるよう支援する • 2 年間だけではなく、様々な期間のボランティアの機会を提供する • 教育支援では奨学金を増やす • ODA やその他のプログラムの使い方について青年を教育する • 国際協力プログラム向上のため、会議かクラスなどを通して、他の国と知見を共有する • 金銭的な援助より、経験共有や専門的な知識や技術の伝達に力を入れる • 市民は JICA の仕事をチェックする • 発展途上国が持続可能な社会になるよう再生可能エネルギーの支援に力を入れる • それぞれの国の ODA の結果を認識する • 地域レベルの国の間の関係強化を助ける • 常に技術協力を伴った支援活動をする • もっと技術支援と社会基盤整備支援を行う • 秩序だった生活様式について指導する • 良い政策や実践を紹介する • 医療支援や、政府が保健の水準を保てるよう支援する • インドやスリランカの大学の学位を認め、もっと交換プログラムを実施する（日本人学生をインドやスリランカに送る） ● すでに国際協力の経験のある参加青年からのシェアリングを通して、国際協力分野におけるキャリア形成について学んだ ● 参加青年は将来のためのアクションプランを作成した	

5. ファシリテーターのコメント

参加青年は、国際協力に関する基礎知識を習得し、ディスカッション、講義、経験共有を通じて、人道支援や開発支援における意義や課題について理解した。参加青年は、畑井氏、国際協力の経験を持つ参加青年、ファシリテーターによる経験共有から、エイド・ワーカーになるためのキャリアパスや国際協力分野での活動について考えを持つことができた。そして、セッションの最後に参加青年は、国際協力の第一歩を踏み出すためのアクションプランを立てた。

コース・ディスカッションのセッションは、参加青年の積極的な参加のおかげで大変実りの多いものとなった。参加青年はコース・ディスカッションのはじめに、他の文化や言語を尊重し、他の人の声を聞き、しりごみせずに経験を共有するというグラウンド・ルールを作成した。そして、参加青年の知識や経験のレベル、興味の違いがあっても、積極的に議論に参加しようと努めた。参加青年たちはお互いに協力し、言葉の壁、会場の物理的な設定、長時間のセッションなどのいくつかの課題を乗り越えた。参加青年はディスカッションに参加しただけでなく、数名の参加青年は専門家として SDGs、IHL、IHRL についての講義を行った。また、コース・ディスカッション委員会のメンバーの貢献も大きく、グラウンド・ルールの設定、各セッションの開始時のリキャップ、アイスブレーキング、サマリー・フォーラムの準備などにおいてリーダーシップを発揮してくれた。一部の日本参加青年は、ディスカッションに追いつくためにレビューセッションを自ら行っていた。

５回のセッションを通し、国際協力の経験、SDGs、人道原則、参加青年自身の国の国際協力活動、上記セッション５の成果に書いたように参加青年が興味を持っているトピックなどの議論に多くの時間を費やした。いくつかの議論では、結論に達したり、解決策を見付けたりすることができなかったが、多様な背景を持つ参加青年との議論を通して、視野を広げることができたと確信している。多様な背景を持つ人々とのディスカッションやプレゼンテーションの経験は、国際協力分野で働く際にきっと役に立つことであろう。また、参加青年にとって、ディスカッションやプレゼンテーション・スキルを向上させる良い機会であったと考える。

最後に、わたし自身コースのファシリテーションを通して、多様な参加青年から学ばせていただき、参加青年のリーダーシップと積極的な参加に感謝したい。参加青年もコースから何かを学び、全員ではないとしても、将来国際協力活動に参加する参加青年がいることを願うとともに、国際協力の現場のどこかで参加青年と再会することが楽しみである。

6. 参加青年の感想

石丸 純平（日本）

国際協力コースを通して、現代社会で必要な取組について議論した。11 か国からの参加青年たちは様々な異なる政治的、文化的、経済的背景や考え方を持っているため、国際協力コース自体が多様性のあふれる場であった。このような場で、それぞれ自国の背景や経験をもとに意見を交わし、国際協力に関する見解を共有することで、異なった観点からの問題の見方や異なった対応策を考慮する良い機会となった。

また、参加青年の職業や興味が多岐にわたっていたため、互いに知識を共有しあうことで多くのことを得ることができた。実際の体験談を聞くことで普段学ぶことのできない観点から国際協力の大切さや定義を学ぶことができた。例えば、弁護士の観点からみた国際人道法や国連職員の仕事内容、ユース議会の一員からみた難民支援の事情などは非常に貴重な体験であり、国際協力の実態を学ぶとともに将来このような分野に進む参加青年は具体的な仕事内容を学べる機会であった。

このように、多岐な専門分野を学ぶ人々と話し合うことで国際協力について理解を深めることができた。特に、SDGs について深く考えディスカッションをする機会が多く与えられ、国際連合によって設定された目的を理解し、どのように個々が実行に貢献できるか考える時間が多く与えられた。SDGs を学ぶことで現在、国際社会が抱えている問題をより深く知ることができ、様々な分野の視点から解決方法を考慮することで学びを最大限増やすことができた。

課題別視察では、JICA 職員の方とジェンダー専門家による講義を受け、AAR JAPAN で具体的な政策や取組を学ぶことができた。JICA 職員による講義では日本の国際協力の歴史や仕組み、また現在の国際連合の取組、SDGs について学んだ。AAR JAPAN では難民問題をより身近に感じるためにワークショップをし、時と場合により様々な措置が要求されることを学ぶことができた。課題別視察で広い枠組みから具体的な問題を考えることができたため、その後の船内でのディスカッションでこのような話題を話し合うときに議論が促進されたと考える。

このように、国際協力コースでディスカッションや訪問を通して個々が自分の役割を再認識し、どのようなリーダーシップを発揮しなければいけないのか学ぶことができた。参加青年たちは、ここでの学びを最大限いかし自国でより良いリーダーになることが大切だと考える。

エドゥアルド・アロンソ・アレンチャガ（スペイン）

国際協力コースでは、国際協力についてとてもインタラクティブでダイナミックな方法で学ぶ機会が得られた。まず初めに言いたいことは、ファシリテーターの伊藤洋子さんが彼女の経験を個人的なアプローチで共有することによって、本議題に対する深い理解をもたらし、国際的な分野に対する理解を容易にした。私たちは、ファシリテーターが数多くの経験を持ち、それを理論的知識に加えてくれたことや参加青年としての私たちの経験に耳を傾けてくれたことに感謝している。ファシリテーターは数々の場所で国際協力に従事している大変優れた専門家であり、コースの全ての内容は彼女の実際の経験に基づいていたため、参加者は楽しみながら学ぶことができた。かつ、ファシリテーターが参加者に対してフィードバックと新しいアイディアを求めていたことによって、常に各セッションでの学びの質を向上しようとしていたことも重要なことであったと考える。このことによって、セッションの参加者は友好的になり、さらにそれが私たちのものだったように感じた。個人的には、看護師の畑井智行氏など何人かのすばらしい講師を招いた講義を私たちに提供してくれたことも、良かったと思う。また、何人かの参加者にプロフェッショナルとしてのキャリアを共有するように依頼したことよって、コースはすばらしく多様になり、かつ内容や学びが豊かなものになった。さらに、大変期待していた日本での課題別視察では、プログラムの初めから、協力して他者を助けることで世界をより良いものにするために東京と世界中でプロフェッショナルがどのように働いているかを見ることができた。この世界をより公平なものにするために他のコミュニティや国に対してアプローチをすることは、彼女が私たちに教えてくれたことである。コースが終了した後、私はこのコースは全員が自分のアイディアや経験を共有し、国際協力の舞台において私が他者にできることをするために必要なさらなる学びと実践を提供されるものであったと感じている。私はここで発見したことを実践に移すための事後活動をしようと試みている。伊藤洋子さんから学ぶ機会を頂いたことに最大限の感謝を示したい。私は彼女と私たちが今後も連絡を取り続け、彼女がこれからも私たちを導いてくださるように願っている。

生活習慣病

副題：生活習慣病の理解と闘い。持続可能な開発目標（目標３）へ！

ファシリテーター：ティラニー・テイシャシーウィチエン
参加青年：29 名（日本参加青年 14 名、外国参加青年 15 名）

1. コース概要

生活習慣病は、喫煙、アルコール、不健康なダイエットと運動不足に関連がある不健康なライフスタイルを選択することから発達する非伝染性の病気 (non-communicable diseases, または NCDs) と定義される。生活習慣病には、糖尿病、肥満、心血管疾患及びいくつかの形態の癌が含まれているが、これらの病気だけに限定されない。世界保健機関によると、NCDs は毎年 4000 万人以上の死を引き起こしている原因であり、これは世界全ての全ての死因の 70% に相当する。毎年、30 ～ 69 歳の人口のうちの 1500 万人が、NCD が原因で死亡している。また、これからの早期死亡の 80% 以上は低中所得国で生じると想定される。これらの NCDs には、心血管疾患（1770 万人）、癌（880 万人）、呼吸器疾患（390 万人）、糖尿病（160 万人）などがあり、これらは全て生活習慣病といわれている。そしてこれらの四つの疾患群は、全ての早期 NCD においての早期死亡の 80％以上を占めるといわれている。NCD には意図しない傷害、精神障害、白内障などの眼疾患、自己免疫疾患、筋骨格疾患、認知症などの慢性神経障害が広く含まれているため、このコースの議論内容は、「ライフスタイル」と呼ばれ、「生活習慣関連疾患」とも呼ばれている。生活習慣病はグローバルヘルス、人間の安全保障、人間発達に重大な影響を及ぼす「予防可能な疾病」として、先進国だけではなく、発展中興国や途上国でも、持続可能な開発目標 (Sustainable Developmental Goals)（目標 3）の優先事項として取り組まれている。このコースでは、生活習慣病やそれに関連するリスク要因など、グローバルヘルスの状況に関する知識を共有した上で、家庭内、コミュニティ、国家、グローバルの各レベルにおいて、ケアコスト、労働力の喪失、生活の質（QOL）向上に向けたヘルスケアー・システムの在り方などを題材に、生活習慣病がもたらす社会的・経済的な影響について議論し、自身のコミュニティにいかせる制度の考察、疾病予防、・健康増進のために周囲の人々を動かす方策を持ち帰ることを目指す。

2. コースの全体の目的

参加青年がパブリックヘルス及びグローバルヘルスの基本概念を理解し、生活習慣病とそのリスクファクター（危険因子）及びそれらがミクロレベル（個人規模、家庭規模）・メゾレベル（地域社会規模）・マクロレベル（国家規模・世界規模）で及ぼしうる社会経済的影響を意識し、よりよく理解することを到達目標とする。また、生活習慣病に対処するためのグローバル及び国内レベルでの対策や方針についても議論する。コースの終わりには、各参加青年が、自身が属する地域社会で自ら進んで健康的な生活習慣を送ることを呼びかけ、批判的に思考し、生活習慣病の解決策を検討できるようになることを期待する。

3. 事前課題

本課題の目的は、批判的思考力を育成し、コース中に学生同士で討論することにある。

一枚の A4 用紙に、以下の質問に対する答えを記入する。

- なぜ健康を守ることが重要だと思いますか。
- あなたの出身国における主要な死亡原因を 1 位から順に 10 あげよ。
- 肥満と脳卒中の関係を記述する。
- タバコに関するある事例

X 国はタバコ税により 50.9 兆ドルを集め、1995 年には 50 京ドルを超える金額を徴収した。タバコ税により国民の命が救われ、国民の医療費が賄われている。またタバコ産業により何千人もの農民と産業労働者の雇用が形成されている。しかし、タバコが健康に悪影響を及ぼすことは周知の事実である。この事例において、あなたはタバコを禁止するべきだと考えるか。

4. 各セッションの概要

セッション 1：健康、パブリックヘルス、グローバルヘルス、感染症から生活習慣病への疫学転換	
ねらい	活動の内容
■ イントロダクションと一般概要	■ イントロダクション ■ コースの概要 ■ コースについての一般的なインストラクション ■ コースへの要望を聞く。生活習慣病に関するこのコースを選んだ理由を尋ねるなど、参加青年が質問をし、意見・コメントを共有できる環境をつくる。 ■ 自己紹介、和やかな雰囲気をつくるための会話「あなたの国の有名な料理は何？」など。
■「健康」と「パブリックヘルス」の基本理解	■ WHO の「健康」の定義について良いか、悪いかを検討する。また事前課題の「Q1 なぜ健康を守ることが重要だと思いますか。」について話し合う。 ■ ビデオとグループワークを通じた公衆衛生と健康促進と病気予防のコンセプトを紹介。グループワークでは、各自 " 健康な「世界青年の船」事業 " の絵を描いて、話し合う。 ■ 予防可能な病気や遺伝病の例（予防することは難しいが、リスクは「減少する」可能性がある）。グループワーク Q.「この病気は神様の仕業だ。そういう運命なんだ。」この考え方に賛成か反対か。理由は何か。 ■ 予防のレベル（基本、一次、二次、三次）は、予防のための様々な機会を強調します。事前課題の Q3 に関連して、予防のレベルと「健康」、「肥満」、「脳卒中」、「リハビリ」の関係を空白に記入しなさい。
■ 感染症 VS 非感染性疾患（たとえば生活習慣病） ■ 疫学転換と新たな「グローバルヘルス」の概要	■ 疫学転換とグローバルヘルスに関する講義とディスカッション。NCD はどのようにトップに進んだのですか？狩猟時代（栄養失調）の時代から→人間定住、安全な食料源のための農業、「コミュニティ」の形成、衛生や公衆衛生の悪化（伝染病）→開発とグローバリゼーション（非伝染病 [NCD]） ■ NCD は LD とも呼ばれます ■ 伝染病／感染症とは？非感染性疾患とは？生活習慣病とは？
このセッションの主な学びと成果	
● 健康（身体的な、精神的、社会的）、生活の質、長寿、生産性、人間開発、財政保護と貢献、社会保障と人権には健康が不可欠である。 ● 全ての人々の健康を実現するために、公衆衛生は、個々の患者に個別に対応する医療現場での医療と治療とは異なり、集団レベルでの疾病予防と健康促進に影響を与える。 ● 参加青年は自らの健康を守り、病気の予防（またはリスクの軽減）のための行動を取ることができる。 ● 開発とグローバリゼーションは、感染症の減少と生活習慣病の急速な増加という疫学転換の世界的な流れの一因である。	

セッション 2：生活習慣病とは何か？そして世界的概観	
ねらい	活動の内容
■ 世界的な疾病の負担。生活習慣病は、先進国と発展途上国の両方で、世界的に死因の主な原因となっている。	■ グループワーク：事前課題について討論する。「あなたの出身国における主要な死亡原因を 1 位から順に 10 あげよ。」「生活習慣病はいくつあるか。」グループ内で課題に対する回答を共有し討論する。
■ 生活習慣病の四つの主なタイプを認識します。心血管疾患、癌、慢性呼吸器疾患、糖尿病などが挙げられる。	■ 講義とディスカッション：心血管疾患、癌、慢性呼吸器疾患、糖尿病とは何か
■ 生活習慣病の特性	■ 講義とディスカッション：生活習慣（習慣及び行動）は、これらの疾患を決定する重要な役割を果たす。これらの疾患は人から人へ、または媒介生物（伝染性ではない）によって感染するのではない。長期間かかり、一般的に進行が遅い。「慢性疾患」とも呼ばれる。 ■ 読書課題の議論とディベート:LD、NCD 及び慢性疾患という用語を再考する。それらは本当に人から人へと感染しないのか

このセッションの主な学びと成果
● 四つの主要な生活習慣病、心血管疾患、癌、慢性呼吸器疾患、糖尿病。 ● それらが世界（先進国と発展途上国の両方）の主要な死因であることを認識した。 ● 生活習慣はこれらの疾患を決定する上で重要な役割を果たすということ。 ● 不健康な生活様式は、実際には世界的に「蔓延」し、全ての国々で起こっているということ。

セッション 3：生活習慣病関連のリスクファクター。リスクが高い人は？

ねらい	活動の内容
■ 生活習慣病の主な危険因子を理解する：メタボリック、行動、健康の社会的決定要因、グローバリゼーション、都市化、高齢化を含むその他の根本的要因	■ 授業とディスカッション • 生活習慣病のメタボリックリスク因子(高血圧、過体重 / 肥満、血糖値上昇、血中脂質上昇）は、 グローバリゼーション、都市化、高齢化の社会的決定要因に影響される行動リスク要因（健康的でない食事、身体の不活動、たばこの使用、アルコールの有害な使用）の結果である。 • 四つの行動リスク要因が「変更可能」であり、一次予防の努力が最も費用効果が高いことを強調する。 • 事前課題を話し合うグループワーク；あなたの意見では、あなたの国の主要な死因のトップ 10 が、あなたのグループの他のメンバーと異なるのはなぜか？病気の死亡パターンは、地域や国の間で大きく異なるのはなぜか。 • 「健康の社会的決定要因」の概念を理解するためのロールプレイングゲームとビデオ鑑賞。 • 参加青年は、自分の国から選択された特定の生活習慣病(またはリスクファクター）の社会的決定要因の式を作成した。例えば。失業 + 貧困 + 社会的支援の欠如 + 識字率の低下 = アルコール乱用リスクの増大。
■ 誰が LD のリスクがあるか	■ 通説について議論：生活習慣病は豊かな病気だ。より豊かな設定のみに影響を与えるか？それらは慢性であるため、高齢者のみが影響を受けるか？なぜ若者を引き込むべきか？多くの男性が生活習慣病に苦しんでいるか？
■ 不健康な食事と身体の不活動とは何か	■ 不健康な食事とは何か？不均衡な食事；飽和脂肪、糖、塩を多く含む；野菜や果物が少ない、栄養素が豊富な食品と水。英国、米国、日本政府の食生活ガイドライン。USDA の“Choose my plate”の食品群を推測する穴埋め問題。身体活動の健康上ためになること。 WHO 成人人口の健康のための身体活動に関するグローバル・リコメンデーション。 ■ 社会的認知理論：行動変容は観察学習を通して得ることができる。行動変容は参加青年自体から始める必要があり、その結果、それらは周囲の友人や家族に影響を与える可能性がある。

このセッションの主な学びと成果
● 生活習慣病のリスクファクターはむしろ多層である。つまり、代謝、行動に関するもの、健康、グローバリゼーション、都市化、高齢化などの社会的決定要因を含むその他の根本的要因の相互作用である。 ● 参加青年は、病気の根本原因である健康の社会的決定要因の重要性を認識した。健康は収入、社会的地位、社会的支援ネットワーク、教育 / 識字、雇用 / 労働条件、社会環境、物理的環境、保健サービス、性別、文化などの影響を受ける。 ● 誰もが生活習慣病の危険にさらされている。成人における早期生活習慣病関連死亡は、幼児期の状態または若いころに始めた行動に関連するため、早期に若者の参加を図ることが重要である。 ● 社会の変化は、一人一人の参加青年から始まるということを考えたときに、健康的な食べ物と食事を構成するもの、及び適切な身体活動について理解することから、健康的な生活習慣を選択し、周囲の人々に徐々に影響を与えることができるということを学んだ。

セッション 4：生活習慣病の社会経済的影響

ねらい	活動の内容
■ 生活習慣病が人類の安全と発展をどのようにして著しく脅かしているかのメカニズム：ミクロレベル：個人と家庭のレベル、メゾレベル：コミュニティレベル、マクロレベル：国や世界的なレベル	■ 講義、ディスカッション、穴埋め問題：生活習慣病による早期死亡や長年の障害は、生産性を低下させ、人々を貧困に陥れ、経済成長、人的開発及び安全を制限する。個人及び家庭レベルでは、不健康な行動、不健康、早期死亡による家計所得の損失、高い医療費。コミュニティレベルでは、他の健康ニーズ、労働力需要、高コスト介入などに取り組む能力の低下を招く。国 / 世界レベルでは、労働供給の減少、生産性と競争力の低下、人口統計的配当の喪失などである。 ■ グループワーク：事前課題の討論の続き。「なぜ健康を守ることが重要だと思うか。」
■ メンタルヘルス：無視された生活習慣病	■ メンタルヘルス、若者のメンタルヘルス、自殺思考、いじめなどの簡単な紹介とディスカッション

このセッションの主な学びと成果
● 参加青年は、生活習慣病のインパクトが非常に重要であるという認識を得た。 ● 参加青年は、生活習慣病の中でも見落とされがちなメンタルヘルスの重要性を認識した。四つの主要な生活習慣病以外にも、メンタルヘルスは早期死亡の危険因子であり、それは青少年にも影響を及ぼす障害の世界的な主要原因である。しかし、精神衛生障害はタブーであり、一般には議論されない傾向があるため、それが個人がケアと治療を求めるのを妨げる要因にもなっていることを学んだ。

セッション 5：生活習慣病の発症予防。持続可能な開発目標 (目標 3）！

ねらい	活動の内容
■ グローバルレベルでの政策について議論する: • 持続可能な開発目標：目標 3 は、全てのレベルにおいてあらゆる年齢の全ての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進することを目指す。目標 3 では、生活習慣病を含む健康に関する全ての最優先事項及び全ての人々が安全で、効果的な、高質かつ手頃な価格の医薬品を入手できるようになることが述べられている。 • WHO framework convention on tobacco control (FCTC): WHO の世界保健機関たばこ規制枠組条約 • WHO Global Action Plan for the Prevention and Control of NCDs 2013-2020: WHO の NCDs の予防と管理に関する行動計画 2013-2020	■ 世界的主体、議論及び VDO の例の紹介： • 関連する SDGs (目標 3) を議論に取り入れる。 • WHO FCTC は、たばこの流行のグローバル化に対応して開発された最初の法的拘束力のある国際条約であり、たばこの消費とタバコの供給を削減するためのガイドラインの枠組みを設定している。それは、最も重要なたばこを管理ツールであり、公衆衛生の促進におけるマイルストーンである。WHO FCTC は SDG 3 の目標としても強調されている。参加青年は、人々をタバコの煙 (パブリックスペースでの喫煙禁止）から守るための対策、タバコの危険性についての警告（梱包と表示）、タバコに対する税金の引き上げなど、国のタバコ規制政策の議論に積極的に参加していた。 • WHO の NCDs の予防と管理に関する行動計画 2013-2020 は優先順位を設定し、各国がコミットメントのロードマップをどのように発行できるかについての戦略的指針を提供している。タバコの使用、高血圧、高塩分摂取、肥満、身体活動不能などのリスク要因に焦点を当てた自発的な目標が含まれている。
■ 国内レベルでの政策についても議論する：アメリカでの学校の自動販売機の撤去、など	■ メキシコにおけるソーダ税の成功事例、米国の成功証拠、フランスからの政策についての議論と共有。あなたの国にはソーダ税があるか?ソーダ税について聞いたことがあるか?ソーダ税は砂糖の消費を抑制するのに貢献いていると思うか?それは消費者の権利を侵害しているか?
■ 若者が生活習慣病を撲滅するために何をすることができるか	■ 健康行動は、個々のレベルで変化している。健康行動モデルの例：健康信念モデル、トランス理論的モデル、生態モデル ■ 生活習慣病との戦いにおける研究とコミュニティプログラムの例 ■ 最終課題：日本参加青年と外国参加青年のペアで生活習慣病と戦うための革新的なアイディアを提示すること。

このセッションの主な学びと成果
● 参加青年は、個人レベル、地域レベル、国レベル、グローバルレベルで生活習慣病を管理する戦略を認識したと言える。 ● 参加青年は、自国のたばこ規制措置が WHO FCTC の成果であることを知った。 ● ソフトドリンク及び他の甘味糖飲料は、添加された糖の主要な供給源である。ソーダ税はいくつかの国で実施されている。 ● 参加青年は、生活習慣病と戦うためのアイディアを考え出すことを学んだ。

5. ファシリテーターのコメント

参加青年には、生活習慣病の結果として人間開発の大きな障害「病気、早死及び長年の障害」の世界的な概要が示された。また国別の公衆衛生の解決策（ソーダ禁止、たばこ税など）、SDGs や WHO FCTC などのグローバルな取組なども示された。このコースでは、このような問題の解決にどのような貢献できるかについての議論を参加青年にしてもらった。しかし、参加青年が社会の変化の主体になることを期待しているのではなく、コースが伝えた重要なメッセージを通して参加青年自体から変化が始まるということを期待している。一人一人が自分の生活習慣（自己評価形式）を意識し、情報と解決策（健康を求める行動）を探し、実現可能な行動の変容目標を立てるだけで、自分の持続可能な健康を維持できる。これにより、その後、本能的に参加青年は支持者になり、周囲の人々に影響を与え、結果的により広範囲のコミュニティに刺激を与えるだろう。さらに、参加青年のほとんどが様々な経験と専門知識を持っていたため、特に「健康な社会の決定要因」の重要性が強調され、参加青年は様々な職業的観点から根本的な健康問題を見て、個人的に貢献できる機会を特定することができた。多くの場面で、「文化」自体が健康への障壁となっていることがある。また、寄港地での施設訪問も含めて、私たちは文化や社会規範が生活習慣病にどのような影響を及ぼすかについて多くの興味深い対話と議論を行った。議論に全ての参加青年の興味を合わせることは非常に難しい課題であったが、様々な背景を各人の色と活力、及び様々な専門知識が加わったグループ議論を作り出したこのコースの参加青年の多様性に感謝したい。学習は、むしろ相互的で参加青年から学ぶ参加青年、ファシリテーターから学ぶ参加青年、参加青年から学ぶファシリテーターと様々な学習の場であった。私は個人的には各国からの参加青年の色々な問題や経験についての有益な議論の恩恵を受けることができ、感謝している。教科書よりもはるかに有益な学習であり、それを共有できた参加青年には非常に感謝している。平成 29 年度「世界青年の船」事業のコース・ディスカッションのファシリテーターとして信頼されたことは大変光栄なことであり、私はこの機会を与えてくれた日本の内閣府に永久に感謝し続けるであろう。

6. 参加青年の感想

マシュー・コイ・ダング・グエン（オーストラリア）

このコース・ディスカッションでは、生活習慣病はそれぞれの国の伝染しない病気、公衆衛生について深く話をして、参加者の国に影響しているかを考えた。施設訪問や、寄港地活動と 5 回のセッションを通して私たちはメンタルヘルス、不健康な食事についてなど幅広いトピックを調査した。オーストラリアからの参加者としてほかの国の参加者からの意見や体験を聞くことを通して何が一番大切かを見付けた。肥満が増えていることや、運動量が減っていることは私たちの社会に影響を与えていることが一般的な問題になっている。それを私は各国の参加青年の多様な洞察力から身に付けた。青年の問題の中で日本では自殺と過労死が問題であり、薬とアルコールは南アフリカとスリランカで独自の問題である。このような独特な視点はこのトピックを形式的に評価できない貴重な視点として考える。しかしながら一番重要なことは、若者として私たちがどのように変化を起こすことができるのかを中心にしたディスカッションであった。私たちの最後のセッションはチームを作り参加者を巻き込んで、どのように彼らが特定の問題に取り組めるかのプロジェクトやプログラム、アイディアを作成した。これらのプレゼンテーションはコース・ディスカッションで模索された理論や問題、意見、私たちが生活習慣病の負荷を緩和させるためにできる明白な行動の成果の集大成である。

鳥塚 英玲奈（日本）

生活習慣病コースでは、ファシリテーターであるテイシャシーウィチエン氏（通称ジャー）から公衆衛生と生活習慣病にまつわる基礎知識を学びつつ、それぞれの国の事情や参加者の経験を共有した。主に 4、5 の小グループにわかれてブレインストーミングとディスカッション、発表というサイクルを重ねた。コース・ディスカッションのなかで、栄養学や看護学を専門とする参加者がプレゼンテーターを務めたり、看護師の畑井氏（発展途上国での環境因子による病気）、心理カウンセラーの高橋氏（メンタルヘルスと過労死）や、がんの闘病経験者の齋藤珠恵氏をゲストに迎え、話を聞いたりした。陸上研修は、厚生労働省の方のお話を聞き、施設訪問では株式会社タニタ総合研究所を訪問した。前者では、日本政府がどのような観点で生活習慣病予防のための政策をつくり、現状や当面の課題等を認識しているかの説明を受けた。後者では、カロリー・コントロールされた昼食や体重・筋肉量等の測定を通して、健康管理のヒントとなる数値の捉え方などを学んだ。寄港地活動において、インドではコチ科学技術大学の学生と、メンタルヘルス、健康政策、栄養、食料安全保障、をテーマとした四つのグループに分かれて話し合い、発表を行った。スリランカでは、コロンボ大学の学生の主導で、姿勢に関わる病気、食料、ソーシャルメディアに関わる病気、ドラッグとアルコールに関わる病気、の 4 グループでディスカッションを行い、発表した。インドやスリランカでは家族の結び付きが強く、それが若者のメンタルヘルスをサポートする存在となっているそうだ。

生活習慣病という語は、特に日本では、感染症ではない病気、として認知されている。また、各国で若者の働きすぎや食生活の乱れなど、共通する健康問題があり、またそれらの健康問題が社会問題にもつながることを学んだ。生活習慣病が、世界規模で解決すべき問題であるという認識を新たにし、各国の健康課題と対策の方法を共有できるまたとない機会となった。ジャーをはじめ、参加者とこのプログラムに関わった全ての方に感謝する。

持続可能な経済発展を実現するソーシャル・イノベーション

副題：社会問題解決のためのビジネス

ファシリテーター：三橋 利佳

参加青年：36 名（日本参加青年 18 名、外国参加青年 18 名）

1. コース概要

途上国開発においてこれまで様々な国際貢献活動が行われてきたが、先進国による一方的な援助だけでは被援助国の持続可能な発展には目覚ましい成果が現れてこなかった。そこで現地の人による経済的自立が何よりも必要となる。また政府間及び国際機関・被援助国間の国際合意は、市民や民間企業が関与することが少なかった。

言うまでもなく、SDGs は先進国や途上国を含めた国連加盟国のあらゆるステークホルダーが、協力して進めていくべき持続可能な社会を目指す目標である。特に SDG12 では経済成長と持続可能な開発を達成するために責任ある生産と消費が強調されている。これまでの経済成長が持続可能ではないことに世界が気付きつつあるなかで、いかに「持続可能性」を視野に入れて経済を循環させていくかが重要な課題となってきている。こうして、今では世界の様々な社会的企業が、この 21 世紀の社会問題を新しい考え方で解決を目指している。

このコースでは現代世界が直面する共通の社会問題を取り上げ、持続可能な発展をビジネスの視点から経済・社会格差を可能な限り縮小するために具体的に何ができるのかを議論する。さらに参加者は SDG12 を念頭に置き、自国で実施可能な社会・経済問題の解決につながるソーシャル・ビジネスプランを練り上げる。

※ ソーシャル・イノベーションとは、ここでは主に様々な社会・経済問題を新しい考え方で解決を目指す取組のことを指す。

2. コースの全体の目的

参加青年は様々なビジネス形態や企業・消費者の社会的責任を学んだ上で、社会的起業家としての自己を想定し、自国で実際に実現可能な社会問題を解決する持続可能なソーシャル・ビジネスモデルプランを考案する。また、賢い消費者（例えば、品質・価格だけを考慮するだけではなく生産工程や生産環境も考える）とは何かを学ぶ。

こうして帰国後に社会起業家としてはコースで作成したプランまたはプラン作成手法を実施することで、社会変革を起こす契機とする。また、賢い消費者としては SDGs の目標に沿った行動をとることによって、それが優良企業を支援することにつながる。この二つの方法でより良い世界を築くための一助となることを目的とする。

3. 事前課題

＜全参加青年共通＞

3.1 自国で行われている「SDGs」や「持続可能性」を掲げているビジネス例を二つ準備しておくこと。（自身が関わっているソーシャル・ビジネス等を行う団体、もしくは社会起業経験があればその経験をまとめる）

- 仕様は A4 用紙 1 枚以内（400~700 words）、英文、Word で作成し、2017 年 12 月 31 日までにコース・ディスカッションのメーリングリストを通じてファシリテーターまで提出する。

3.2 自分自身が将来取り組みたいソーシャル・ビジネス / インクルシブ・ビジネスモデル プランを考え、英語で 1 分間のプレゼンテーションを準備する。（アイディアだけでも良いが、何の問題に対してどのように取り組むのかを明確にすること）

＜日本参加青年のみ＞

3.3 日本国内の社会問題（経済格差、ホームレス、女性等）を一つとり上げ、現状、想定される原因、実際に行われている対策例を A4 用紙 1 枚以内に日本語でまとめる。2017 年 10 月 31 日までにコース・ディスカッションのメーリングリストを通じてファシリテーターまで提出する。

3.4 インクルーシブ・ビジネス / ソーシャル・ビジネス / CSR / サーキュラーエコノミーとは何かを調べ、理解する。

3.5 その上で、インクルーシブ・ビジネスまたはソーシャル・ビジネスのメリットとデメリット（ソーシャル・ビジネスを行う上でうまれてくる問題等）をエッセイにまとめる。

※ 仕様は A4 用紙 1 枚以内（400~700 words）、英文、参考文献を入れて Word で作成する。2017 年 10 月 31 日までにコース・ディスカッションのメーリングリストを通じてファシリテーターまで提出する。

4. 各セッションの概要

セッション 1：身近な問題から世界の問題	
ねらい	活動の内容
■ コース概要を理解する ■ お互いが何の社会問題に対して興味関心があるのか共有する ■ 企業・個人（消費者）の社会的責任を理解する ■ サプライチェーンを通して社会経済問題を理解する	■ コース説明 ■ 参加者一人一人が最も関心がある社会問題を一つ挙げ、オープンスペース・アクティビティーで共有する ■ 社会的責任について小グループで議論する ■ ビデオ上映：ファストファッションの現状（2013 年のラナプラザ崩壊事件を例として）を学び、サプライチェーンの問題を考察する ■ ミニ講義：オルタナティブの事例を学ぶ
このセッションの主な学びと成果	
● 自分が最も情熱を持って解決したい社会問題について共有することでお互いの興味関心を知ることができた。その後、各々が挙げた社会問題（環境、経済格差、食糧、教育等）のテーマごとに集まり、自国での問題との比較をした上で、どのように問題解決ができるのかを掘り下げて考えることができた。 ● 政府、企業、消費者の立場から社会的責任について共通の認識を持つことができた。 ● ファストファッションの生産者側の実態 (低賃金で過酷な労働環境や児童労働) を知り、自分たちに何ができるのかコース全体で議論が行われた。そこでは賢い消費者として自分たちが商品を選ぶことができる、また教育を通して問題の認知度を高める、国際世論として声を上げることができる等の意見が挙げられた。	

セッション 2：様々なビジネス形態を知る	
ねらい	活動の内容
■ CSR、インクルーシブ・ビジネス、ソーシャル・ビジネスを理解する ■ 様々なソーシャルビジネスタイプがあることを知る	■ CSR、インクルーシブ・ビジネス、ソーシャル・ビジネスの定義を学ぶとともに、アドバイザーから CSR について現場の声を聞く。 ■ CSR に関わる仕事や研究を行う参加青年から発表をしてもらう。 ■ 様々なタイプのソーシャルビジネスモデルがあることを理解し、事前課題で独自に調べたソーシャル・ビジネスを分析する。また、それらが 9 つの分類のどれに当てはまるのか、小グループに分かれて発表をする。
このセッションの主な学びと成果	
● レクチャー形式でビジネスの形態や定義を学んだ後、アドバイザーから実際に CSR を行うメリットについて現場からの視点でお話があり、参加者は CSR の必要性を理解した。 ● また、CSR に関わる経験を持つ参加者が話をすることで CSR を身近に感じ、その後の議論へと発展していった。 ● ソーシャル・ビジネスの形態を学んだ後、事前課題となった自国で行われている「SDGs」や「持続可能性」を掲げているビジネス例がどのタイプのソーシャル・ビジネスに当てはまるのかを分析しグループ内で発表することで実際に各国が取り組まれている様々なスタイルのビジネスがあることを理解した。	

セッション 3：ジアイディア創造からソーシャル・ビジネスモデルプランの作成	
ねらい	活動の内容
■ デザイン・シンキング / ヒューマン・センター・デザイン手法を学ぶ ■ ビジネスモデルキャンバスの使い方を学ぶ	■ デザイン・シンキング手法を使い、ヒューマン・センター・デザインのワークショップを行う。 ■ ソーシャル・ビジネスモデルプラン作成のためのグループ分けを行う。（参加者は解決したい社会問題のテーマごとに分かれ、その中で近いアイディアを持つ人と組む） ■ 各グループでストーリー・ボードを利用し、取り組む社会問題を設定し、解決策のアイディアを出す。 ■ ソーシャル・ビジネスモデルキャンバスをグループごとに作成する。
このセッションの主な学びと成果	
● デザイン・シンキングのアクティビティの一つとして、「社会問題に直面する対象者に私たちが何をすることでどうなりうるか」を考え一人ずつ発表を行うことで、参加者が誰に対して何を行いたいのか、どのような社会を創りたいのかを明確にすることができた。 ● 参加青年は様々な社会問題の中から最も情熱を持って解決したい社会問題のテーマごとに集まりアイディアを出し合うことで議論を深めることができた。 ● グループ作りの際に社会起業家に必要な三つの役割を自分に当てはめて考える時間を持ったことで、自分が社会起業家になる際にどの役割になるのか理解することでシミュレーションができた。 ● 作られたグループで、ストーリー・ボードを利用して問題、現状、解決策を絵で表現することで自分以外のグループがどのような問題に取り組もうとしているのかビジュアルで理解することができた。 ● ソーシャル・ビジネスモデルキャンバスを使用することで、各グループのビジネスモデルが明確となった。	

セッション 4：ソーシャルビジネスモデルの中間発表	
ねらい	活動の内容
■ 他のグループのプレゼンテーションを評価することでクリティカルにビジネスモデルを見る視点を得る。 ■ コンテストに向けて改善を図る。	■ 各グループは作成したソーシャル・ビジネスモデルプランの発表をする。また、クリティカルに評価をし、そのモデルプランの改善につながるようなアドバイスを行う。
このセッションの主な学びと成果	
● 参加者全員が聞き手からフィードバックを得ることでプランの改善へとつながった。 ● 多くのビジネス・モデルプランを評価することで、社会起業家になる際に必要なクリティカルな視点を持つ練習となるとともに、自分のグループが作成したプランの見直し改善へとつながった。 ● コンテストの前に練習発表を行うことで、本番に備えることができた。	

セッション 5：ソーシャル・ビジネスプラン コンテスト	
ねらい	活動の内容
■ プレゼンテーション・スキルを身に付ける ■ 各プランが実現可能でイノベーティブであるか分析する	■ グループで作成したソーシャル・ビジネスモデルプランを発表する。 ■ 一人一票を投じ、優秀作品を出す。
このセッションの主な学びと成果	
● 参加青年は全てのグループのプレゼンテーションを評価し、最優秀賞を決めた。 ● プレゼンテーションを通して、どのようにソーシャル・ビジネスモデルプランを作るのか、そしてモデルプランを批判的に評価することを学んだ。	

5. ファシリテーターのコメント

このコースでは 11 カ国から参加青年が集まり、イノベーティブで持続可能なソーシャル・ビジネスモデルプランを作成することを目指した。顔合わせではお互いの自己紹介を通してつながり、最初のセッションでは自分自身のパッションの紹介から始まった。施設訪問はソーシャル・ビジネスのコンセプトを理解し、コース全体を通して常に例として使われる程有益なものとなった。セッションの前半は、インプットが中心に行われた。内容としては地球市民としての責任をグループで共有し合い、ソーシャル・ビジネスとは何か、ソーシャル・ビジネスの例、そしてどのようにソーシャル・ビジネスを始めるのかを学び議論を重ねた。セッション 3 とセッション 4 の間にインドとスリランカの学生とそれぞれの地域にある問題について話し合い解決策のアイディアを出し合った。後半 2 回のセッションではアウトプットとしてグループアクティビティーがメインで行われた。各々が一番情熱を感じる社会問題について議論し、また社会起業家に必要な役割を知り自分自身がどの役割が適切か分析を行った。グループは経済格差、健康、環境、教育、失業のテーマに分かれ、デザイン思考の手法を使った人間中心のデザインのアクティビティを通しての議論が行われた。九つのグループそれぞれがテーマに沿って異なるアイディアや意見を出し合い、ソーシャルビジネスモデルを作った。それを最終セッションのソーシャルビジネスモデルコンテストで発表した。環境のグループは蓄電池を強風が常におこる南極で作り、それをサハラ砂漠のような電気がないところに届けるという発表をした。優秀賞は教育のグループで、ペルーの田舎に学校を建設するというプロジェクトであった。そのプロジェクトの資金は企業等から出る使用済みの紙をリサイクルペーパーにし、ノートを商品化し利益を利用する。リサイクルペーパーで作られたノートのデザインを子供たちに描いてもらうことで啓発にもつながるプロジェクトであ

る。参加青年はソーシャル・ビジネスモデルプランを作る過程で、チームワークと忍耐の重要性を学んだ。インターネットのない環境でソーシャルビジネスモデルを作る困難もあった。綿密なモデルプランを作ることができない中で、参加青年はクリエイティブになり、いかに達成できるか気が付いた。

6. 参加青年の感想

長田 壮哉（日本）

「持続可能な経済発展を実現するソーシャル・イノベーション」コースでは、インプットとしてソーシャル・ビジネスの事例や仕組みを学んだ後、アウトプットのために各自が日々感じている社会問題を解決するためのソーシャル・ビジネスプランをチームで考えた。インプット時にはただ座学で終わるのではなく、Table for Two や ETIC. の方々から直接意見や体験を聞くことができ触発された。その後に各自が解決したいと思う社会問題を共有することで、日常ではできない深い議論のきっかけになった。寄港地であるインドとスリランカでは、現地学生から各国の現状を直接聞くことで、外国人の視点では気付けなかった課題やアイディアが生まれてきた。世界には環境・教育・医療・貧困といった様々な問題が山積しており、当初は悲観的になってしまった面があったものの、同時に 11 か国から集まった志の高い若者が集まれば解決できるはずだと楽観的になることができた。しかし、実際にソーシャル・ビジネスプランを考えるのは容易ではなかった。一部の参加青年にはソーシャル・ビジネスの経験があったものの、ほとんどの参加青年は直接的な経験や知識がない状態からのスタートであった。当初は不安であったものの、隙間時間を見付けてはチームで集まって試行錯誤する過程は、コース・ディスカッションを超えた深い関係性を構築する良い機会になったと言える。とりわけ「世界青年の船」事業に参加する前は関心のなかった国や問題に対しても、参加青年との真剣な対話を通して当事者意識の範囲が広がった。 最終的には完璧ではないものの、納得のいくソーシャル・ビジネスプランができ、達成感を感じた。最終日にはチーム対抗で投資家から出資を受けるためだと仮定し、プレゼンし合った。他チームの発表を聞いてさらに刺激を受けることもできた。総じて、コース・ディスカッションを通して得たソーシャル・ビジネスに関する知識はもちろんのこと、多様な人たちと協働して何かに一生懸命取り組む過程に最大の意義があったと言える。さらに高みを目指すのであれば、今回考えたソーシャルビジネスモデルを実行に移して実現することが期待される。

ミチャール・モロズ（ポーランド）

多くの参加青年たちからの観点から、「持続可能な経済発展を実現するソーシャル・イノベーション」コース・ディスカッションは成功だったと言える。このコース・ディスカッションは世界的問題への当事者意識を持つことと、それらの問題を解決するためのソーシャル・ビジネスを作るためのツールを提供し、多いに役に立った。このコースは 5 回のセッションと、日本での施設訪問、インドのコチ工科大学、スリランカのコロンボ大学への訪問で構成されていた。コースの目的は各参加青年が関心を持つ社会問題（国連による SDGs を参考にしながら）を解決するためのソーシャル・ビジネスプランを考えて発表することであった。このコースの参加青年たちは多様な職業背景（大学生、NGO や NPO に勤める人、ボランティア、研究者、経営者）、国籍、文化を持っていた。グループとして取り組んでいる間、共通点の欠如が見受けられ、正確な言葉やアイディアや概念の意味を伝えるのに困難となった。しかしながら、こういった困難が存在していたからこそ、参加青年たちは寛容さと判断をしないという能力を伸ばすことができたと言える。参加青年たちは自分で持続可能なビジネスを作るための基礎を得ることができた。多くの国々では、未だに社会問題は政府の支援を受けたプログラム、NPO、ボランティア活動、寄付といった外部からの金銭的支援につながっているという認識が存在する。社会問題に取り組む持続可能な企業の事例、ソーシャル・ビジネスのための様々なビジネスモデル、コンセプトと、企業の社会的責任（CSR）を実行する上でのコンセプトや方法を議論することで、参加青年はアイディアを持続的ビシネスモデルに落とし込むための網羅的なフレームワークを知った。 それらのフレームワークは SDGs、ヒューマン・センター・デザイン・デザイン思考、社会的企業、企業の社会的責任（CSR）、社会問題と社会的責任等を含んでいた。将来の改善のために一つ提案するとすれば、参加青年に二つもしくはあえて相反するフレームワークを使って議論や方法を磨くことを提案する。このコースではとても活発な対話があった。企業訪問の内、半分以上の時間が自由な議論に使われたのと、インドとスリランカでの寄港地活動は全て参加青年によって運営された。特筆するに値することは、4 回目のセッションでグループはビジネスアイディアを発表することでコース全体の参加青年からのフィードバックを得られたのと、最後の 5 回目のセッション前にブラッシュアップできた点である。スタートアップがプロジェクトへの投資家を探している時と同じ方法が取られている。本コース・ディスカッションは他の「世界青年の船」事業につながっており、とりわけリーダーシップ・セミナーには情熱という概念、そして若者による情熱を通してつながっている。この経験は参加青年に自らビジネスを作り上げ、新たな社会的自発性を発見し、既存のプロジェクトへより一層注力するようなものとなった。

4 サマリー・フォーラム

目的と概要

2 月 27 日に開催されたサマリー・フォーラムは、本事業の中で最も重要なイベントの一つである。243 人の参加青年は事業期間中、七つのコースに分かれてそれぞれ異なるテーマについて学ぶため、サマリー・フォーラムではコースを越えて情報共有をした。本フォーラムは各コースの主な学びを全参加青年と分かち合う、またとない機会となった。各コースのプレゼンテーションは、パワーポイントの発表だけでなく、寸劇、音楽、映像、参加型のクイズなどを交えて行われ、観客を楽しませるとともに、効果的に学びを共有することができた。

学びの集大成である本フォーラムに参加することで、参加青年は、共通のテーマである「青年の社会貢献」について、他のコースがどのように学んだのかを理解する機会を得た。また、自身のコースの発表を通して、コース・ディスカッションで得られた学びを振り返り、その学びをどのように社会貢献に役立てることができるのかを明確にすることができた。

コース発表内容

■子どもの人権コース

子どもの人権コースでは、「子供への虐待」「子供の貧困」「子供の教育」の 3 点に注目してプレゼンテーションが行われた。

「子供への虐待」では、日本の※ JK ビジネスについて取り上げ、日本社会に隠れる子供の人権問題について説明した。JK ビジネスは性別にかかわらず、経済的な理由や劣悪な家庭内環境を理由に、性的搾取が行われていることを共有した。またスリランカ代表青年からは、スリランカで未だに残っている未成年者（16 歳以下の子供）に対する性的搾取についての説明がなされた。

「子供の貧困」では、日本と世界各国の子供の貧困についての説明がなされ、日本では、相対的貧困によって子供が十分な食事や教育を受けることができないことを示した。

また、世界各国の子供の貧困に関して、ラテンアメリカのペルーとメキシコのストリートチルドレンについて発表した。彼らの多くは低所得の家族の生活を守るために学校に行くことをやめてしまうため、低所得者に対するサポートの重要性を強調した。

「子供の教育」では、ラテンアメリカの子供たちが抱える問題点についてペルーとメキシコの代表成年が話をした。これらの国は、多くの言語が存在する多様性に溢れた国であり、ペルーの代表青年がラテンアメリカで使われている言語の一つであるケチャ語の有名な歌を紹介した。メキシコにおいても 65 もの言語が現在でも使われているにもかかわらず、授業は全てスペイン語で行われており、スペイン語が話せない子供たちは授業についていけず、教育格差を生み出しているという問題を指摘した。

日本では、教育費のみならず、教材費や制服といった必要物品が高額なため、親の経済状況によって子供の教育環境が変わってしまう問題点があることを指摘した。また、いじめによる自殺問題やカウンセラーの認知の低さについての説明を日本代表青年が行った。

最後にコース・ディスカッションを通して、「世界青年の船」事業終了後どのような活動をするつもりなのか、代表者 10 人が熱く語った 5 分間のビデオを流した。このプレゼンテーションを通して、私たち一人一人が子供の権利を守る責任があり、そのためにどうすべきなのか今後も考えていく必要があるというメッセージを伝えた。

※ JK ビジネス（ジェーケービジネス）とは、女子高生（JK）による接客からマッサージ、時には性行為に至るまでのサービスを売りにしたビジネスである

■ダイバーシティ推進とインクルーシブ社会の実現コース

ダイバーシティとインクルーシブ社会コースのプレゼンテーションは、五つのセッションで議論した四つのトピックについてグループに分かれて発表した。一つ目のグループは、障がい者について発表を行い、車椅子の女の子の対人関係や成長を取り上げた映像を流した。また、ピアノとギターで「イマジン」をバックグラウンドミュージックとして演奏しながら、様々な文章を手話に翻訳しつつ読み上げた。

二つ目のアクティビティでは、いくつかの簡単な質問に答えるとともに一歩ずつ後退することで個人がもつ特権を可視化するプレビレッジ・ウォークというエクササイズが行われた。質問は男女の不平等に関するものであった。このアクティビティは他のコース・ディスカッションから参加青年が招かれて行われた。

三つ目のグループはセクシュアル・マイノリティの問題について、二つの短い寸劇と説明を通して紹介した。セクシュアル・マイノリティについて分かりやすく説明

するためにジェンダー・ブレッド・パーソンの概念が使われた。寸隙の中では、インクルージョンのために、彼女または彼氏という言葉の代わりにパートナーという言葉を用いることが必要だということが述べられた。

プレゼンテーションの最後のトピックは人種と民族であった。このトピックは、参加青年のルーツが世界に広がっていることを表した世界地図に関する自主活動やPY セミナーと関連していた。更に、短い寸劇によってマイクロアグレッション（些細な攻撃）の説明が行われ、私たちがいかに意図せずに他者を差別しているかが実演された。

結論として、インクルーシブ社会を築くためには、私たちは無意識な偏見に気が付く必要があり、忍耐や注意深さ、共感や平等な待遇といった社会が取り組まなければならない価値があると述べられた。社会が排他的な実践により人々を障がい者にしているのであり、男女の平等は女性だけでなく全ての人々のためのものである。また、愛はどのような形でも愛なのだから、人々は自分自身に素直になるべきであり、私たちの肌の色や素性は私たちを定めるものではない。全てのものが白黒つけられるものではなく、より良い社会のために私たちには違いを認め合うことが求められている。

■防災活動のための人材育成コース

防災のための人材育成コース（DRR）で学んだ多くの興味深い内容を 20 分間に凝縮して伝えることは簡単ではなかった。そこで、最初に国連による「災害」と「防災・減災」の定義を紹介した後、セッション１で行ったエクササイズを紹介することとし、外国参加青年は国ごと、日本参加青年はレター・グループごとに分かれ、それぞれの国のリスクレベルを「脆弱性」「影響の受けやすさ」「回復力」の観点で、「とても低い」から「とても高い」までの５段階で考えてもらった。

５分後に各グループによる回答が出揃い、それぞれの見解を述べてもらった後、「世界リスク指標　(WRI)」に基づいた災害リスクレベルを発表したが、予想が的中している国もある一方で、大きく外れている国もあった。それはリスクの捉え方の違いからくるもので、災害の発生頻度によると考えるグループもあれば、リスクに対してキャパシティーがどれだけあるかによると考えているグループもあったからだ。実際のところ、世界リスク指標は、自然災害の発生率のみならず、その国がどれだけ影響を受けやすいか、対処能力が大きいか、などの要素を掛け合わせて算出されるものである。

続いて、スリランカの参加青年が「私は当初、スリランカの災害リスクはとても低いと考えていた。なぜなら、スリランカは小さい国だからだ。しかし、このクイズを授業で体験し、実際に自国の災害リスクは世界リスク指標によると非常に高いという事実を知った。このコースに参加して、自身の防災意識を変えることができた」と語った。

さらに、ペルーの参加青年の一人が、自身の住む地域の災害リスクについて紹介し、今後の抱負について語った。「私の住む地域はすぐそばに海があり、津波の危険性が高い。しかし避難経路が明確に定められていないうえ、高いビルがないため避難する場所がなく、その対策は十分だとは言えない。帰国したら地域の学校に働きかけ、津波が起こった際の避難所とし、そのことを地域住民に啓蒙することが有効だと考えている。」

最後に、コースの参加青年が皆に共有したメッセージはシンプルであった。それは、「我々のコミュニティをより安全にするために行動すべきなのは我々自身であり、失わなくてよい命を救うために計画性をもって備えるのは我々一人一人の責任である」ということだ

コース最後のアカデミックな学びとなった、セッション５で扱ったアントノフスキー博士によるストレス対処理論についても発表した。発表者はこの理論について解説し、災害後にはトラウマを引き起こす理由の代わりに、幸福感をもたらす理由について焦点を当てることがいかに大切か述べた。

最後に、本コースで学んだ内容のうち、自身にとって最も価値を見出せたものについて、全員が一言ずつ話す様子を撮影・編集したビデオを上映して、プレゼンテーションを締めくくった。

■自他をエンパワーする対話コース

このコースでは、各セッションを通じてコース内の参加青年個々に影響を与えたので、エンパワメントチームはプレゼンテーションを作るために要点と、チームを元気付けたいくつかのレッスンを抜き出した。まず、参加青年はコースから学んだ APR と呼ばれる予想・参加・省察のサイクル、スパイダーウェブ、好奇心と共感などの考えを説明した。スパイダーウェブは人々がどのようにつながりを作るかの例えを表現している。それは人々は直接的でなくても他の人々や他のものを通してつながれるということを表す。好奇心と共感も同じく人々を力付けるために重要である。エンパワメントチームはこれらの概念や、私たちがコースの中で行った２分間レッスンや課題別視察など、コースについての動画を共有した。さらに、３人の参加青年はステージ上で２分間レッスンを行った。最初の発表者は二人組で体を使って１から３までを数えるアクティビティをした。二人目の発表者は彼女の個人的な経験についての話をした。「世界青年の船」事業に参加する前は、彼女は自分に自信がなく、自分自身を好きになることができなかった。この事業中、彼女は多くの参加青年には様々な知識や能力、スキルがあるのに自分には何もないと感じていた。このことについてエンパワメントチームのある参加青年に話したとき、その参加青年は彼女に鏡の前で「愛している」と彼女自身に言うようにアドバイスした。最初、彼女はその言葉を言えなかったが、エンパワメントチームがありのままの彼女を受け入れ支えていると感じ、今は自分のことが好きだと言えるようになった、という話。三人目の発表者は、このコースを通して身に付けたものは自信だと語った。自信を付けるにはチャレンジすることが重要だと彼女は言った。エンパワメントチームは彼女を安心させ、互いを力付ける確かな土台を作りあげた。相互理解には敬意を持って他者に耳を傾けることが大切である。彼女は失敗をしても大丈夫だと語り、挑戦して自分を愛するように人々を励ました。プレゼンテーションの後、エンパワメントチームはファシリテーターを前に招き、大きく抱き締めるとともに皆で共有するフレーズである「私たちはあなたを支え、信頼し、愛している」と言った。

■国際協力コース

国際協力（IC）コースチームは、全員が参加でき、かつプログラムでの経験や学んだことを共有できるアクティビティを発表した。このアクティビティは“Who Wants to be a Millionaire?”（大金持ちになりたいのは誰？）という有名な TV ショーにちなんで“Who wants to cooperate? ”（協力したいのは誰？）と名付けられた。ゲームを通じてチームが課題別視察とコース・ディスカッションを通じてどのような体験をしたのかを観客に共有することが目的であった。

外国参加青年一人と日本参加青年一人が司会を務め、国際協力の概念とその重要性を紹介した。その後、プログラムの構成が説明された。それは、IC コース・ディスカッションのメンバーが四つのチームに振り分けられ、各チームがそれぞれ競い合うというものである。五つの問題が最初の二つのチームに与えられ、次のラウンドでもまた五つの問題が別の二つのチームに与えられた。最も正解が多かった二つのチームには、そのチームの中から一人を選び、国際協力に関する活動計画を発表する機会が与えられた。司会者は、質問は「世界青年の船」事業の６週間の中で学んだことと関連があると述べた。

最初の二つのチームがステージに上がり、まず持続可能な開発目標（SDGs）に関する情報をインタラクティブに共有した。SDGs は IC コースにおける主要な論題であり、参加者全員が自国でどのような取組を行っているのか、どのような機会を有しているのかについて紹介した。JICA と AAR への課題別視察に関する情報は、それらの機関がどのようにして国際協力活動を行っているかについてゲームの参加者が正確に答えられた時に共有された。

次の二つのチームは国際法の種類、人道原則、国際協力の重要性に関する問題に答えた。また、インドとスリランカの学生と何をディスカッションしたか、コースで最も好きなこと、最も重要な学びは何かといった自由回答式の質問も投げかけられ、各チームはそれに関する各々の意見を発表した。

二つの優勝チームから一人の代表者（日本参加青年と外国参加青年それぞれ一人）が選ばれ、「世界青年の船」事業が終わろうとしているこの時、国際協力のために次にどのようなステップを踏もうとしているのかについて自身の考えを話してもらった。これは参加者全員がそれぞれの取組方で（地元における活動だとしても）国際協力に何らかの形で携わることができるということを示したことでも大変有意義であった。発表は司会者によるファシリテーターの勤労と体験談を共有してくれたことへの感謝の言葉をもって締めくくられた。

■生活習慣病コース

サマリー・フォーラムは、他の参加青年が、様々な問題に対してすばらしい理解を得たと同時に、最後の数週間までに渡って話し合ったことを聞く、すばらしい機会であった。生活習慣病コースのプレゼンテーションは、過去５回の話し合いと、寄港地活動での経験を共有する機会となった。

コースを代表する参加青年が、このプログラムで議論した四つのトピックについて短いプレゼンテーションを行った。これらの四つのトピックは、このコースにおける参加青年の情熱と興味を示している。メンタル・ヘルスや栄養学から、身体運動の増加、健康の政策決定を通した体系付けた変化を引き起こすことにまで及んでいる。持続可能な開発目標（SDGs）やたばこの規制に関する世界保健機関枠組条約（WHO FCTC）にも触れた。このコース・ディスカッションを通して、参加青年は多くの感染症ではない病気（NCDs）にとって主なリスク要因となる、四つの主要な生活習慣を変え得る選択肢を明らかにした。それらは喫煙、飲み過ぎ、身体的な不活発、不健康な食事である。このことから、発表を見ている側も含む全ての参加青年の健康に、これらの四つのリスク要因がどれだけのインパクトを与えるかを描くアクティビティを行った。観客側から出てきた有志は、リスク要因を持つ行動にこれまで関わったことがあるかどうか、前に歩をすすめるように言われた。その結果、前に進んだ観客側から出てきた有志が、最も生活習慣病にかかる重大なリスクを持つという結果となった。「世界青年の船」事業の参加青年が自分の行動を表し、自分の健康にどれだけの影響を与え得るかを知るすばらしい機会であった。

■持続可能な経済発展を実現するためのソーシャル・イノベーションコース

聴衆は沈黙で満たされた。その１分前に The True Cost というファストファッションが引き起こしている社会問題と、2010 年にバングラデシュで起きた 1100 人の死者をもたらした事故の動画を観たからだ。

この事故の直接的原因は、その縫製工場が過剰に混雑していたのに加え、労働者を支えるのにはあまりに脆弱な内部構造だったからだ。このアパレル会社はそんなに多くの労働者をその建物で働かせるべきではなかった。この事故や、世界で起きているこれに類似した事故は誰の責任なのだろうか。今回の事例は構造的な問題であり、企業と消費者がサプライチェーンへの透明性を要求しないと解決されないであろう。このような事故はとりわけファストファッション業界で起るが、特定の一つの業界に限った話ではない。

「持続可能な経済発展を実現するためのソーシャル・イノベーション」コース・ディスカッションと名付けられているように、社会的当事者意識の欠如した消費者と生産者、社会貢献意識のある消費者と生産者、社会的貢献意識の強い消費者と生産者が寸劇で紹介された。その劇では、社会的貢献意識が高い人は高い買い物をしてしまうことになりうるものの、社会全体へ貢献できるという利点が描かれた。ファッション業界におけるそのような例となる企業は Patagonia、TOMS、PeopleTree である。

社会的当事者意識のある企業を作るためには、少なくとも二つの方法がある。一つは企業の社会的責任（CSR）を考えて、それを新しいビジネスもしくは既存のビジネスの中に実行することである。もう一つは、CSR のアイディアを基にして、ソーシャルビジネスを作り出すことである。

このアイディアを実行するために、このコース・ディスカッションでは「ソーシャルビジネスキャンバス」が紹介された。これは市場介入の種類、ユーザー、顧客、収益、そして費用構造、ビジネスを通して行われる実際の活動といったビジネスにおける重要なパートを組み立てるのに役立つツールである。サマリー・フォーラムでは、ビジネスプランコンテストで優勝したチームがアイディアを発表した。

「夢のためのノート」はペルーから始まり、発展途上国の子供たちによってデザインされたノートを売ることで、子供たちに学校と授業を提供することを目的としたビジネス・アイディアである。その（再生紙で作られた）ノートを買うことで、売上の一部が短期クラスや学校を建設し、全ての安い素材で作られた備品 (椅子、机、黒板) を導入することに使われる。このユニークなセールスポイントは、子供たちの夢と、顧客、受益者が革新的かつ感情的に直結している点である。目標は立ち上げ 1 年以内に学校を 1 校建設して 30 の教室を提供することである。

サマリー・フォーラムの最後に、ファシリテーターである三橋さんは今回の「世界青年の船」事業参加青年全員の将来に向けて「将来自らソーシャルビジネスを立ち上げる際に苦戦したとしても、情熱を忘れず、自分の信じる道を突き進んでください。」とコメントをした。

リーダーシップ・セミナー

リーダーシップ・セミナーのねらい

リーダーシップ・セミナーは、以下の成果をねらい、全参加青年が参加するセミナーを 4 回実施した。

- グローバル社会において、リーダーとして活躍するための心構えを身に付ける
- リーダーシップの概念や、グローバルな環境で必要とされているリーダーシップのスキルについて整理し、理解できるようになる（調整力、公平性など）
- 事業での経験をいかして、自身がグローバルリーダーとしてそれぞれの現場で活躍できるような能力を養う

1 リーダーシップ・セミナー Ⅰ

このセッションの内容

第一回目のリーダーシップ・セミナーは、榎本アドバイザーの“What makes you come alive?”（あなたを生き生きとさせることは何か）という問いかけから始まった。参加青年は質問への回答を考える時間を与えられた後、まだ話したことのない参加青年と二人一組になって、互いの回答を共有した。その後、参加青年は席に戻り、リーダーシップについての新しい概念について講義を受けた。参加青年の多くは、今日までリーダーシップと聞くとたった一つのイメージしかないと考えてきた。それはすなわち、固定的かつ絶対的な役職（例を挙げると、会社において他者の意見を聞き入れず、自分の意見こそが正しいと考えるような社長）のようなリーダー像である。しかし、このセッションが示す次世代におけるリーダーシップとは、立場や役職に焦点を当てるのではなく、一人一人の存在に焦点が当てられるものである。

次に、このリーダーシップ・セミナー全体の柱の一つとなる概念を学んだ。それは「全ての人々はリーダーである」という概念である。これは、「ダイナミック・リーダーシップ」と呼ばれ、例えばチームとして次のステップに進む時には、いかなる場面であっても誰であっても、リーダーシップを発揮することができるという、リーダーシップの新しい在り方を示している。

その後、リーダーシップの源泉についてディスカッションをした。それぞれのリーダーシップがどこから来るのかを明確化するためには、それぞれの信念や人生の目的を見つめる必要がある。それらを明確にするために、参加青年は自身に対して「なんのためにこのプログラムに参加したか」、「このプログラムに関わるうえで大切にしたい信念はなにか」を問うアクティビティを行い、その答えを他の参加青年と共有した。

最後に、参加青年は自分の墓石を思い浮かべ、「あなたの人生をどのようなものにしていきたいか」、「あなたが死ぬ時に、他者にどのような形で覚えてもらいたいか」、「あなたが死ぬ時に、家族や友人に何と言われたいか」という三つの質問についてディスカッションした。

これらの新しい概念と考え方を組み合わせると、私たちが人生の目的に気付くと、自らの信念を発見することができ、そこから自分が取るべき行動が導き出せる、ということが分かる。こうしてリーダーシップは生まれる。

セミナーが終了する前には、質疑応答の時間が設けられた。参加青年の多くは、人生の目的に気付くことができたと同時に、やや戸惑いもあった。30 分程度の議論を展開したが、全ての質問を網羅することはできなかった。

このセッションの主な学び

このセミナーからは二つの重要な学びを得た。一つ目はリーダーシップの在り方である。集団の前方、左右、後方など、あらゆる角度から発揮することができるものであり、誰しもがリーダーとして自身の立ち位置を自覚することが重要であることを学んだ。

リーダーシップの源泉とは、信念と人生の目標である。自分の信念を明確化するために、「なぜこのプログラムに参加したのか」「このプログラムに参加するうえで大事なことは何か」「このプログラムに参加するうえで、どのような立ち位置にいるのか」という三つの質問を自分自身に問う必要がある。このプログラムの参加青年として、私たちのリーダーシップに対する信念は、社会貢献ができるようになるために自分たちを成長させることから始まる。リーダーシップの源泉の二つ目は、人生の目的を明確化することである。人生の目的、信念、そして行動を起こすことが、内なるリーダーシップの要素である。

また、自分自身の墓碑銘を考えるというワークからも重要な学びを得た。どんな墓碑銘にするか決めるためには、「あなたの人生がどうあってほしいか」「あなたが死ぬとき、あなたのことをどのように記憶していてほしいか」「あなたが死ぬときに、家族や友達にあなたのことをどのように語ってほしいか」という三つの質問を自分自身に問いかけなくてはならない。このワークからも、自分の人生の目標と信念を理解することの重要性を学ぶことができた。

プログラム全体を見たときに、このリーダーシップ・セミナーがスケジュールの序盤に設けられていたことは非常に有意義だった。今回のセッションで、アドバイザーから全ての参加青年に対して、このプログラムに参加した意図は何かという質問が投げかけられた。この問いから、参加青年はこのプログラムに参加した目的は何であるのかということを再確認するために、自分自身を見つめ直すことができた。この経験は、これから始まる船上での生活をより有意義にするための機会となった。

「全ての人はリーダーである」という考え方は、このリーダーシップ・セミナー及びプログラム全体において最も重要なキーワードの一つであると考える。このセミナーにおいては、「前方からのリーダーシップ」「左右からのリーダーシップ」「後方からのリーダーシップ」という三つの立ち位置を学んだ。従来型のリーダーシップは「前方からのリーダーシップ」であると考えられるが、この船の中でさえも、それぞれ全く異なる個性を持つ人々が多く存在している。このプログラムでは、それぞれの人々が、自分が参加したいプロジェクトにおいて、三つの立ち位置からそれぞれのリーダーシップが発揮できる機会があるのではないかと考える。

2 リーダーシップ・セミナー Ⅱ

このセッションの内容

二回目のセッションは、参加青年が「自分がどのようなリーダーになりたいか」を探るためのコーチングに焦点を当てた。

会話や交渉、コーチングの時でさえ、聞き手は相手の話に 100% の集中力を向けることができないことが多々ある。それは聞き手である人物が、話し手の言葉に注力する代わりに、自分が次に発話するときの言葉を考え始めるからである。アドバイザーはこのセッションを通じ、「アラインメント」、つまり寄り添い、協調することの重要性について講義した。一回目のセッションで学んだように、他者へのエンパワメントは、プロジェクトを実現し、目標を達成するうえで大きな役割を担っている。他者をエンパワーする際に重要なことは、他者に寄り添うことが挙げられる。誰もが、それぞれの意見や行動規範をもっている。その意見や行動規範は、他者との交渉や相互理解の過程において、相手に影響を与えており、このアラインメントは継続的にその人の考えによって変わっていくものである。

同じ目的に向かって異なる意見や行動規範を持つ人たちが協調し、歩み寄ることが、集団のアラインメントである。この過程では、多くの場合、目的や共通の目標を見出すことはできるものの、更に踏み込んで、信条や意識の共有、真の相互理解を達成することは困難が伴う。

このセッションの学びにつながるもう一つのキーワードとして、コーチングが挙げられる。コーチングとは、他者をエンパワーする対話であり、それを実践するには、良き聞き手となることが重要である。この対話は、誰かに対して、その人が持つ知識や意見を気付いてもらう過程でもある。コーチングでは、「人は皆、生まれながらにしてなにかしらの存在価値や才能を有している」ということを基本理念としている。原則として、コーチングとは対象者の話を集中して聞き続け、ディスカッションへとつなげていくことである。講義を通じて、アドバイザーは、良い成果につながるコーチングの実践のために必要な五つの要素を挙げた。

- 好奇心…コーチングとは他者の視点を理解することが重要である
- 直感…コーチングの最中に、対話の流れを作るために、直感は不可欠である
- 積極的に相手から学ぶ姿勢…積極的に相手のことを知ろうとする姿勢は、コーチングをより有意義なものにする
- 自己管理…成果を最大化するためには、コーチングのセッションを巧みに管理する必要がある
- 傾聴…コーチングでは相手の言葉を受け入れ、その真意を理解することが求められる

このセッションの主な学び

セミナーから学んだ哲学的な考え方に、「人は誰しも生まれながらにして創造的であり、存在価値を有している」というものがある。この考え方は私たちがある集団においてどのようなリーダーシップのスキルを発揮するか、という点で参加青年を刺激した。例えば、シンプルな日常の一幕ーにっぽん丸のキャビン生活がどうあってほしいかーにおいて、キャビンメイトと直接話すワークがあったが、この対話は、参加青年が個人の信念や相手に対する期待、キャビン生活に対する希望を表現する機会となった。リーダーシップを発揮する際に、その集団が共有する理念を見極め、体現することは非常に重要である。参加青年がキャビンメイトと一緒に対話の時間を持てたことは、各自が将来、リーダーシップを発揮する際に、その集団の中で理念を共有することが重要であることに気付かせてくれるワークであった。このワークを通じて、アラインメントの概念を理解し、対話を通じ、複数人がお互いの異なる（時には衝突する）目的についてどのように歩み寄ることができるかを検証することができた。

このセミナーから得られた成果は、GROW Model と呼ばれるコーチングの流れが学べたことだ。この流れは、四つの要素：Goal（目標）、Reality（現実）、Option（選択肢）、Will（意志）に分けられる。このモデルから、現実世界を山の麓、目標は山の頂点だとした場合に、山の頂点に到達するためにどのように手段を選択するか、また山の頂点にたどり着くための意志の有無をどのように測るかを学んだ。

全体的に、参加青年はこのセッションで自身の目標と、リーダーシップの資質について理解を深める機会が与えられた。また、セッションを通じ、コーチングの技術を用いて参加青年が自身の可能性と様々な人生の目標を発見できた。

3 リーダーシップ・セミナー Ⅲ

このセッションの内容

第三回目のリーダーシップ・セミナーは、冒頭で二人一組になって、「あなたは何に対して情熱を感じるか」という質問を尋ね合うワークを行った。このワークは、参加青年各自の情熱に目を向け、どこにエネルギーの源泉があるかを確認するために行われた。このセッションのテーマは、「どうやって世界をエンパワーするか」であった。世界認識と真の責任という二つのトピックについて、参加青年はこの世界で起きている様々な問題について意識を向けるワークを行った。その後、参加青年は、「世界が直面している地球規模課題はどのくらい深刻か」という質問と、「それらの課題に対してあなたが負うべき責任の大きさはどのくらいか」という、二つの質問について考えた。このワークによって、参加青年は世界の課題の大きさと、自分たちが持つべき当事者意識の間に乖離があることを発見し、世界で起こっていることに関心を持つことに加え、そこに対して当事者意識を感じられることで、世界でリーダーシップを発揮できるようになるということを学んだ。

その後、参加青年が世界で起きている問題に目を向け、自身の葛藤や心の痛みを表現したり、自分の目的と情熱について発表する、3P モデルと呼ばれるワークに移った。3P モデルは私たちが感じている葛藤や心の痛みを声に出すことによって、世界の課題とそれに対する当事者意識を育てることに役立つということを学んだ。このワークは、心の痛みを悪い感情として抑えつけるよりも、心の痛みに向き合い、見つめることによって、その痛みを起源に、世界がより良い場所になるように行動を起こすことができるということを参加青年に教えてくれた。また、心の痛みは、まずそれを感じることから、その先にある愛や情熱や協調や目的に到達できることを学んだ。

このセッションの主な学び

このセッションを通して、世界の課題やそれに対する当事者意識を持たずに、グローバルリーダーを語ることはできないということを学んだ。それはすなわち、“Think Globally and Act Locally”（世界を見つめつつ、自分がいる社会で活躍する）をいかにして実践するかという議論でもある。さらに言えば、いかにして世界の問題に意識を向け、それらの諸課題に対して当事者意識を持って、より良い世界を築くためにどんなリーダー的役割を担えるかを理解することが重要である。グローバルリーダーは、必ずしも海外で活躍する人を指すわけではない。世界動向に目を向けて、行動が起こせる人こそが、真のグローバルリーダーである。今回のセッションで、世界の問題に意識が向いているだけでは不十分であり、問題解決に向けた行動を起こすことができる当事者意識を持つことの重要性に気付いた。今日のリーダーとは、「世界で起きている諸課題を鑑み、その解決に取り組む」と宣言できる人物でなければならない。地球規模課題に対して関心を持つことに加えて、そこに当事者意識が芽生えることで、現実社会でリーダーシップが発揮できるようになる。

このセッションではさらに、苦悩と共感について扱った。人生における苦悩を共有することは、共感や愛を創造するプロセスでもあり、3P モデルは私たちの苦悩、人生の目的、生き生きとできる瞬間を理解するための貴重な機会を与えてくれた。

4 リーダーシップ・セミナー Ⅳ

このセッションの内容

最初に参加青年は、各国の外国参加青年１名ずつと、複数名の日本参加青年で構成されるグループに分かれて、アイスブレイクを行った。その後、参加青年は自分が持っている強みとスキルを上から順に五つ挙げるワークを行った。リーダーシップ・セミナー委員が、榎本アドバイザーによるこれまで三回のセミナーの要旨を発表し、学びを振り返った。

続いて、リーダーシップ委員は SDGs（持続可能な開発目標）について簡潔に紹介する映像を見せ、説明を加えた。16 のグループに分かれ、それぞれのグループに SDGs の目標のうちどれか一つに関する資料が与えられた。それぞれの目標を達成するプロジェクトを作るために、15 分間で SDGs の内容について理解し、達成すべき目標の背景にある問題と、どんな解決策がありえるかを考えた。次の 40 分間で、各グループはプロジェクトの詳細について話し合い、90 秒間のスピーチによる発

表の準備をした。順不同で各グループ 90 秒間でそれぞれのプロジェクトを発表し、その後、優れたプロジェクト内容に対して 1 位から 3 位まで投票を行った。

総括として、リーダーシップ・セミナー委員は、参加青年が何を学んだか振り返る時間を設け、このプログラムで学んだリーダーシップのスキルを将来、それぞれの環境で活用するように呼びかけて、セッションを終了した。

このセッションの主な学び

最後のリーダーシップ・セミナーでは、参加青年は自分たちがどのように社会貢献できるかというテーマで深いディスカッションをすることができた。SDGs のうちの異なる目標を各グループに与えることは、それぞれが違う目標について話し合うという作業でありながら、関連し合っている地球規模課題、例えば教育の機会の不足や環境問題、武力紛争や男女間格差などについて、多様な解決策を提案する機会となった。中には SDGs についてそこまで詳しくない参加青年もいたが、各グループに与えられた目標は、今日、私たちが直面する課題と、参加青年がこの事業の後に社会貢献できる分野とをうまくつないでくれた。各国の参加青年が各グループに必ず一人はいるように振り分けられていたため、それぞれの国の視点から地球規模課題について理解を深めることができた。長時間に渡るセッションではあったものの、参加青年は自分たちがどのように世界と地域の課題を解決できるかについて、楽しく集中して議論を交わすことができた。セッションの最後に行われた各グループが考案したプロジェクトのスピーチは、創造性、情熱、実現可能性という面において非常に刺激的なものとなった。スピーチの中で論じられた課題や解決方法は多種多様だったが、全てのグループがこの事業で培ったネットワークをどのようにいかすことができるかについて言及しており、参加青年が事業を通して何を得たかを物語っていた。

5 アドバイザーのコメント

リーダーシップ・セミナー担当アドバイザー
榎本英剛

まず陸上で行われた第 1 回のセミナーでは、「自分をエンパワーする」というテーマの下、リーダーシップにおけるパラダイム･シフトについて話した後、各人にとってのリーダーシップの源泉となる「信念」及びその大本にある「人生の目的」についてワークを通じて参加青年に探ってもらった。

船上に場所を移して行われた第 2 回のセミナーでは、「他者をエンパワーする」というテーマの下、「集団的な信念」とそれを導き出すための「アラインメント」というプロセスについて説明し、それについてディスカッションを行った後、人の可能性を引き出すためのコミュニケーション手法である「コーチング」について実演とともに紹介し、参加青年にも体験してもらった。

第 3 回のセミナーでは、「世界をエンパワーする」というテーマの下、「世界認識と真の責任」を育む重要性について説明し、その方法として各人が感じる痛みに焦点を当てることを促した。次いで、各人が感じる痛みと情熱を結びつけたところにその人固有のリーダーとしての役割を見出し得る可能性について「3P モデル」を用いて説明し、ワークを通じてその役割について参加青年に探ってもらった。

これら 3 回のリーダーシップ・セミナーに加え、番外編として私が関わっている「トランジション・タウン」という英国発の市民運動について紹介する機会をいただいた。その意図は、この運動が私の提唱する「出番型リーダーシップ」に基づいて実践され、成果を上げていることから、参加青年がより現実的にこの新しいリーダーシップ・モデルについてとらえられるようにしたいということであった。

私が本事業に関わるのは今回で 3 回目となるが、今回は依頼を受ける前から入っていた仕事の関係で、横浜からシンガポールまでの区間乗船という形となった。そのため、内容的には前回関わった二年前の事業の時に行ったものを基本的に踏襲したものの、その際には全事業期間にわたって行ったリーダーシップ・セミナーを私が乗船中の最初の期間に集中して行った点が今回の大きな特徴となった。この違いが参加青年にどのような影響を与えたかはっきりとは分からないものの、私としてはこれまでの経験からリーダーシップ・セミナーについては事業の前半部分で取り上げた方がいいと考えていたので、今回はやむなくこういう形となったが、今後も比較的早い時期に行うことを提案したい。

参加青年の評価としては、私の乗船中に取った無記名のアンケート結果によれば概ね好評であったが、傾向として感じたのは学生の割合が多く、年齢的にも比較的若い日本参加青年にとっては内容的にちょうどいいか、少し難しいという反応が多く、海外参加青年の中で社会人経験もあり、年齢的にも比較的高い人たちからはより実践的な内容を求める声が多かったということであった。

それから、今回残念だったのはただでさえ乗船期間が短かった上、横浜を出港して数日間はインフルエンザの蔓延を予防するため基本的にプログラムが中止ないし延期され、参加青年と話す機会が非常に限られてしまったことであった。それでも規制が緩められた後は夜にリーダーシップ・セミナーやトランジション・タウンについての質疑応答セッションを開催したり、食事の際に席を共にしたりするなど極力多くの参加青年と接するように心がけた。セミナーだけでなく、そのような対話を通して少しでも参加青年の学びや気付きに寄与できたことを願っている。

プロジェクトマネジメント・セミナー

プロジェクトマネジメント・セミナーは、以下の成果をねらい、全参加青年が参加するセミナーを 3 回実施した。

- プロジェクトを実施する上で基礎となる、プロジェクト・マネジメントの概念を理解する
- 参加青年はプロジェクト・マネジメントの概念について理解し、プロジェクトを計画・実施する際、より実現可能な形で企画・提案ができるようになる（論理的思考力、企画力を身に付ける）
- プロジェクトの計画、準備、実施、評価の各段階で活用できる具体的なマネジメント手法を学び、活用できるようになる

1 プロジェクトマネジメント・セミナー Ⅰ

このセッションの内容

第一回目のセミナーでは、プロジェクト・マネジメントの二つの基本的な問い、すなわち「プロジェクトとは何か」「誰がプロジェクトリーダーになれるのか」のことについて学んだ。

プロジェクトとは何か

「プロジェクト」とはユニークな製品やサービス、結果を生み出すことを目的とした短期的なものを意味する。「プロジェクト」は短期的であり、その開始時期と完了時期はきっぱりと明確化される必要がある。もし「プロジェクト」が長期的に実行される場合は「プログラム」と扱われるということ。そして、「プロジェクト」を実行するにあたり、スコープ（範囲）と必要なリソース（資源）の定義がプロジェクト成功には不可欠である。

プロジェクトリーダーとは

プロジェクトを適切にマネジメントするためには「プロジェクトリーダー」と呼ばれるリーダーシップが必要であり、リーダーは正直で誠実であり、献身的で、責任感のある人が全うできるポジションである。プロジェクト・チームを牽引するためにはチームに合わせて統率することが必要であり、プロジェクトの進捗状況を的確に説明できるような優れたコミュニケーションスキルも求められる。状況に応じて、柔軟な対応を求められた時も、それを肯定的に受け入れ、時にはその変化すらも楽しみ、そして何よりもクリエイティブであり、革新的であることにおいて貪欲であり続けられる特徴を兼ね備えてこそ理想のプロジェクトリーダーへと近づける。

講義を通して、アドバイザーは理論的なことだけでなく、プロジェクト成功へ貪欲に挑戦するリーダーになるために大切な、実践的に使えるスキルの習得を目指すことの重要性を強調した。このセッションでは、プロジェクト・チームの主導方法として、効果的なコミュニケーションの取り方や、より良い結果へと導くためにリーダーとしてどのように周囲に影響を与えるべきか、などのプロジェクトリーダーの資質についても議論した。こうしたスキルは、プロジェクトが問題に直面したときにこそ重要であり、プロジェクトを危機から救い、正しい方向へと立て直すスキルはプロジェクトを担うリーダーにとって不可欠である。仮にたった一人、自分だけでプロジェクトを開始したとしても、気付けば複数の人とプロジェクトを進めているということは多々ある。そのため、プロジェクト・マネジメントでは、異なる分野の有識者が集まり、異なるアイディアを集められることという点で、多様なバックグラウンドを持つ人々との意見を交換し、協力を得ながら、より良い結果に導くことも求められる。そのため、プロジェクトを牽引するリーダーには、優れたコミュニケーション能力が求められる。アドバイザーは、セッションの最後に、思考は結果を大きく左右するため、プロジェクトを担うリーダーは、常に

よりよい結果に導けるようなポジティブな影響を周囲に与えられるような人物でなければならないと語った。

このセッションの最中、アドバイザーは各委員会メンバーへ、質問者へのマイクの受け渡しや、ディスカッションの回答集計など、当日のセミナー進行補助のための役割を与えることによって、プロジェクトのメンバーに、「自分がチームの一員である」ということを自覚させることの重要性を伝えた。

このセッションの主な学び

セミナーを通じて、プロジェクトとは、特定の目的を達成するために計画された活動の集合体であることを学んだ。プロジェクトとは有限で一定期間の間に実施されるものでなくてはならず、長期的なものは「プログラム」と扱われる。これらの内容に加え、参加青年はプロジェクトリーダーにとって必要な七つのスキルを学んだ。

1. 正直で誠実であること
2. 献身的であること
3. 責任感があり、説明責任を果たせること
4. コミュニケーションスキルに優れていること
5. ポジティブ思考で自信を備え、現実的であること
6. 状況に応じて自己の考え方を変化させられること
7. 変化をもたらせること

プロジェクト成功のための方程式として、アドバイザーは次の三つの要素に言及した。①何をするのか、②どのようにするのか、③誰のためにするのか。例えば、一つ目の要素では、これまでにない新しいプロジェクトを始めるのか、あるいは既存のプロジェクトの改善を目指すのか。プロジェクトの目標が明確でなければならない。二つ目の要素では、一人で実施するのか、誰かと一緒に実施するのかなどが挙げられる。いつ、どこで、誰とプロジェクトが行われるのかを踏まえて、プロジェクトに必要な資源が何かを考えなければならない。三つ目の要素では、アドバイザーは誰がそのプロジェクトの受益者となるかを定義する必要性を語った。特に、そのプロジェクトから得られる利益が社会、経済、政治、技術、健康など、何に関する利益なのかどうかが明確に語られていなければならない。最後に、人生を自分が思う「成功」へと導くためには目的を持つことが重要であり、その目的はすでに自分の一部として存在し、これをプロジェクトと見立てた場合、目的達成に向けて突き進むことが大切であるということを学んだ。

2 プロジェクトマネジメント・セミナー Ⅱ

このセッションの内容

第二回目のセミナーでは、プロジェクト・マネジメントの基礎、つまり①プロジェクトの定義、②プロジェクトの企画、③プロジェクトの管理の三点についてディスカッションした。

プレゼンテーションを通して、アドバイザーは、プロジェクトの定義とは、プロジェクトを行う際の核であることを強調した。プロジェクトを定義する段階では、プロジェクトを達成するためのチームを作るとともに、プロジェクトの目的をはっきりさせることが求められる。プロジェクトの目的をはっきりと自分自身が理解することは最も重要なことである、という認識の下、このセッションでは、自分自身のプロジェクトの目的について考える時間が与えられた。その後、数名の参加青年から各自のプロジェクトの目的を聞き、アドバイザーは、プロジェクトにおいて、自身の強みや人生経験、職歴、プロジェクトに携わるメンバーの成長の機会になり得るかどうかなどを見極めるべきであることを参加青年に伝えた。

プロジェクトの企画とは、どのようにしてプロジェクトを成し遂げるか、または、プロジェクトを成し遂げるために何ができるか考えることである。プロジェクトの達成方法を考える際には、具体的でかつ、数値化などにより知覚することができ、明確であり、実現可能かどうかに注目し、その上で計画を立て、分析し、改善点を含めてそれを再び実行することが重要である。特に、「何ができるのか」「これをすることによってどのような利益を得ることができるのか」「いつ実行するのか」「どのようにして成果は計ることができるのか」などの質問を自分に問うことは有効な手段となる。この理論を実践するために、参加青年として期待されている成果物やプロジェクト達成方法を各自、三つ挙げて、他の参加青年と共有する時間が設けられた。

プロジェクトの管理において忘れてはならないことは、リスクマネジメントである。プロジェクト達成方法を考える際には、常に何かがうまくいかなくなることを念頭に置き、その代替案の達成方法も考えておかなければならない。代替案を準備しておくことは、一つの方法がうまくいかない時に、別の方法に切り替える際の準備時間の節約し、効果的に軌道修正を行うことができる。

このセッションの主な学び

このセッションでは、プロジェクト・マネジメントの基礎と、機能するプロジェクト・チームを築き上げることの重要性について焦点が当てられた。

プロジェクト・マネジメントの基礎

プロジェクトを実行する時や目標の達成に向かって行動する時、プロジェクト・マネジメントの基礎としてプロジェクトの定義と何をどう成し遂げたいのかを可能な限り詳細に考える必要がある。例えば、どのようにして、どこでプロジェクトを達成し、どのような情報や資金が必要なのかという質問を自分の中で繰り返し問い直すことが重要である。プロジェクトの企画においては、不測の事態が起こることを十分認識し、予防できるミスを予め見据え、仮に何かが起こった時のために別の方法を考えておき、さらにそれらの次善の策も現実的で実現可能なものでなければならない。最後に、自分のプロジェクトの進捗や成果、周囲への影響がどのようなものか、常に途中段階で確認しながらプロジェクトを進めることが重要である。

良いプロジェクト・チームの構築

大きなプロジェクトを遂行し、目標を達成するには、良いプロジェクト・チームを築くことが必要不可欠である。多くの場合、プロジェクトに関わる業務を一人で全てこなし、目標を成し遂げることは簡単ではない。一人一人が持っている多様なスキルや知識を十分にいかすべきである。プロジェクト・チームを作る際には、それぞれの興味・関心ではなく、各自の強み、人生経験、職歴、プロジェクトを達成するための機会を生み出せるかどうかによってチームメンバーを構成しなければならない。

プロジェクト・チームを統率することは、プロジェクトの管理において非常に大きな意味を持つ。目標を達成するためには、チームがどのくらいの成果を挙げているかを確認し、その成果をより大きくするにはどうすればいいかを常に考えなければならない。セッションの終わりに、レター・グループごとに集まり、グループのメンバーの強みや能力について話し合い、そのグループでプロジェクトを立案する場合、どのように各自の特性をいかし、社会の中で何ができるかについて話し合う時間が設けられた。このセッションを通じて、参加青年は、プロジェクト・チームにおいて、各自が自分の強みをいかした役割を持っているということが重要であることを学んだ。

3 プロジェクトマネジメント・セミナー Ⅲ

このセッションの内容

文化の多様性を理解することは、全ての人間にとって不可欠である。第三回目のプロジェクトマネジメント・セミナーは、参加青年の船上生活と下船後の生活で育成すべき、以下の二つのスキルに焦点を当てた。

- 効果的な異文化コミュニケーション
- 望ましい成果を導くための影響の与え方

グローバルリーダーとして、誰もが直面する文化の違いに対応する力を伸ばすことはとても重要である。このセッションでは、文化の違いから起こり得る様々な課題への対応方法として、次の四つのステップが紹介された。①違うということに気付く、②その違いがなぜ私たちの行動に影響を及ぼすかを考える、③異文化に対して歩み寄る、④戦略的にコミュニケーションを取る。

文化的背景はコミュニケーションにおいて非常に大きな役割を果たすため文化の違いについて認識を深めることは非常に重要である。人の意見やアイディアは生まれ育った環境により異なり、衝突や問題が起こった際に、私たちは多様であるという点を常に意識しなければならない。文化の違いを認識しているということは、私たちのコミュニケーション、感情、行動規範や意思決定など、様々な行動に影響を及ぼす。このセッションでは、異文化への五つの異なる対応策が紹介された。

- 適応：一方のアイディアに適応すること
- 統合：二つのアイディアをまとめて新しいものを生み出すこと
- 共創：別々のアイディアから全く別の解決策を生み出すこと
- 分離：それぞれのやり方で別々の道に進むこと
- 説得：相手に自分の考えがより適切であると説得すること

これらのコミュニケーションスキルは、交渉の場面で有効である。対面でのコミュニケーションの際には、言語力の問題などで表現する力に限界があることを認識し、相手にも話す機会を与えること。自分の話し方の特徴、方言、アクセント、発音やスピードを考慮しつつ視覚的表現を使うなどの方法を試みるべきである。文書で

のコミュニケーションを取る際には、読み手の視点を考慮しながら、簡潔な言葉を用いて詳細かつ分かりやすく記載することが求められる。俗語や専門用語を避け、定期的に相手の理解度を確認する必要があり、相手に質問の機会を与えることもその手段の一つである。

セッションの後半では、より良い成果を導き出すための戦略的なコミュニケーションの実践として、「五つのA」の活用方法を学んだ。

- アクティブリスニング (Active listening)
- 相手の視点を認識すること (Acknowledging the other party's viewpoints)
- 質問をすること (Ask questions)
- 賛成できる部分に対して賛成をすること (Agree where you can)
- より良いやり方や異なる方法を提案すること (Advice on a better/different course of action)

また、別のテクニックとして、お互いの利益に目を向ける、ということも相手の主張の背景を理解するために有効である。利益とは、原則、次の三つに分類できる。①共通の利益（両者が同じものを望んでいる）、②異なる利益（両者の利益は異なるが補足的な要素を含んでいる）、③対立する利益（一方の利益が相手の利益を上回る）。

先述した「五つのA」と、「三つの利益」の考え方を踏まえると、「すでに決定された約束事に対しても最適な代替案がある」という三つ目のテクニックを実践できる。交渉している両者にとって、自分たちの常識の外にも目を向けることで、既存の選択肢に優る新たな選択肢を創り出すことができる。

このセッションの主な学び

このセッションでは、実践的なワークを通して、参加青年は、交渉において、あらかじめ相手の動機や期待する利益を理解することの重要性を学んだ。セミナー中のワークとして、まだ話したことがない参加青年と二人一組になり、お互いに共通する興味･関心をもとにセミナーを計画した。話したことのない参加青年と「なぜこの事業に参加したのか」という質問を通して有意義な交流ができたことに加えて、このワークを通じて、参加青年の交渉のスキル、つまり聴く力、共通点を探す力、それらをもとに結果を見付け出す力を大いに発揮し、磨くことができた。

効果的な異文化コミュニケーションは、文化の違い自体や、それによってもたらされる対話時の困難について理解を深める重要な議題だった。セッションの中で紹介されたスキルは、参加青年がより活発に異文化間のコミュニケーションを実践する機会を与えてくれた。文化は私たちの考えを伝達する際にとても大きな役割を果たしているため、口頭か文章かにかかわらず、文化の多様性を十分に理解していることはコミュニケーションに不可欠な要素である。

アドバイザーは、交渉する際に、望ましい結果とは何を指すのか、はっきり定義しておくことの重要性に触れた。その交渉がどこを目指しているかをお互いが理解し、明示されていることが重要であることを学んだ。

4 アドバイザーのコメント

プロジェクトマネジメント・セミナー担当アドバイザー
ジョナサン・アラヤ

第一回目のプロジェクトマネジメント・セミナーは参加青年の発言を積極的に取り入れる参加型の講義形式で行われた。「あなたの人生において、情熱的になれることは何か？」「あなたの人生に刺激を与えた人物は誰か、またそれはなぜか？」という問いを参加青年に尋ね、前者の質問に対しては２名、後者の質問に対しては３名、全体の前で回答を発表してもらった。

プロジェクトの基本概念や目的について講義を行った後、セミナーは参加青年がどのように自身の人生をより望ましい道へ切り拓いていくことができるかを探求してもらった。その内容には、成功をどのように測るか、プロジェクトの実施やチームの運営に必要な計画の建て方などの議題も含んだ。

自分がプロジェクトを立案し、それを運営する場合に、成功させるためにはどのように目標や目的を設定すべきか、という点について問い、その回答を分析し、第一回目のセミナーは終了した。セミナー終了後、いくつかの質問が参加青年から投げかけられたが、いずれも非常に的を射ていた。参加青年に対して、どんな活動であっても自分に手伝えることがあればいつでも声をかけてほしいと伝え、質疑応答を終えた。参加青年のフィードバックによると、第一回目のプロジェクトマネジメント・セミナーは以下の点で好評だった。

- 参加青年がセミナーに関わる余地が十分に確保されていた
- 積極的な質問が多かった
- 休憩のタイミング、内容と時間のバランスがうまく管理されていた
- プロジェクト・マネジメントの概念や定義が簡潔で適切な言葉で説明されていた
- 全体的にリーダーシップの概念とのつながりがある内容になっていた

第一回目のセミナーと同じように、参加型の講義を実施したが、二回目のセミナーではプロジェクト・マネジメントの基礎を扱い、情報量が膨大であったため、理論的な内容が多く、限られた枚数のプレゼンテーションスライドで、約 240 名を対象とするのはやや困難であった。このセッションの目標は、プロジェクトをどのように定義し、計画を立て、運営するかについて理解してもらうことだった。参加青年にとってより実践的で、リーダーシップ・セミナーの内容とも関連付けられることをねらい、このセッションではプロジェクト・チームをどのように運営すべきか、という議題も含めた。参加青年のフィードバックから、このセッションは下記の点において評価が高かったことが分かる。

- 「プロジェクトにおけるリーダーシップ」という点でリーダーシップとのつながりが見えた
- アドバイザーの講義のスタイルや意図が参加青年にとって分かりやすく設計されていた
- 参加青年の積極的な交流を促し、また概略ではなく踏み込んだ議題に焦点を当てていた
- 2 時間では足りないくらい密度の濃い内容だった

最後のプロジェクトマネジメント・セミナーは、下記を含む、実践的なスキルに焦点を当てて開催した。

1. 相手の文化を理解し、多様性から生じる影響を考慮した効果的なコミュニケーションを取る
2. 他者との友好な関係性を結ぶために、異文化を考慮する
3. 文化的違いを乗り越えて、共通の目標を設定し、双方の利益を確保する
4. 望ましい成果を獲得するための交渉と良い関係を結ぶ
5. 他者の利益、思考、常識について考察する
6. より良いプロジェクトを将来行うために相手を理解し、交渉するコミュニケーションを学ぶ

参加青年の活動を観察し、下記の点について今回のセミナーが有意義だったと感じる。

- 参加青年の講義への関わりが積極的だった
- 参加青年の現状により関連性が強い項目が扱われ、共有された知識をいかすことを楽しみにしているように見えた
- 内容に対して、参加青年同士の間で多くの共感が生まれた
- セミナーの時間を二時間以下に抑えることで、より学習効果が上がった

80 名以上の参加青年から回収されたフィードバックによると、多くの参加青年が、知識や情報よりも、セミナーから得られる学びを他者と一緒に実践することに興味があることが分かった。このフィードバックでは、40% 以上の参加青年が、プロジェクト・マネジメントをより深く学ぶための追加のセミナーを期待していることがわかった。全体的に、三回のセミナーは参加青年のプロジェクト・マネジメントに対する理解を深めるという点だけでなく、プロジェクトのリーダーとして活躍する際に求められる実践的なスキルを習得するという点において良い成果を収めた。

PY セミナー

PY セミナー（参加青年が主体となって実施するセミナー）は、以下の成果をねらい、3 回実施した。参加青年は各自、興味のあるセミナーを受講した。

【セミナーを主催する参加青年】
- 自分のこれまでの経験や専門分野をまとめ、「人に伝える」という経験を通して、プレゼンテーション能力を高める
- 多国籍の人々の前に立って英語で発表し、セミナーをファシリテートするという経験を通して、リーダーシップを学ぶ
- セミナーを実施することにより、プロジェクトの企画・立案から実施までを実践できる

【セミナーを受講する参加青年】
- 同じ事業に参加している仲間にどのような背景を持ち活躍している人がいるかを知ると同時に、各国における青年層の取組について学ぶ

PY セミナー一覧

主催者の国籍（開催時間）	セミナーの題名	発表者名	目標	目標は達成できたか	感想
日本（60 分）	ワークライフバランスと時間管理術	笹山 晴香 遠藤 友紀 Ana Paula lobaton	ワーク・ライフバランスのコンセプトを紹介する。このセミナーを通して、参加青年がディスカッションを通して仕事とプライベートの両立、とタイムマネジメントが実践できるようになる。	できた。他の参加青年に自分たちの経験や思いを共有することができ、主催者の目から見て、このセミナーに参加した青年たちはワーク・ライフバランスのコンセプトを理解を深めていた。	参加型のセミナーにすることの難しさや意見を共有する前にディスカッションの時間を確保することの重要性、参加する人全員が有意義に学ぶ環境を作ることに伴う困難などを経験することができた。セミナーで紹介した映像は、ワーク・ライフバランスとタイムマネジメントの重要性を伝えていた。主催者として、このセミナーを通して参加青年が自身の生活をよりうまくコントロールできるようになることを望んでいる。
日本（60 分）	日本のテレビコマーシャルに見えるジェンダー問題	小泉 秋乃 伴 優香子	参加青年はこのセミナーを通して日本のジェンダーの問題について理解を深める。テレビのコマーシャルを題材とし、女性の地位がどのように向上されるべきか学び、また各国の社会におけるステレオタイプや男女の役割に対する社会の期待などについてディスカッションする。	できた。様々な背景を持つ参加青年がこのセミナーに出席し、積極的にディスカッションに貢献した。参加者の男女比もよいバランスで、双方からの意見を聞くことができた。	各国の様々なジェンダーの問題を理解することができたことに加え、効果的なファシリテーションについて学ぶことができた。セミナーの焦点は講義ではなくディスカッションだったため、深い意見交換をするには 1 時間は不十分であった。しかし、参加していた青年の一人が、このセミナーの後、同じトピックで自主企画を実施したため、ディスカッションの最初の機会を作ることができたという意味ではとても有意義なセミナーとなった。
日本（60 分）	各国の恋愛や性的問題について	前田 瑞歩	このセミナーは参加青年に自身の経験を振り返ることを促し、世界各国の恋愛事情について、理解を深める。本セミナーを通して、参加青年は各国によって恋愛中の当事者同士の関係がどのように異なるか、文化の違いなどから学び、恋愛によるトラブルを予防できるようになる。	セミナーの実施、運営は成功した。このセミナーの中で、主催者として、他者の立場になって考えることの重要性を繰り返し伝えた。メッセージは参加青年に届いていると実感した。	私は何人かの参加青年に背中を押されてこのセミナーを実施した。このトピックについて専門家ではない自分がセミナーを開くことに当初ためらいを感じ、また一体何人の参加青年がこのセミナーに来てくれるのか不安に思っていた。しかし、実施してみると日本参加青年の呼びかけにより、外国参加青年も多く参加してくれて、結果として参加者の人数は適切な規模となった。このセミナーを通して、私たちの「常識」が必ずしも正しいとは限らないことを参加青年が認識してくれたと思う。国によって恋愛の進め方や性教育はそれぞれで、本やメディアからそのような情報を得ることは非常に難しい。参加青年がこのようなトピックから新しい発見を得られたのであれば幸いである。
日本（60 分）	外国語教育	増渕 夏美 泉川 明香 牛田 明香里 田垣内 義浩	このセミナーのねらい： 1. 参加青年は各国の言語教育の状況をお互いから学び、それぞれの事例から言語教育の違いを比較し、分析する。 2. 言語教育に興味・関心のある参加青年のネットワークを築き、今後の活発な情報交換のコミュニティを作る。	できた。このセミナーに参加した青年からは、「ディスカッションにもっと時間が必要だった」という声をもらった。この事業が終わった後も友情が続き、意義のあるディスカッションが継続できることを望む。	セミナーを通して、教育分野に置ける課題に対するたくさんの解決策を知ることができた。多くの国で、教育は形を変え続けて今日に至るが、教師に対する研修の不足が、現在の教育分野の諸課題の原因の一つであることを学んだ。クラスの中で生徒との効果的なコミュニケーションを実践するためには、教師は訓練が必要であると感じた。参加青年が、それぞれの地域で実践できる具体的な解決策を提案していたことがとても嬉しかった。
日本（60 分）	理想の教育について考えよう	渡邊 秀 松井 智宏	セミナーの主催者の小学校での教員経験や、JICA でのボランティア活動について共有し、参加青年が教育がどのように生徒を育むべきか考える機会を作る。ディスカッションを通して、理想の教育とはどのようなものか、参加青年同士の視点を交換する。	できた。セミナーに参加した青年たちと有意義な意見交換ができ、また理想の教育とは何か、という点について、多様な価値観や視点を交わすことができた。	ディスカッションやゲーム、ワークショップを通じて、参加青年と私は子供たちがどのように育てられるべきか、理解を深め、共有することができた。また、様々な背景を持つ参加青年の前で、自分のファシリテーションのスキルを実践することができた。参加青年がたくさん発言をしてくれたことが非常に有意義なディスカッションにつながった。

主催者の国籍（開催時間）	セミナーの題名	発表者名	目標	目標は達成できたか	感想
日本（60 分）	2014 年のガザ紛争の経験	伴 優香子	イスラエルとパレスチナの紛争について、学ぶ。セミナー主催者の体験を交えながら 2014 年のガザ紛争の概要を共有し、世界で起きている様々な紛争と平和構築について考察する。	できた。予想以上の人数が参加してくれた。日本参加青年、外国参加青年の両方からよいフィードバックをもらい、セミナーのトピックについて自由にディスカッションする機会を提供できたことがわかった。	セミナーの準備を通して、自分自身の経験を再度思い起こし、整理することができた。人前で英語で発表をするという非常に貴重な経験ができた。セミナーはイスラエル人とパレスチナ人双方の視点に触れた。参加青年が戦争と平和について考える機会を提供できたのであればとても嬉しい。
日本（60 分）	あなたは犯罪を受け入れますか?	樋口 尚子 柳原 大地 平田 賢太朗	参加青年に、犯罪者の更生保護について考えてもらう。ワークショップを通して、参加青年はそれぞれの国で犯罪者がどのように社会から認識され、扱われ、また受け入れられているかを理解する。	犯罪者の更生保護について真剣に考える機会を提供できた。参加者が、それぞれの生活において、犯罪者の社会復帰についてより身近に感じることができるようになった。	このワークショップを通して、犯罪者の更生保護について新たな視点を得ることができた。アパートに元犯罪者が暮らすことを容認できるか、という問いについて、参加青年に意見交換をしてもらった。参加青年の中には、更生保護について一定の知識がある人も、全く知らない人もいた。セミナーは一般的に犯罪者がどのように捉えられているかを伝え、その後、自分たちの地域で犯罪者の更生保護が受け入れられる華道家を議論した。
日本（60 分）	幸福の探求	長瀬 智寛	ライフスタイルとキャリアという視点から、幸せについて考察する。「あなたが幸せでいるための秘訣は何か?」という問いから、参加青年は自身が大切にしたい人生の喜びや価値観について理解を深める。本セミナーの目的は、参加青年が自分の幸せを再発見することである。	できた。参加青年は幸せについて深く考え、多角的に幸せを見つめる機会が持てた。	セミナーの成功は準備にかかっているということがわかった。本セミナーは幸せについて考察する機会を提供し、それはある意味で、自分のキャリアについて深く考える過程ともなった。
日本（60 分）	食べ物が食事として提供されるまで - 食品問題について考えよう -	小野田 杏菜 佐藤 清加	私たちが日々食べているものが、食事として提供されるまでの過程で、どのように生産され、育てられるのかをディスカッションを通して学ぶ。プレゼンテーションとディスカッションを通して: 1. 参加青年の農業に対する関心を育む 2. 参加青年がどのように農業に関われるかを考える 3. 日々の食べ物にどのくらい化学調味料が含まれているかを理解する	できた。参加青年は食べ物を取り巻く課題を解決するための手段を考える機会を得ると同時に、それらの課題と日常生活とがどのようにつながっているか認識することができた。	主催者として、ファシリテーションとエンパワーメントのスキルを身につけることができた。講義に加え、ディスカッションとワークショップを実施した。参加青年が自分の意見をうまく伝えられなかった時に、その人が自身を表現する背中を押し、ディスカッションをうまく進行することができた。
日本（60 分）	日本の木の物語とクラフトマンシップ	鳥塚 英玲奈	日本の木と木工について理解を深める。このセミナーでは、日本の木の有効活用を紹介するとともに、木工のワークショップを通して木を使った日本の工芸に親しんでもらう。	できた。このセミナーに出席したのはほぼ全員が日本の木に関心がある外国参加青年だった。木の特性について参加青年が理解を深める機会を作ることができた。	このようなワークショップを実施したことは初めてだったが、セミナーに先立ち、必要な準備や時間の管理をすることができた。様々な国籍の参加青年の前で、木工の魅力を伝えることができ、自信につながった。日本の木工について説明する時間が十分に確保できなかったので、次回はもっと知ってることを伝え、質疑応答の時間も設けたいと思った。
スリランカ（60 分）	女性のエンパワメント	Mudusha Erandi	女性のエンパワメントという視点から、フェミニズムの思想と運動について理解する。プレゼンテーションとディスカッションを通して、女性に対する暴力（抑圧）と、それらの問題に対する解決策を考える。	できた。このセミナーにはモチベーションが高い参加青年が多く出席し、それぞれの国の女性の地位について、実例、課題、解決策や女性をエンパワーするための情熱について意見を共有した。	他国の女性の地位について理解することができ、参加青年同士が女性の今日の課題について解決策を共有できる機会がつくれてよかった。
オマーン（30 分）	あなたの価値は、 Your value is by your impact	Mohammed Qassim	青年期に自身が持つ可能性について正しく理解することは、人生においてとても重要なことである。自己への投資を正しく行うことで、私たちが社会に対して与えられる影響は何倍にも増やすことができる。このセミナーを通して、参加青年は自身の能力を見出し、社会貢献の重要性を再認識する。	できた。参加した青年たちに良い刺激を与えられたと実感している。出席した参加青年からも良いコメントが多く寄せられた。	今後、もっとたくさんのセミナーを実践するための自信を養うことができた。このセミナーは以前自分が学んだコミュニケーションのスキルを実践する機会となり、また参加青年にとっては、社会に影響を与えるためのアドバイスと未来の目標を叶えるためのスキルを身につける機会となった。
オマーン（30 分）	卒業と就職までの間の期間	Fatema Rashid Al-Maqbali	多くの人は大学の後、就職先があるという前提のもと、高校、大学、就職活動…パターン化された人生を送る。本セミナーの目的は、大学卒業後すぐに就職先を探すのではなく、自身の未来は自身で切り開き、ビジネスチャンスを掴むことの重要性を再認識してもらうことである。	目標は達成することができたが、もっと広い場所でより多くの参加青年に来てほしかった。全体的に、良い経験となった。	大学の三年くらいから職を探し始める日本の就職活動について知ることができ、非常に興味深かった。参加青年はその他にも興味深い話を共有した。例えば、日本は都市に仕事が集中し、地方には就職先が限られている。多くの参加青年が、大学の専攻と無関係の仕事に就くことが多いと話し、また給料の低いパートの仕事の存在も多く語られた。参加青年の一部はもっと長くこのセミナーでディスカッションをしたかったとかたった。私自身はたくさんの参加青年とキャリアの分野のエンパワメントやテクノロジーについて意見を交わすことがとても楽しかった。また、オマーンの就職活動事情について参加青年に理解してもらうことができた。

主催者の国籍（開催時間）	セミナーの題名	発表者名	目標	目標は達成できたか	感想
ポーランド（60 分）	グローバルリーダー活性化プロジェクト＆ネットワークの構築	Paweł Rzepecki	このセミナーは、ネットワークの構築や、協働の成功事例を見つけることにより、この事業をこれから先へと続いていくプロジェクトへと発展させることである。セミナーを通して、世界に通用する若きリーダーとして課題を解決するための、協働のための基盤を作る。	できた。10 人以上の発表者が自分たちのプロジェクトについて紹介し、参加青年を刺激し、将来自分が実践したり、関わったりしたいプロジェクトについて考える機会を作った。	たくさんの参加青年がプロジェクトのアイディアを持っているものの、同じようなアイディアを持つ他の参加青年とつながる機会に恵まれずにいた。このセミナーはプロジェクトの企画や実践を望む参加青年にとって有意義な機会を提供することができた。
ポーランド（60 分）	民主主義の誕生と死	Honorata Kopycka Piotr Jakubiak	セミナーに参加する青年たちが、自身の国の政権の体制について紹介し、政治問題についてディスカッションをする。このセミナーを通して、各国の政治形態に加え、それぞれの国が直面する政治課題について理解を深める。	できた。参加した青年たちはこのセミナーのトピックに強い関心があり、積極的にディスカッションに参加すると共に、自国の政治の状況について紹介した。	・他の国の参加青年から、民主主義のあり方を再考することができた。 ・他国の政治形態について理解を深め、政策課題についてディスカッションをすることができた。
ポーランド（60 分）	社会の発展における数学	Roksana Brodnicica	自身と他者をエンパワーするために、日常生活において数学が持てる可能性を知っていることは非常に重要である。このセミナーでは、主催者が数学の様々な側面を紹介し、参加青年はこの世界で数学がどのように活用されているかを学ぶ。また、セミナーでは参加青年同士が意見を交換する時間も含む。	できた。準備した内容は全て発表することができ、参加青年たちは高い集中力でエクササイズを楽しんでいた。	講義と参加型のエクササイズを実施したが、主催者である自分自身が、参加者からたくさんの学びを得た。また、参加青年は、論理的思考のスキルと創造力でどのように課題を解決するかを学んだ。
インド（60 分）	未来のエネルギーに関する予測	Vishal Mulchandani	セミナーの目的は、世界のエネルギーの未来について参加青年が議論することである。将来のエネルギーの需要を理解するために、セミナーではまず現在のエネルギー資源について概要を説明する。その後、参加青年は将来活用できるエネルギー資源についてディスカッションをする。	できた。参加青年はセミナーのトピックに強い興味があり、何人かは専門的な知識もあって、彼らからの情報共有はとても役に立った。また、たくさんの興味深い質問も投げかけられた。	参加青年はこのセミナーを通してエネルギーとエネルギー分野が直面する課題について理解を深めた。別々の場所で同時に多くの魅力的なセミナーが開催されるため、参加青年は興味があっても参加できないこともある。自身の企画の告知の重要性を学んだ。
南アフリカ（60 分）	ビジネスの起業方法を学ぼう	Buntu Majaja	このセミナーは、スタートアップビジネスについて、とりわけ、自分のプロジェクトをどのようにビジネスとして成立させるかに焦点を当てる。セミナーを通して、ビジネスに役立つツールや、プロジェクトをよりうまく運営する方法について学ぶ。これらの手法を学ぶことは、ビジネスに限らず、いかなるプロジェクトにおいても有益である。	達成できたこととできなかったことがあった。時間の管理は難しかったが、持ち時間については然るべき制限があるべきだということも理解できる。全体的には、伝えたいことは伝えることができた。	参加青年とこのトピックに関連する情報について意見交換することができた。また、南アフリカでの私の活動事例から、参加青年は起業し、成功する方法について学んだ。プロジェクトのあり方について理解し、成果につながるプロジェクトの実施方法について理解を深めることができた。
メキシコ（60 分）	他者の受容と環境における私たちの役割の再考	Montserrat Aguilar	このセミナーでは、私たちが暮らす地域や、地球環境を鑑み、そこに共生する私たちが果たすべき役割について意識を高める。異文化間の対話や共感する力を強めるエクササイズを経て、このセミナーは他者との共生を感じるための内省を行う。他者を理解することは、自分自身を世界の一部として存在する個として認識を深めることである。	できた。セミナーの後、参加青年からは、このセミナーの学びが刺激的であり、感謝しているとの声が聞かれた。対話形式で進行したセミナーのスタイルも高評価だった。	この事業はアイディアを拡散し、人々に刺激を与える優れた環境があるため、地球憲章の本質的なメッセージを参加青年にすぐに理解してもらうことができた。このセミナーを通して参加青年は環境分野、あるいは各自の地域で、どのような役割を担うべきかを再考し、見出すことができた。
メキシコ（60 分）	人生、障害、音楽	Noemi Eunice Edel Castillo Marcial	このセミナーの目的は、聴覚障害とインクルーシブ社会について理解を深めることである。また、参加青年のレジリエンスや決断力、能力や可能性を伸ばすこともこのセミナーのねらいである。困難を乗り越えるしなやかさや、その実体験を共有し、参加青年をエンパワーするメッセージを伝える。	できた。障害に対する意識の向上と、参加青年をエンパワーする物語の共有というふたつの目標があったが、両方達成することができた。	私はこのような機会に自分の経験を共有できたことをとても嬉しく思った。参加青年はこのセッションに対してとても前向きで元気を与えてくれるような反応を示し、建設的で生産的なコメントを寄せてくれた。多くの参加者が自身の体験を共有してくれて、どのように困難を克服したかを語ってくれて、いずれも素晴らしい物語だった。参加者は障害について、また夢を実現するために障害を持つ人々が闘っていることについて学んだ。また、聴覚障害がどのようなものかということも理解を深めてくれた。そして、それぞれが特別で素晴らしい存在だということに改めて気づいてくれた。
モザンビーク（120 分）	障害、点字、手話について何を考えますか？	Albino Manuel Duvane	モザンビークにおいて、障害をもつ人々と働いた経験を共有し、参加青年の障害者に対する理解を深める。社会と障害者との間にある壁について説明し、私たちがどのようにその壁を取り除き、インクルーシブ社会を実現できるかを考える。	できた。多くの参加青年が、セミナーの前にこのトピックに対して間違った認識や理解の欠如があったことに驚いていた。セミナーへの感謝の言葉や学びの成果は、このセミナーの目的が達成できたことを示唆している。	私はネイティブに英語を話せないため、公の場で英語を話す機会が今までなかった。そのためセミナーの前はとても心配だった。しかし、相手に伝えたいという情熱があれば言語は大きな壁ではないことをセミナー中に気付くことができた。私のセミナーに参加してくれたほとんどの青年がセミナー後に、どれほどこのセミナーが有用・有益だったかを伝えてくれた。このセミナーを通して、参加した青年は自分たちが将来行うプロジェクトで障害をもった人たちも包括していくリーダーであるという自覚を持つことができたと感じた。
南アフリカ（60 分）	持続可能な開発目標の達成のための仮想通貨の使用	Marcus Alex-Ivan Howard	本セミナーでは、仮想通貨に対する基本情報と、持続可能な開発目標（SDGs）について理解を深める。	参加していた青年たちからのフィードバックから、セミナーが目標を達成していることが読み取れる。セミナーの最中、あるいはセミナーの後に聞かれた質問から、参加者の大半がこのトピックについて積極的に理解を深めていたことがわかった。	総合的にとてもポジティブな印象をもった。機器類を担当してくれたクルーや、PY セミナー委員会のメンバーはとても効率的で助かった。彼らは発表がスムーズに行われるように管理してくれた。観客の数も 60 と、ちょうど良かった。観客と親しい関係だったことが、心地がよく対話がうまれやすい環境だった。

主催者の国籍（開催時間）	セミナーの題名	発表者名	目標	目標は達成できたか	感想
日本（60 分）	SWY キャリアフォーラム－働き方の多様性－	大穂 誠孝 井上 明日視 伴 優香子	5 名の OPY をスピーカーとしてセミナーに招き、学生を中心とする若い日本参加青年にキャリアの多様性を伝え、キャリアに対する視野を広げる。	できた。発表者のキャリアが起業家やライター、国連職員など多岐にわたり、過去のターニングポイントや新しい働き方について紹介した。日本参加青年の多くが、日本のキャリア教育では触れない多様な働き方を知るきっかけとなった。	私たちは特別なキャリアを持っている人たちから参加青年は学ぶことが多くあると感じていたためこのような経験を持っている人たちに関心があった。しかし、ぎりぎりでセミナーを開催することが決定したため、ゲストスピーカーやファシリテーターとなる人を早く決めなければならなかった。準備期間は限られていたが、セミナーに参加したほとんどの青年は内容に満足しているといってくれた。これは、参加青年のほとんどがキャリアの選択肢について興味を持っていたためで、この機会が他の人から多くのことを学べる場となった。特に日本では、大学を卒業したら会社で働くことが普通とされている。このセミナーを通して参加青年はキャリアの視点を変えて、より広い視野を得ることができた。
日本（120 分）	日本の緑茶	三木 浩江 吉田 七恵 橋本 愛 佐藤 清加 高尾 明香里	このセミナーの目標は、緑茶に対する理解を促進することである。主催者が実際、緑茶を入れることで、参加青年はその特性や種類や効能について学び、それぞれの国との文化的なつながりを発見する。	できた。参加青年は緑茶の新しい一面を知ることができた。日本のお茶の文化と、各国の文化のつながりや文化の融合について理解を深めた。	セミナーを通して、複数の主催者がひとつのセミナーをつくる意義を学ぶことができた。参加青年は以前よりも日本のお茶について知識と関心を持つことができた。
オーストラリア（60 分）	ジャーナリズム 101	Courtney Victoria Hunter	本セミナーは、ジャーナリズムの視点からニュースの報道価値について理解を深め、参加青年が自国や海外でメディアを使って効果的に社会貢献できるようにエンパワーする。	できた。セミナーの後の参加青年からのフィードバックから、参加青年はメディアの分野で活躍したいと思っている者の、それに不可欠なスキルや実践的な知識が欠けていたということを発見した。	自分の情熱や専門知識を共有する機会を通して、自信がついた。この分野における自分の知識や実践的なアドバイスを伝えたことにより、参加青年がライターとなる瞬間を見ることができ、とても嬉しかった。セミナーを通して、参加青年はニュースメディアに対して、あるいは他者に対して、自分の考えを伝達するための自信と刺激を得ることができた。

スキルセミナー

スキルセミナーは、以下の成果をねらい、2回実施した。参加青年は各自、興味のあるセミナーを受講した。

- 参加青年同士が、研修にいかせるスキル（ディスカッションのコツやプレゼンテーションの方法論など）を教え合い、また学び合うことで、参加青年一人一人が、自身に必要なスキルに気付き、研修中にそのスキルを磨く
- 事後活動に役立つスキル（ファンドレイジングの方法やキャンペーンの運営方法など）を学び合うことで、参加青年が事後活動に必要となるスキルを磨き、そのスキルをいかして帰国後、社会貢献活動に取り組むことができるようになる

スキルセミナー一覧

主催者の国籍（開催時間）	セミナーの題名	発表者名	目標	目標は達成できたか	感想
日本（60 分）	船上での健康管理	井上 明日視 藤田 愛 村岡 由佳子	セミナーの目標は PY が衛生的に正しく手洗いをすることを奨励することである。船上や訪問国で感染する可能性のある病気のリストの提示のみならず、その予防方法についても紹介する。 インフルエンザ関連のオリエンテーションは管理部から行ってもらい、このセミナーではその他の感染病、再興感染症またはノロウィルスによる感染症をから身を守ることを目的とする。	はい、セミナーの後、参加者がアルコール消毒のエリアで、他の PY にアルコール消毒の重要性を説いていた。本スキルセミナーで得た知識が他の PY にも広まったようで良かった。	医療の知識を一般の人に伝える際は、話の目的をできるだけ細かく話す必要があると感じた。また、参加者の人々の国の背景や現状を事前に知っておくこともまた、セミナーを有効にするためには大切である。たとえ興味を持つ人が少なくても、その人達が他の人々へ発信をしてくれることもあるため、セミナーを開催することは意義があると感じた。
日本（60 分）	分析的視点を持つ旅行者となるためには	長田 壮哉 三木 浩江 平賀 理沙 寺浦 立紗 由井 拓帆	このセミナーは旅行時の分析的視点を成長させる技法についてフォーカスする。ワークショップでは通常の旅行者を分析学者へと変えていく。PY はシンガポール訪問時にこのセミナーを通して学んだ能力を実際の行動にうつす。	はい。シンガポールに滞在したことのある JPY によって開催され、発表者の多様な経験のおかげでこのセミナーは有益かつ興味深い内容になった。さらに、多くの好意的感想も聞くことができた。参加者がシンガポールでの自由時間を満喫できたという声も聞くことができ光栄だった。	運営側は全員 JPY だったものの、日本とシンガポールでの背景も全く違ったため、統率するのが大変だった。しかしながら、その多様性があったからこそセミナーに多角的視点をもたらしてくれた。私自身は OPY に英語で自分が情熱を捧げることに関して発表するための自信を得ることができた。聴衆はコースディスカッションで得た知識や経験をシンガポールに応用することができた。
スリランカ（60 分）	モチベーション＆ポジティブシンキング	Achini Nadeeshani Loku Marambhage	PY はこのセミナーを通して有効活用できるモチベーションや、ポジティブシンキングについての理解及びその創出について学ぶ。モチベーションは人々の行動、欲求、願望の原動力である。また、その人の行動指針或いは繰り返し行動したいと願う理由でもある。人のモチベーションをコントロールすることは人が行動を起こす際において重要なスキルである。ポジティブシンキングは考えを構築する過程、つまりエネルギーを現実生活の中に創出または変換していく上での心構えである。このセミナーが目標とするものは船内またはそれ以外において、PY がモチベーションコントロールやポジティブシンキングのもとに、このメソッドを活用して生き生きとそれぞれの目的を達成することである。	はい、とても広がったと思う。私たちは様々な場所での良いディスカッションや異なる視点での意見交換を行い、ポジティブシンキングとモチベーションというものを通して、私たち自身の中でやるべきことの核心や共通点に変化があった。	私にとって異なる国から来た 90 人の参加者のセミナーを率いることは非常に良い経験となった。 非常に光栄で、私自分の強みや能力について考え直す機会であり、基本的に自分のスキル、知識、心構えの向上の機会であった。参加者はセミナーでの意見交換を通して影響しあった。
日本（60 分）	エンパワメントと自己表現	相埜 良子	このセミナーの目標は PY の互いを尊敬し、励ましあうスキルの向上である。 ワークショップを通して、PY が自分の感情と他者の感情について考え、夢の木を使って彼らの夢や自身や他者を励ますセンスを高め、自分自身を表現することや多様性を受け入れるスキルを育成する。	はい。セミナーは少人数の参加者同士がディスカッションを通して、船での日常の状況と重ねて、PY 同士の気持ちを尊重する関わり方を考えることができた。	セミナーの前半に、自身の子ども時代のエンパワーしてもらった経験を発表し、多くの参加者の共感があった。 ワークショップの中で、感情表現をテーマにしたロールプレイを実施した。このプログラムの船内でのグループ生活を例に、参加者はロールプレイの状況を自身の日常に照らし合わせて、感情表現についてディスカッションをすることができた。また、グループでの関わりの中で、自分の気持ちを大切にしながら、相手を尊重するエンパワメントの関わりを考えた。 このスキルセミナーの開催は私にとって、最も大きな挑戦でした。しかし、PY の仲間が準備の段階から当日の直前まで全ての準備に協力してくれたことで、私にとって、この船での仲間との関わりが、船のプログラムで挑戦するための力となり、まさにエンパワーの関わりになりました。

主催者の国籍（開催時間）	セミナーの題名	発表者名	目標	目標は達成できたか	感想
ペルー（60 分）	呼吸法	Alvaro Congrains Maeshiro	正しい呼吸法の重要性の認識向上をコントロール方法について学ぶ。呼吸は我々の思考に直結し、精神状態にも影響をもたらすものである。このセミナーでは参加者の健康とパフォーマンスにかかわる必要な知識と船上での生活で適用できるテクニックを学ぶ。	はい、前回スキルセミナーでエンパワメントについて話した際、より実用的な方法や、いつどこでエクサ左図をするかというガイドラインについてのスキルセミナーをやれれば良いと思った。	扱った内容が、人生において大切であるというフィードバックを多数得た。自分自身はファシリテーションスキルの向上を図ることができたし、何より参加者が楽しんでくれたのが良かった。また参加者は、それぞれの人生において重要であるものの、なかなか学ぶことが難しい内容についての基礎を習得した。ストレスに対処し、心安らかに生きるためのシンプルなセオリーを勉強した。
ペルー（60 分）	模擬国連一分間スピーチトレーニング	Jose Antonio Paz Krumdiek Nicole Bouroncle Morales	模擬国連の一分間スピーチの構造を紹介し、生活に必要なディベートスキルを練習する機会を提供する。このセミナーでは言語的スキルのみならず話し方やボディランゲージ、スピーチの構造についても焦点を当てる。	達成することが出来た。多くの人に対してフィードバックを行い、私たちの用意したアクティビティーを通じ、ステージ上でスピーチ練習を行い、参加者へコメントをすることもできた。	私たちもステージ上でもっと自信を感じることができた。また、自分の能力をシェアすることや、観客ではなく教える立場の役割を得ることはいつも良い経験だと思う。 参加者に対してもディベート能力を向上させ、より自信をもち、ステージ上でエンパワーすることが出来た。また数名の参加者にとって人前でスピーチを行う事が初めてではあったが、楽しみながら参加していた。
オーストラリア（60 分）	人間中心設計	Matthew Robert Keks	人間中心設計の理論とそれがどのように複雑な問題や機会に用いられているかを学ぶことを目指す。人間中心設計は人間の知見を用いて、より良い解決策を産むための創造性と共感に用いられる問題解決方法論である。この方法論は立案から製品開発、マーケティング、広告、そして学術研究までいくつかのことなるコンテキストにも応用することができる。	はい。特にセミナー内容や進行の方法について、非常に良いフィードバックを、直接またはセミナー後の船上で複数の参加者たちから得ることができた。	私は今まで、１時間という非常に短い時間の中で同内容のセミナーを開催したことがなく、また、政府関係者やネイティブスピーカーでない人々の前で行ったこともなかった。よってこれらは私にとって大変な挑戦ではあったが、成功に終わったと考える。この経験は私のプレゼンテーションとファシリテーションスキルに自信をもたせてくれた。
メキシコ（60 分）	メキシコ地震におけるコミュニケーションの重要性	Santiago Espinosa Rosales	メキシコ地震の経験を共有し、災害を通して得たコミュニケーションスキルについて理解を促す。	参加者は我々の見解についてしっかりと耳を傾けてくれた。 また、セミナーのはじめと終わりに同じアクティビティを行ったことで、いかに我々の話を通じ各グループに成長が見られたかを確認できた。もちろん、結果は良かった。 フィードバックからも、参加者が満足してくれたことが分かった。	まず、非常に厳しかった時のことを世界中の人々と共有できたことは素晴らしかった。人々にインパクトを与えることが出来たと感じ、非常にうれしかった。 また、フィードバックをもらい、我々のやったことに対する反省と成果の確認ができたことも充実したセミナーであった要因だ。 参加者は災害を経験した人々やそのコミュニティーについての学びを得るとともに、厳しい時に面した際のコミュニケーションの大切さを実感してくれた。
南アフリカ（30 分）	ファシリテーションスキル	Nelisiwe Zandile Sikhosana	質の高いファシリテーションに不可欠なスキルを磨くことを目指す。このセッションでは良いファシリテーターは他の人々の経験や期待に注意深いということを確かなものにした。ファシリテーションは参加する全員がベストを尽くして考えられる環境を作り、他人の考えを尊重する。	できたと思う。‘The Girl and the Sailor’のお話を例に、彼らの他者への見方や関わり方に影響する認識とはなんなのか、PY に示すことができたと思っている。	1 時間にセミナーの枠を伸ばすことができていれば、より参加者と関わるチャンスが増え、どのような要素が参加者に影響を与えるのか知ることができたのではないかと思う。
インド（60 分）	パブリックスピーキングと効果的なコミュニケーション能力	Sriteja Kamarsu	このセミナーでは効果的な演説方法について学ぶことを目指す。セッションを通して影響力のある演説者や大衆のやる気を引き出す人材、そしてユースリーダーになるためのスキルを向上させる。	できた。参加者はセミナーの最後には演説の主な障害を見極め、彼らにふさわしい解決策を見出すことができた。参加者は簡単なアクティビティを行い、このプログラムが有用であったかに関してそれぞれの感想を共有した。	参加者の日常生活に役立つセミナーを設けることができて良かった。彼らがそれぞれの専門において良きリーダーとなるために必要な自信を与える予定であった。参加者はアクティビティーにおいて役割を担い、私のリーダーとしての自信形成につながるコメントをくれた。
ペルー（60 分）	演劇型トレーニングを通じたチームワークの形成	Natalie Isabelle Thornberry Blanc Andrea Margarita Pajuelo Muñoz	チームワークはあらゆるリーダーにとってきわめて重要なスキルである。演劇型トレーニングを通して参加者は周囲の人への注意深さやアクティブリスニング、ネットワークトラスト、共同体意識といったリーダーシップスキルについて学ぶと共に、より研ぎ澄ますことができる。	参加者はアクティビティーを楽しんでいた。演劇型のエクササイズの後、私たちが共有したかったチームワークについてのキーアイデアを識別することが出来ていた。	他の参加者とともに作業方法について共有することができた。このセミナーでは新しいチームワークの基礎について楽しみながら学ぶことができた。参加者からは学びの過程についての自覚を高めることができたとの声が聞かれた。このセミナーは参加者にとって違う角度からチームワークを経験し、そして良いチームワークの基礎について考える機会を提供した。
オーストラリア（60 分）	性的指向と生物学的性別	Jordina Rose Elizabeth Quain	生物学的性別、性自認と性的指向の違いを理解する。参加者には包括的なリーダーとなるためのヒントや情報が与えられる。また、このセミナーでは LGBTQA コミュニティーにおける健康に関するネガティブな経験をシェアする。質疑応答の後、より包括的なリーダーになるにはどうしたらよいかについて議論した。	多くの参加者から、どのように、またなぜ多様な性別と性のあり方に対して包括的であるかという問題に対する知識と見識を得ることができたいうポジティブなフィードバックが得られた。	一般的に人は本当に性と性別のコンセプトについて理解ができていないという確信を得たと共に、SWY カリキュラムの一部として彼らに教えるべきだと思った。 生物学的な性別、性のアイデンティティや性的指向の違いについて理解を得ることが出来た。LGBTIQA とコミュニティの差別からくるネガティブな健康成果についてと同様に包括的なリーダーにどのようになるかという事を学んだ。

事後活動セッション

ねらい

- 参加青年が内閣府の実施する青年国際交流事業、IYEO 及び SWYAA について理解を深められるようセッション、自主活動に取り組む。
- 事業終了後、IYEO や SWYAA 等を通じて、様々な社会貢献活動にどのように取り組めばよいかを参加青年に伝えるために、日本及び外国の「世界青年の船」事業機参加青年がこれまで行っている事後活動の事例を紹介する。
- SWYAA のネットワークや既参加青年が所属する団体（NPO 団体等）を活用・連携し、充実した活動に発展させていくことの重要性を伝える。
- 参加青年が事業後に陸上、船内で学んできたことをいかして自国で何ができるかを考え、具体化するための活動案を作成し、他の参加者と共有するためのサポートをする。
- 既参加青年及び IYEO の代表として、参加青年と事後活動についての意見交換を行うとともに、参加青年の船内活動についてのアドバイスを行う。

活動内容

３名の既参加青年代表がシンガポールから晴海（日本）まで区間乗船し、2 月 23 日、24 日の二日間にわたり、「事後活動セッション」を開催した。本セッションは、参加青年が帰国後、各国で事後活動に携わるにあたり、どのように事後活動組織や、SWY ネットワークを活用することができるかを伝えること、また、個々人が取り組もうとする活動を実現させるうえで、参加青年同士で協力できることや、事後活動組織などが協力できることは何か考えさせることを主たる目的とした。

上記の目的を達成するため、以下四つのパートに分けてセッションを開催した。

1. 期待される事後活動（成果）とはなにか
2. ネットワーク（国・地域レベル）を活用した事例紹介
3. 参加青年たちの現時点での事後活動計画の共有
4. 居住エリアごとに分かれ、事業終了後にできる活動を考え、共有

〈セッションスケジュール〉

2 月 24 日　セッション 1

9:30 － 9:45	事後活動の目的、外国参加青年の活動紹介（小野）
9:45 － 10:15	アイスブレイキング（小田島）
10:15 － 10:45	代表者 3 名による事後活動の事例紹介
10:45 － 11:55	休憩
11:20 － 11:50	ライフストーリーテリング（中村）
11:50 － 12:00	総括（小野）

2 月 25 日　セッション 2

9:30 － 9:40	イントロダクション（中村）
9:40 － 9:55	アイスブレイキング（小野）
9:55 － 10:40	参加青年同士による現時点での事後活動計画の共有（ペア）
10:40 － 11:40	参加青年による事後活動計画の共有（全体）
11:40 － 12:00	総括、既参加青年の紹介（小田島）

事後活動セッション 1 日目

初めに事後活動の定義を紹介し、この事業が終わった後に期待されていることは何かを共有した。事後活動の形はどんなものでもよいことを伝え、外国参加青年のそれぞれの活動を映像にまとめたものを流した。アイスブレイキングではまだ話したことのない人同士で話をすること、プログラムを振り返ることを目的に、二人組で「プログラムの中で一番嬉しかったこと」を話してもらった。

小野は、事業参加後に出会った異なる回生の既参加青年と、熊本地震の被災地ボランティア活動等を行った事例などを紹介し、既参加青年同士の出会いは、新たな学びや事後活動を生み出し、既参加青年のネットワークを結ぶイベントやセミナーを開催することも自分自身の事後活動の一つとしていることを伝えた。ある活動の発案者となり、それを実行するために仲間を集めることだけが事後活動の形ではなく、誰かが何かをしたい時、助けを求められること、自分のできるサポートを提供することも、事後活動の一つの形である。そして、既参加青年との出会いはそのどちらもの可能性を広げていくというメッセージを伝えた。また、小野自身が、「世界青年の船」事業が廃止の危機に直面した直後に実施したグローバルリーダー育成事業の出身であるため、事業参加後の事後活動がいかに大切か、未来の参加青年のために本事業の学びを社会で役立てていくことの責任を自分自身の経験から伝えた。

小田島は自分が所属している団体の紹介（CISV、ガールスカウト）など、今携わっている活動の紹介をした。自分のやりたいことを続けていくことが大事、そこで得た喜びを周りの人に還元していくことで良いサイクルが生まれることを伝えた。

中村は事後活動は「自身の幸せと周りの喜び」を創っていくことだと最初に伝えた。社会貢献という言葉を二つのベクトルで表現したら、この二つが大切である。そのため 1 日目は、過去の経験から自身の「幸せ」について振り返ってもらうため、「ライフストーリーテリング」のワークショップを行った。そこから人それぞれ幸せの在り方や、情熱を向ける先が違うことを学び、自分の情熱がどこに向かっているのか探った。情熱が生まれれば、一歩を踏み出すキッカケになり、自分の道への応援者が現れ、その人たちに感謝をし、最後には社会の中で役に立ちたいという想いが芽生えてくる。それが社会貢献につながっていくことを伝えた。

事後活動セッション 2 日目

次のセッションでは、安倍昭恵首相夫人からのメッセージビデオを流した。「この事業の最大の成果は下船後の活動であり、それを期待しています」というメッセージを頂いた。

1 日目は「過去から今」を探り、2 日目は「今から未来」を創ることをテーマとした。そして情熱をどうやって現実にしていくか考えて、アイディアを出していった。そして、やりたいことを「いつ、どこで、誰と」実行していくか、大きなゴールとそれに対するスモールステップを考えた。そこから、国ごと・地域ごとに帰国後どんな活動を目指して、行動していくか話し合い、各国の青年たちに発表してもらった。どんなに小さなことでも、初めの一歩を踏み出したことが次のステップにつながっていくことを伝えた。

次に実現可能性の高いより具体的な計画を立てるワークショップを実施した。まずは、ペアを作り、個人ワークで下記内容を紙に書き出し、ペアでシェアをさせた。

1. ミッション
2. 何をしたいか
3. いつ開始するか
4. どこで開始するか
5. 誰としたいか
6. ファーストステップは何か

その後、外国参加青年は国ごと、日本人は居住エリアごとにグループ分けをし、母国語で、ディスカッションを行い、40 分間で帰国後の事後活動について下記内容を考えてもらった。

1. ミッション
2. 何をしたいか
3. なぜそれをしたいか
4. どこで開始するか
5. 誰とするか
6. 具体的な運営スケジュール

ワークショップのまとめとして、各国ごとに 5 分で全体発表を行い、アイディアを共有した。

＜オーストラリア＞

今回の事業で訪問した寄港地のように、期待に応えることのできる寄港地になりたい。強い SWYAA を作りたい。これからの参加青年への研修をするために船内の生活のビデオを作りたい。

＜インド＞

Open School の活動をしている。教育に特化した活動がしたい。7~20 歳対象に基礎教育を提供できるウェブサイト・アプリを作る。

＜日本・東海地方 1 ＞

「世界青年の船」事業のことを広報するために、3/15 － 16 に 1 泊 2 日の mini SWY を開催する。

＜日本・中国四国地方＞

中国四国エリアでは情報が不足しているので、「世界青年の船」事業参加者にそれぞれの人生・夢・国際経験についてインタビューをして、高校・大学・NPO でワークショップを開きロールモデルを見付けてもらう。

＜日本・東北地方＞

“SWYAA Post program in TOHOKU” というイベントを開催する。東北のことを紹介したり、地元の人の意識を変えたい。

＜日本・東海地方 2 ＞

地域に貢献すること・グローバルな体験から新たな視点を提供するため、グローカルインターンシップのプラットフォームを作る。

＜メキシコ＞

イラストやそれぞれの先住民の話をまとめた本を作って、メキシコの先住民の文化について子供に教育する。

メキシコの先住民から初めて、そのうち世界の先住民についても網羅したい。

＜モザンビーク＞

SWYAA の組織を作り、特別支援の必要な子供たちに向けた教育を提供する。孤児院で手話を教えたり、芸術を教える。

＜オマーン＞

SWY weeks という、視察、キャリア教育、ホームステイ、観光を含む短期のプログラムを各国で作る。

＜ペルー＞

7 － 15 歳にむけた環境、資源の持続可能性について学ぶ、クリーンコミュニティを作る。エンパワーメントワークショップを開催する。

＜ポーランド＞

「世界青年の船」事業の友達を訪ねるだけではなく、協力してプロジェクトを運営する機会を提供する“Tech lab global leader activation program”を開催する。SWYAA の組織を作り、ポーランド日本リーダー育成事業を作る。

＜南アフリカ＞

“SWY SA youth club”という青年育成、機会を与えることができるプラットフォームを作る。SWYAA の組織を強くしたい。

＜スペイン＞

「世界青年の船」事業の知名度を上げる。SWYAA の組織を強化する。ホームページを新しくして、スペインにいる既参加青年とのつながりを強くする。日本に住む予定の参加青年が 4 人いるので、日本とスペインで交流イベントをする。SWYAA 国際大会をスペインで開催する。

＜スリランカ＞

多くの青年が就職できなくて海外に移民しているのでそれを防ぐため、就職したくてもできない若者向けのプログラムを作る。

これらの発表の後、小田島からこの二日間のセッションのまとめがあり、このプログラムを通して感じたこと経験したことを生かし、このネットワークを使って、自分の夢・思いを形にしてほしいと伝えた。そして活動したことは SWYAA や IYEO に報告して、自分たちの活動を目に見えるものにしていってほしいとコメントがあった。その後、壇上に戦場にいる既参加青年を紹介し、残りの日程で話をしてみてほしいと伝えた。以上を持って、二日間のセッションは終了した。

事後活動セッション担当者のコメント

小田島早恵

今回のセッションのチャレンジは、この事業の未来はプログラム終了後の活動にかかっているということと、事後活動はやらないといけないからやるものではなく、自分のパッション（熱意）に突き動かされて行うものであるということを、いかにバランスよく伝えるかであった。シンガポールから乗船後、多くの人からこれまでのプログラムはどうだったか、まだセッションでカバーできていない部分はどこなのか聞き取りをした。事業の最後に行われる事後活動セッションの成功の鍵はこの聞き取りにかかっている。日本参加青年の事後活動だけでなく、外国参加青年の事後活動も紹介できるように、各自の事後活動を 1 分間にまとめたムービーを数名から集めて上映した。プログラムに参加している既参加青年からの情報だけでなく、他の国の青年がどのような活動をしているか知ることができ、とても評判が良かった。また、自分のパッションがなにか、なにに喜びを感じるのか、幸せと感じるのかを知るための手法の一つ「ライフストーリーテリング」をした。私が自分自身を見つめ直すのに何度も使っている手法でとても有効だからである。自分を知ることがこれからの人生でなにをしていきたいか考えるきっかけになり、それは自ずと社会に貢献につながるのである。このセッションを通じて、参加青年が自国に帰った後のことを想像し、プログラムでの経験、つながりをいかして、自分を強くし、なにか行動を起こしてくれることを願っている。自分のテーマを見付けることは簡単なことではないが、人に自分のことを何度も話していくうちに明確になっていく。このプログラムの経験がなにかの始まりになり、そこから世界に少しの変化がたくさん生まれ、世界全体を良い方向に変える推進力になることを期待して、これからも参加青年の活動を見守っていきたい。

中村雅人

事後活動セッションについて考えたとき、私は「社会貢献」という大それた言葉ではなく、それをより身近に感じられるような言葉で伝えたいと思った。最初から「大きなことをする」ということよりも、小さくても一歩踏み出すこと、それが活動における最初のステップであると伝えたかった。まずは「自分がやりたいことは何か」を探るため、自身が「幸せ・情熱を感じること」を過去の人生経験から見付けるのが大切な第一歩なのである。そして、自分の幸せを起点に誰かの喜びを創っていくことが事後活動なのであり、社会貢献になるのだという思いで、事後活動セッションに取り掛かった。

まず、事後活動セッション担当の三人で、もし自分たちが参加青年ならどの様なことをしてほしいかアイディアを出し合った。そして事後活動は難しいことではなく、自分の幸せを大切にし、やりたいことから始めていけるのだと伝えることにした。私たち三人も義務として何かを始めたわけではなく、自らが楽しく活動を始め、それがゆくゆくは自分のみならず地域や社会にとっても価値あるものになっていく過程を体験していたという背景があった。

シンガポールで乗船し、1 日目は予定通り、事後活動は難しいものではなく、まずは自分のやりたいこと・幸せを知ることが肝要だと伝えた。私自身も世界一周学校を作り、現在は日本中で「世界を知るキッカケ・好きなことに挑戦するキッカケ」を届ける活動をしていると紹介した。これを聞いた青年が「私も下船後に自分の活動を伝え、もっと地元が元気になって世界へ跳び立つ人材が増えるようにしていきたい」と言っているのを聞き、「世界青年の船」事業のつながりがそのまま日本と世界を結ぶキッカケに昇華すると確信した。

初回の振り返りを行った際、既参加青年による努力や活動あってこそ「世界青年の船」事業の航海が続き、本年度の参加青年たちもこの船に存在するのであり、我々の活動場所は船上のみならず、下船後にこそ求められるのだと再認識した。

2 回目のセッションでは、参加青年たちが国・地域ごとに分かれ自身のやりたいことを共有することで、新しいアイディアが生まれ始めた。「これまでこうした共有を行う場面がなかったので、下船後にも共に活動していける仲間を得られて嬉しかった」という反応から、内省とその共有がもたらす価値を改めて実感した。

下船後には、参加青年がこの船での体験を胸に、各々が自らの志す道へ第一歩を踏み出し、いつでも協力し合える仲間と共に邁進していくことを心から願っている。私自身も、より一層縦のつながりを強め、今後も本事業の更なる発展の一助になりたいと改めて思うことができた。

小野かつみ

今回、事後活動セッションを担当するに当たり、派遣者 3 名の共通の目標として、事後活動は決して難しいものではなく、まずは、自分がやりたいこと、楽しいと感じることが何かを認識し、それがどのように社会貢献に結びつくか、どのようなミッションを持って取り組みたいかを考えていくことから始まると参加青年に伝えたいと考えていた。また、自分自身は、回生、年齢共に最も参加青年に近い存在として、「何かを教えるのではなく、一緒に頑張ろう、と参加青年を encourage したい」と考え取り組んだ。参加青年との交流の中で、彼らは、「興味のある社会問題はあるが、どのように SWY ネットワークをいかし、社会貢献活動をするか具体的なイメージがわかない」といった悩みを抱えていることがわかり、今回のセッションでは我々 3 人の経験を伝えるだけにとどまらず、日本・オマーン・バーレーン・メキシコ・ペルーの 5 か国 7 名の既参加青年の活動紹介ムービーを作成し、1 日目の導入で紹介した。これは事後活動の多様性を紹介する上で、有益な取組であったと思う。240 名の参加青年それぞれが異なる背景・知識・経験を持っており、全員を満足させることは難しいが、それぞれの心の中に、本事業の存在意義と、世界中の既参加青年の存在が参加青年の社会貢献活動をより多様なものにしていることを伝えられたと思う。セッション終了後、何人かの参加青年から「これまで頭の中だけで考えていたことを言葉にし、共有することができた」というコメントを貰うこともできた。また、今回の派遣においては、既参加青年として果たすべき責任の大きさを改めて実感した。参加青年と生活を共にする中で、多くの相談や質問を受け、セッションの中だけでは伝えきれなかったことを伝える場も設けた。彼らは本事業で多くのことを学び、それと同時にたくさんの達成できなかった目標や悔しさを感じているように感じ、その気持ちを事業後の事後活動につなげていく後押しをすることも既参加青年としての重要な役割の一つであると感じた。